

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡
発掘調査報告書

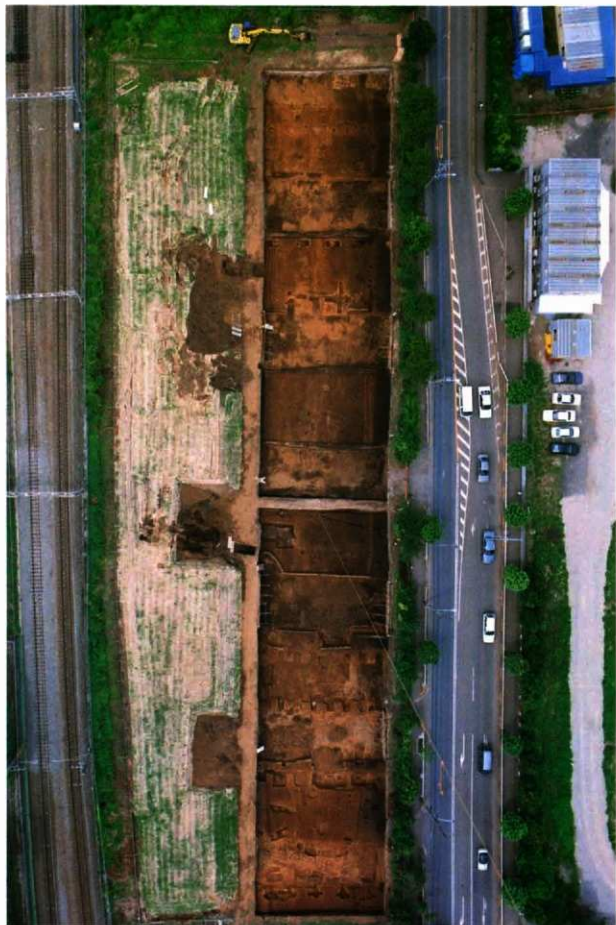
— 推定鎌倉街道 —

1 9 9 6

西国分寺地区遺跡調査会



プラン検出状況



発掘状態全景



2 ブロック西側 完掘状態 (南から)



3 ブロック西側 完掘状態 (北から)

序

発掘調査は、住宅都市整備公団による西国分寺第一団地（仮称）建設に伴う事前調査として実施しました。本調査区の位置する国分寺市泉町は、武蔵国分寺跡北西の国分寺崖線上に立地し、周囲には多喜窪遺跡・恋ヶ窪遺跡・多摩南坂遺跡・武蔵台遺跡等多数の遺跡が散在しています。こうした環境下にあたるため遺跡の存在が発掘当初より予想されました。特に鎌倉街道は、武蔵台東遺跡における平成5年度調査によりその一部が確認されており、その延長線上に位置する本地区においては、調査による遺構の確認が期待されておりました。それゆえ、発掘は鎌倉街道の検出・調査を主目的とし平成6年4月26日より開始しました。

調査の結果、当初の予想どおり鎌倉街道と推定される道路跡及び溝跡が検出されたことは大きな成果です。しかしながら遺構は所々攪乱により断ち切れ、また検出された路面と溝は数条に複雑に交錯しており、これを十分に調査するには多くの時間と労力が必要とされました。遺跡の調査は、単に遺構の存在を確認することに尽きる訳ではありません。遺跡は調査の進行に伴い、また終了後は建設工事により完全に破壊されてしまうこととなりますので、発掘にあたっては遺跡の規模・形態・新旧関係の確認等緻密な調査と克明な記録、保存が要求されます。こうした調査結果をまとめたのが本報告書です。鎌倉街道は過去幾多の先達が調査・研究し、現在も多数の方々の研究されているテーマではありますが、いまだ全容が解明されていないのが現状であると思います。本報告書が鎌倉街道解明の一助となり、新たな一頁を加えることとなれば幸いです。

最後になりましたが、限られた時間内で調査にあたられた調査団の皆さんの労をねぎらうと共に、調査の実施にあたり、ご協力いただきました関係各位の皆様及び調査にご理解をいただきました近隣住民の方々に心より感謝の意を表します。

1996年3月20日

会 長 柴崎 正次

例 言

1. 本書は、住宅都市整備公園・西国分寺第一団地（仮称）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、住宅都市整備公園の委託を受け西国分寺地区道跡調査会が実施した。
3. 調査地区は、東京都国分寺市京町3丁目2番地（「武蔵国分寺跡」北西地区）に所在する。
4. 本調査は、道路状遺構（伝承鎌倉街道上道推定路線）を主体とした調査であり、地区名は鎌倉街道地区と付した。調査面積は、2,535㎡である。
5. 発掘調査は、平成6年（1994年）4月26日から同年6月17日まで実施し、本格的な整理作業・報告書作成作業は平成7年度に行った。
6. 発掘調査は、調査員が担当した他、近藤滋氏（現・鶴巻賀県文化財保護協会調査普及課長）に指導・協力を得て行った。
7. 本書の編集は、取話秀一団長の指導のもとに、持田友宏副団長・早川泉参与の助言を得て板野香鏡が行った。
8. 本書の執筆は、I-1. =早川泉（参与）、I-2.3.・III-2.・IV =板野香鏡、II・III-1.・V =近藤滋、VI =持田友宏（副団長）、VII =取話秀一（団長）が行った。尚、執筆者名は文末に記した。
また、III-3. は金子浩昌先生（早稲田大学教授）、III-4. は松田隆夫氏（府中市生活文化部）にそれぞれ執筆をお願いした。
9. 本書の挿図・図版の作成は、田口直美・司東順香・中野宏子・伊藤俊治・小林定之が行った。
10. 出土遺物の注記は、NK（西国分寺鎌倉街道地区）である。
11. 発掘調査および本書の作成にあたって、次の方々・諸機関より御指導・御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

木下良、齊藤慎一、小林重義、竹尾進、坂爪久純、有吉重蔵、福田信夫、上敷領久、川島雅人
岩橋陽一、武笠多恵子、荒井健治、塚原二郎、中山真治、和田信行、河内公夫、谷口榮、西野善勝
藤原仕代、杉浦由恵、小川将之、甲斐博幸

東京都教育委員会、国分寺市教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、葛飾区郷土と天文の博物館、
神奈川県市文化財センター、鶴巻賀県文化財保護協会、所沢市立埋蔵文化財調査センター、国分寺市
道跡調査会、府中市道跡調査会、都立府中病院内道跡調査会、都営川越道住宅道跡調査会、武蔵国分
寺関連道跡調査会

加藤重機建設㈱、㈱こうそく

12. 発掘及び整理参加者は次の方々である。

（発掘） 金子健一、河本昌吉、石崎幸志、上原正次、内田芳文、江口朋子、岡田由紀子、渡具知喜史
岸本晃彦、小久保嘉洋、小松伸行、下川秀則、首藤仁子、鈴木純一、内藤博隆、中原淳治、中村直明
野田定男、疋田佐知子、本多聡、吉本敏夫、岩岡夢、大淵志津、木原隆、小嶋通成、橋樹吉、太田剛
高橋修二、田中早苗、伊藤信男、須賀きみ子、梅田義光、海老沢一人、大井史、木下純芳、関口良平
竹内直子、穴沢一夫、雨宮武富、矢野悦子、湯浅博、山田進、児玉紀子、長崎稔、上杉隆、塚田達也
村松弘二、木村裕昭、星野伸夫、若林忠徳、小田倉麻子、嶋志田静男、寺原千恵子、水越和也

（整理） 渡辺淳子、兼光育美、田口直美、畑守みどり、司東順香、永丘朋子、戸塚美枝子、中野宏子
藤田由紀子、飛田薫、渡辺千絵、矢野悦子、小嶋通成

西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会 長	柴崎 正次	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財副参事 (平成7年4月就任)
	秦 正博	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財副参事 (平成7年3月退任)
副 会 長	岡村 豊	国分寺市教育委員会文化財課長 (平成7年4月就任)
	天野 稔	国分寺市教育委員会文化財課長 (平成7年3月退任)
理 事	坂詰 秀一	東京都文化財保護審議会委員 (立正大学教授)
	永峯 光一	東京都文化財保護審議会委員 (國學院大学教授)
	藤間 恭助	国分寺市文化財保護審議会委員長
	清水 文夫	東京都住宅局建設部大規模団地対策室長
	林部 稔幸	東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
	永田 晃	住宅・都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
	吉永 文夫	国分寺市開発第二部事業推進課長
監 事	木羅 士孝	東京都住宅局建設部推進課開発係長
	佐々木徳明	国分寺市開発第二部開発業務課長

事 務 局

事務局長	和田 利昭	調査会職員
事務局員	夏目みね子	調査会職員

調 査 団

団 長	坂詰 秀一	立正大学教授
副 団 長	持田 友宏	日本考古学協会会員 (平成7年7月就任)
顧 問	永峯 光一	國學院大学教授
顧 問	吉田 格	国分寺市遺跡調査会団長
参 与	早川 泉	東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
調査指導員	上村 昌男	国分寺市教育委員会文化財課職員 (平成7年4月就任)
主任調査員	板野 香鏡	調査会職員
調 査 員	滝島 和子	国分寺市教育委員会嘱託職員 (平成6年9月退任)
調 査 員	伊藤 俊治	調査会職員 (平成7年4月就任)
調査補助員	小林 定之	調査会職員 (平成6年4月就任)

(平成8年3月現在)

目 次

カラ ー 図 版

序

例 言

調 査 団 組 織 名 簿

凡 例

報 告 書 抄 録

I. は じ め に

1. 調査に至る経過 1
2. 調査の方法と経過 3
 - (1)調査方法 3
 - (2)調査経過 4
3. 層序 5

II. 遺 跡 の 位 置 と 環 境 6

III. 歴 史 時 代

1. 遺構

- (1)溝跡 13
- (2)道路跡 15

2. 遺物 86

3. 武蔵国分寺跡北西地区遺跡出土のウマ遺体 94

4. 武蔵国分寺跡北西地区遺跡における古鎌倉街道のテフラと覆土 99

IV. 縄 文 時 代

1. 遺構と遺物 112

V. 小 結

1. 鎌倉街道について 117

2. 溝と道路跡の関係について 121

3. まとめ 122

VI. 総 括 125

VII. お わ り に 127

挿 図 目 次

第1図	調査範囲・グリッド設定図	2	第21図	第2面3ブロック遺構実測図	61
第2図	調査ブロック呼称図	3	第22図	第2面4ブロック土層断面図	72
第3図	基本層序模式図	5	第23図	第2面4ブロック遺構実測図	73
第4図	調査位置図	7	第24図	第2面5ブロック遺構実測図	79
第5図	周辺の遺跡と地形	8	第25図	第2面6ブロック遺構実測図	81
第6図	推定路線図・既検出位置図	10	第26図	第2面7ブロック遺構実測図	84
第7図	遺跡周辺の変遷	11	第27図	出土遺物(1)	87
第8図	歴史時代第1面遺構全体図	19	第28図	出土遺物(2)	88
第9図	第1面1ブロック遺構実測図	22	第29図	出土遺物(3)	89
第10図	第1面2ブロック土層断面図	25	第30図	遺物分布図	90
第11図	第1面2ブロック遺構実測図	26	III-3	図1 No22 馬歯出土状況/頸蓋と下顎 骨の位置推定図	95
第12図	第1面3ブロック土層断面図	29	III-4	図1 調査位置図	99
第13図	第1面3ブロック遺構実測図	30	III-4	図2 調査地第1地点の文化層と鍵テ ラ	100
第14図	第1面4ブロック遺構実測図	34	III-4	図3 サンプル採取位置図	101
第15図	歴史時代第2面遺構全体図	36	第31図	縄文時代遺構配置図	112
第16図	第2面1ブロック土層断面図	40	第32図	SK-1・SK-2実測図/出土遺物	113
第17図	第2面1ブロック遺構実測図	41			
第18図	第2面2ブロック土層断面図	50			
第19図	第2面2ブロック遺構実測図	51			
第20図	第2面3ブロック土層断面図	60			

表 目 次

第1表	出土貨幣一覧表	86
III-4	表1 調査地第1地点の自然堆積テフラ層	102
III-4	表2 調査地第2地点の古道側溝の覆土	103
III-4	表3 調査地第3地点の古道側溝の覆土	104
III-4	表4 調査地第4地点の古道側溝の覆土	105
III-4	表5 調査地第5地点の古道面トレンチ	106
III-4	表6 調査地第6地点の古道面トレンチ	108

図 版 目 次

図版—1 第1面 全景	20	図版—10 第1面 5~7 ブロック	35
1. 1~3 ブロック プラン全景 (北から)		1. 5ブロック SD-1 完掘 (南から)	
2. 1~3 ブロック プラン全景 (南から)		2. 6ブロック SD-1 完掘 (南から)	
3. SD-1 プラン全景 (南から)		3. 7ブロック SD-1 完掘 (南から)	
図版—2 第1面 1ブロック (1)	21	図版—11 第2面 全景 (1)	37
1. プラン検出 (西から)		1. SD-4・6 プラン検出 (南から)	
2. 西側プラン検出 (南から)		2. 完掘 (南から)	
3. SD-1 プラン検出 (南から)		図版—12 第2面 全景 (2)	38
図版—3 第1面 1ブロック (2)	23	1. 6~7 ブロック 完掘 (北から)	
1. SD-1・7 完掘 (南から)		2. 1~2 ブロック 完掘 (南から)	
2. SD-2 プラン検出 (南から)		図版—13 第2面 全景 (3)	39
3. SD-2 完掘 (南から)		1. 1~3 ブロック 完掘 (南から)	
図版—4 第1面 1ブロック (3)	24	2. 調査風景	
1. SD-2・4 プラン検出/SF-4 完掘 (南から)		3. 調査風景	
2. 中央部宝永火山灰検出範囲 (南から)		図版—14 第2面 1ブロック (1)	42
3. SF-5 上層硬化面 (南から)		1. SD-4 中間硬化面検出 (南から)	
図版—5 第1面 2ブロック (1)	27	2. SF-5 完掘 (南から)	
1. SD-1 完掘/SD-2・7 プラン検出 (南から)		3. SD-6・SF-5 完掘 (南から)	
2. SD-1・2 完掘 (南から)		図版—15 第2面 1ブロック (2)	43
3. SD-5 完掘 (南から)		1. 完掘全景 (西から)	
図版—6 第1面 2ブロック (2)	28	2. SD-4 完掘/SF-1 硬化面検出 (南から)	
1. SD-3 完掘/SF-4 完掘 (南から)		図版—16 第2面 1ブロック (3)	44
2. 中央部宝永火山灰検出範囲 (南から)		1. SF-2 硬化面検出 (南から)	
3. 調査風景		2. SF-5 硬化面検出 (南から)	
図版—7 第1面 3ブロック (1)	31	図版—17 第2面 1ブロック (4)	45
1. SD-1・SF-4 完掘 (南から)		1. SF-1 北側硬化面検出近景 (西から)	
2. SD-2 プラン検出 (南から)		2. SF-1 南側硬化面検出近景 (西から)	
3. SD-2 完掘 (南から)		3. SF-3 硬化面検出近景 (南から)	
図版—8 第1面 3ブロック (2)	32	図版—18 第2面 1ブロック (5)	46
1. SD-5 プラン検出 (南から)		1. 完掘全景 (東から)	
2. SD-5 完掘 (南から)		2. SF-1 完掘 (南から)	
3. 中央部宝永火山灰検出範囲 (南から)		図版—19 第2面 1ブロック (6)	47
図版—9 第1面 4~5 ブロック	33	1. 完掘全景 (南から)	
1. 4ブロック SD-5 完掘 (南から)		2. SF-2 完掘 (南から)	
2. 4ブロック 中央部硬化面 (南から)		3. SF-3 完掘 (南から)	
3. 5ブロック SD-5 完掘 (南から)		図版—20 第2面 1ブロック (7)	48

1. No.1 セクション中央部 (北から)	図版—30 第2面 3ブロック (1) -----62
2. No.2 セクション西側 (南から)	1. SD-4 中間硬化面検出 (南から)
3. No.2 セクション中央部 (南から)	2. SD-6 中間硬化面検出 (南から)
図版—21 第2面 1ブロック (8) -----49	3. SD-3 完掘 (北から)
1. No.2 セクション東側 (南から)	図版—31 第2面 3ブロック (2) -----63
2. 西側サブセクション (南から)	1. SD-4 完掘 (南から)
3. 東側サブセクション (南から)	2. SD-6 完掘 (南から)
図版—22 第2面 2ブロック (1) -----52	3. 完掘全景 (南から)
1. SD-4 中間硬化面検出 (北から)	図版—32 第2面 3ブロック (3) -----64
2. SD-4 完掘 (南から)	1. 完掘全景 (西から)
3. SD-6 完掘 (南から)	2. SF-2 完掘 (南から)
図版—23 第2面 2ブロック (2) -----53	図版—33 第2面 3ブロック (4) -----65
1. SF-1 硬化面検出 (南から)	1. SF-1 完掘 (北から)
2. SF-2 硬化面検出 (南から)	2. SD-4・SF-1 完掘 (南から)
図版—24 第2面 2ブロック (3) -----54	図版—34 第2面 3ブロック (5) -----66
1. SF-1 硬化面検出 (西から)	1. SF-1 北側硬化面検出 (西から)
2. SF-1 南側硬化面検出近景 (西から)	2. SF-1 北側硬化面検出 (西から)
3. SF-3 硬化面検出 (北から)	3. SF-3 硬化面検出 (南から)
図版—25 第2面 2ブロック (4) -----55	図版—35 第2面 3ブロック (6) -----67
1. SF-1 完掘 (南から)	1. SF-1 完掘 (南から)
2. SF-1 完掘近景 (南から)	2. SF-1 北側完掘 (西から)
3. SF-2 完掘近景 (南から)	3. SF-1 南側完掘 (西から)
図版—26 第2面 2ブロック (5) -----56	図版—36 第2面 3ブロック (7) -----68
1. SF-3 完掘近景 (南から)	1. No.5 セクション・SD-5・6 (北から)
2. SF-1 完掘接写 (西から)	2. No.5 セクション中央部 (北から)
3. SF-1 完掘接写 (西から)	3. No.5 セクション西側 (北から)
図版—27 第2面 2ブロック (8) -----57	図版—37 第2面 3ブロック (8) -----69
1. No.3 セクション全景 (北から)	1. No.5 セクション・SF-3 近景 (北から)
2. No.3 セクション西側 (北から)	2. No.5 セクション・SD-4 (北から)
3. No.3 セクション中央部 (北から)	3. No.5 セクション・SD-3・4 (北から)
図版—28 第2面 2ブロック (7) -----58	図版—38 第2面 3ブロック (9) -----70
1. No.3 セクション・SD-4 (北から)	1. No.6 セクション西側 (南から)
2. No.3 セクション・SF-1・4 (北から)	2. No.6 セクション中央部 (南から)
3. No.4 セクション西側 (南から)	3. No.6 セクション東側 (南から)
図版—29 第2面 2ブロック (8) -----59	図版—39 第2面 3ブロック (10) -----71
1. No.4 セクション・SD-5・6 近景 (南から)	1. No.6 セクション・SD-4 近景 (南から)
2. No.4 セクション・SD-1・4 近景 (南から)	2. No.6 セクション・SF-2 近景 (南から)
3. 西側サブセクション (南から)	3. 西側サブセクション (南から)

図版—40 第2面 4ブロック(1) -----	74	2. SF-3 硬化面検出(南から)	
1. SD-4 完掘(南から)		図版—47 第2面 8ブロック(3) -----	83
2. SD-6 中間硬化面検出(南から)		1. SF-3 近景(北から)	
3. SD-6 完掘(南から)		2. SF-3 近景(東から)	
図版—41 第2面 4ブロック(2) -----	75	3. SF-1 近景(南から)	
1. 完掘全景(西から)		図版—48 第2面 7ブロック(1) -----	85
2. 完掘全景(南から)		1. SD-4 中間硬化面検出(北から)	
3. SF-1 近景(南から)		2. 中央路面部完掘(北から)	
図版—42 第2面 4ブロック(3) -----	76	3. SD-6 完掘(北から)	
1. No.7 セクション全景(北から)		4. SD-4 完掘(北から)	
2. No.7 セクション西側(北から)		図版—49 出土遺物(1) -----	91
3. No.7 セクション東側(北から)		図版—50 出土遺物(2) -----	92
図版—43 第2面 4ブロック(4) -----	77	図版—51 遺物出土状況(1) -----	93
1. No.7 セクション中央部(北から)		図版—52 出土遺物(3) -----	97
2. No.9 セクション西側(南から)		図版—53 遺物出土状況(2) -----	98
3. No.9 セクション東側(南から)		図版—54 縄文時代遺構(1) -----	114
図版—44 第2面 5ブロック -----	78	1. SK-1 プラン検出(南から)	
1. SD-4 中間硬化面検出(南から)		2. SK-1 完掘(南から)	
2. SD-4 完掘(南から)		3. SK-1 土層断面(南から)	
3. No.10 セクション東側(北から)		図版—55 縄文時代遺構(2) -----	115
図版—45 第2面 6ブロック(1) -----	80	1. SK-2 完掘(西から)	
1. SD-4 中間硬化面検出(南から)		2. SK-2 土層断面(南から)	
2. SD-4 完掘(南から)		3. SK-2 土層断面(南から)	
3. SD-6 プラン検出(北から)		図版—56 縄文時代遺構(3)／出土遺物 --	116
図版—46 第2面 6ブロック(2) -----	82	1. SK-1・2 完掘全景(南西から)	
1. SD-6 完掘(南から)		2. 調査風景	

写 真 目 次

写真1. 調査風景		写真10. 切り通し風景-----	10
写真2. 調査前全景		写真11. 武蔵台東遺跡・遺構検出状況-----	10
写真3. 表土掘削開始-----	4	写真12. 切り通し風景-----	10
写真4. 表土掘削風景-----	4	写真13. 武蔵国分寺関連遺跡・遺構検出状況--	10
写真5. 調査風景-----	4	写真14. 遺跡周辺の空中写真(平成7年)-----	12
写真6. 空中写真測量-----	4	写真15. 極東来軍による空中写真(昭和22年)-	12
写真7. 見学風景-----	4	写真16. 3ブロック硬化面検出風景-----	17
写真8. 調査風景-----	5	写真17. SD-1・SF-1 全景(南から)-----	17
写真9. 埋め戻し終了-----	5		

凡 例

1. 遺構記号は次の略号を付している。

SD=溝跡 SF=路面・道路跡 SK=土坑

2. 遺構番号は、調査では発見順に連番を付したが、整理段階において次のように改めている。

※ 新番号←(旧番号)

SD-1←(SD-1) SD-2←(SD-2) SD-3←(SD-3) SD-4←(SD-4) SD-5←(SD-6A)

SD-6←(SD-6B) SD-7←(SD-5A)

SF-1←(SD-5D) SF-2←(中央路面) SF-3←(東側路面) SF-4←(SD-5B) SF-5←(SD-7)

3. 本書で用いた「ブロック」は小調査区を表す。(詳しくはI-2,調査ブロックの呼称参照)

4. 全測図のグリッドラインに付した数字は座標原点からの距離を表す。

5. 遺構の実測図の縮尺は、歴史時代全測図=1/200、各ブロック実測図=1/80、縄文時代実測図=1/50である。

6. 遺構断面図の水糸高の標高は、歴史時代=79.00mに統一した。縄文時代は図中に示した。

7. 遺構実測図のスクリーントーンの指示は次のとおりである。



=溝跡



=硬化面



=火山灰範囲



=被熱面



=擾乱

8. 遺物の実測図・写真の縮尺は、陶器=1/2、金属製品・貨幣=1/1、瓦=1/3である。

9. 遺物写真に付した数字は(押図番号-遺物番号)を示す。



写真1. 調査風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	むさしこくぶんじあとほくせいちくのいせきはつくつちょうきほうこくしょ						
書 名	武蔵国分寺跡北西地区の遺跡発掘調査報告書						
副 書 名	一推定鎌倉街道一						
編著者名	柴崎正次・坂詰秀一・持田友宏・金子浩昌・早川泉・近藤滋・松田隆夫・板野晋鏡						
編集機関	西国分寺地区遺跡調査会						
所在地	㊦185 東京都国分寺市泉町2丁目1番地 Tel 0423 (25) 1767						
発行年月日	1996年3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
むさしこくぶんじ 武蔵国分寺 あとほくせいちく 跡北西地区	とうきよしょうと 東京都 こくぶんじ 国分寺市 いづみちょう 泉町3-2	13214 No19	35° 41' 08"	139° 28' 04"	平成6年 4月26日 ↓ 平成6年 6月17日	2,535㎡	住宅・都市整備公団 西国分寺第一団地(仮称)に 伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
むさしこくぶんじ 武蔵国分寺 あとほくせいちく 跡北西地区	集落跡	中世～近世 縄文時代	道路状遺構 土坑		古銭・陶器・瓦	伝承・推定鎌倉街道 竈穴 陥し穴	



写真2. 調査前全景

I. はじめに

1. 調査に至る経過

武蔵国分寺跡（国分寺市No.19遺跡）は昭和52年11月に中央鉄道学園敷地内から竪穴住居跡が発見されたことにより、学園敷地全域に遺跡の範囲が拡大され、遺跡地図に登載された。その結果、北側はJR中央線、西側は府中街道（都道17号線）までとされたが、その西隣接地にあたる現西国分寺第一団用地部分は、遺跡の拡大が予想されたので、旧国鉄職員寮建設工事の際、遺跡の有無調査が行われた。その結果は、敷地の大半が攪乱されており、遺構・遺物は発見されなかった。

近年、道路遺構については、文化庁が昭和52年から実施している「歴史の道」調査事業により、また各地の発掘調査により発見が相次いでいる西海道・東海道・東山道などの古代幹線道路跡などにより、重要な遺跡として関心が高まってきている。

府中・国分寺市跡においても、最近の調査で僧尼寺中間地域で南北に貫く東山道跡が明らかにされてきた。府中市内旧甲州街道から国分寺・小平市境まで約4.5kmに渡って直線道路の存在が明らかにされた。その直線上に位置する学園敷地内からも、当然のごとく東山道武蔵路が計画道路（西国分寺東2号線）と重なる形で発見されるに到った。

鎌倉街道については平成3年に市史跡に指定された尼寺北方の切り通し部分と西国分寺駅北側の切り通し部分を繋ぐ路線を想定するのが一般的であるが、その間の具体的路線は既存道路を繋いでいく形で認識されていた。そのため、旧国鉄中央鉄道学園跡地付近では学園跡地の西側、府中街道直下に存在する可能性が考えられており、西国分寺第一団地予定地内は遺跡範囲から除外されていた。

平成5年8月、都営川越道住宅遺跡調査会により、尼寺北方の国分寺崖線にかかる切り通し部分の上部を調査した結果、現鎌倉街道より幾分西側に振れる形で旧鎌倉街道が検出された。その方向を北に追っていくと、従来想定されていた路線より、西側にズレる可能性が出てきた。その路線を昭和22年の航空写真で検討して見ると、西国分寺第一団地内に道路を思わせる影が畑の上に現れていた。

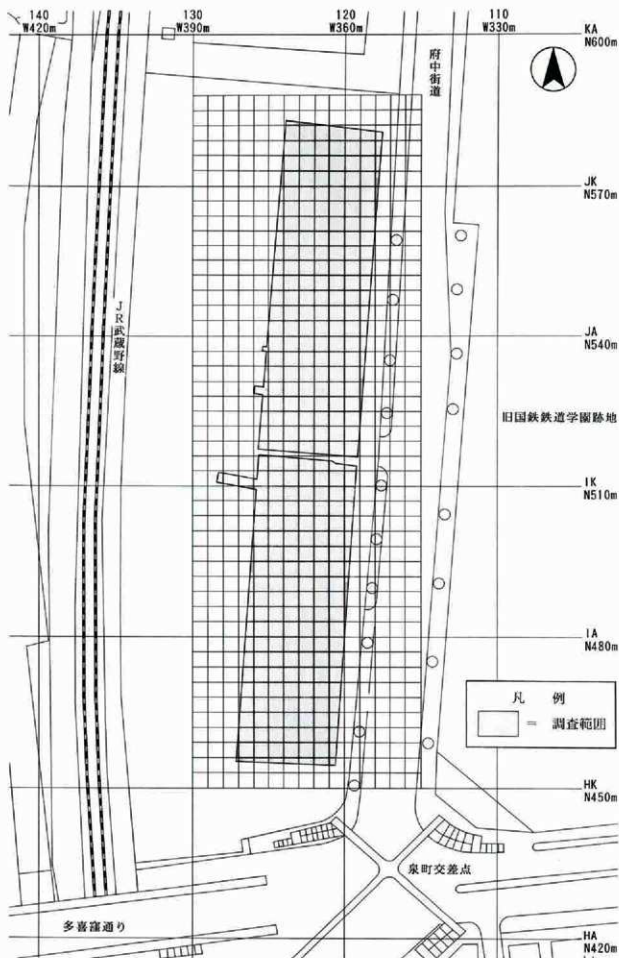
このため平成6年3月末に開催された西国分寺第一団地建設に関わる国分寺市役所庁内関係者会議で工事着手後の遺跡発見による混乱を避けるため、住宅・都市整備公団に試掘調査の協力を要請する旨報告し、公団に対し協力を要請した。

この事に対し、公団からは本調査を含め6月末の着工予定に支障のないように、速やかに実施してほしいとの要望があった。

国分寺市教育委員会は4月4日～12日までに遺跡の有無確認調査を実施したところ、予想通り用地東側から鎌倉街道と推定される道路遺構を検出した。この結果、国分寺市文化財課は公団に対し「遺跡発見通知」の提出と用地東半部の建物建設予定部分の調査が必要である旨指導した。（4月20日付けで遺跡発見通知を提出）

4月20日、都文化課と国分寺市文化財課の協議によって、隣接地で調査を実施している西国分寺地区遺跡調査会に調査を依頼することで合意した。西国分寺地区遺跡調査会は公団との協議を経て、4月25日埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、調査を開始した。

（早川 泉）



第1図 調査範囲・グリッド設定図

2. 調査の方法と経過

(1) 調査方法

本地区の発掘調査は、住宅都市整備公団・西国分寺第一団地（仮称）建設に伴う事前調査であり、調査の主たる目的は、本地区を南北に通過すると推定される道路状遺構（伝承鎌倉街道）の調査である。

本地区の地区名は、当調査会が同時に実施している西国分寺地区（旧国鉄道学園西側跡地）の調査と区別するため鎌倉街道地区と付した。

調査対象範囲は、試掘調査の結果から道路状遺構の遺存が推定される南北129m 東西 19.5mの位置に設定した。また、中央部には土層観察のために幅約1mのベルトを残した。（第1図）

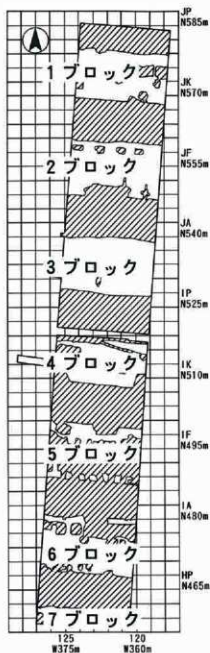
盛土・表土層の除去は基本的に重機掘削とし、それ以下の層の掘削は人力で行った。排土は調査区西側に仮置きし、調査終了後は調査区全体を埋め戻した。

調査グリッドは、当該地区が「武蔵国分寺跡」の北西地区にあたるため、国分寺市遺跡調査会で設定した僧寺中軸線中心点を座標原点とする最小単位が3×3mのグリッドを使用している。方位は、南北中軸線に対し真北が7°08'03"、磁北が0°38'03"それぞれ東偏する。

歴史時代の遺構確認はII層上面で行った。縄文時代の遺構確認は、掘乱が多かった事と調査区の大部分を占める歴史時代の遺構がIII層下まで埋り込まれていた事等から歴史時代の遺構完掘時に確認された遺構を対象に調査する事とした。

※ **調査ブロックの呼称** 盛土・表土層の重機掘削作業を開始したところ、それ以下の層の遺存は予想外に悪く、区内を南北に走る遺構は現代の建物の基礎による掘乱をうけ分断されている状態であった。このため、鳥状に分断された部分を小ブロックに別け、それぞれ北から番号を付け調査する事とした。尚、調査段階では掘乱を含めた部分を北から1～14ブロックに別けていたが、整理段階においては図示のように掘乱を除いた部分を1～7ブロックに別け呼称している。（第2図）

また、土層断面の観察・実測は基本的に各ブロックの北側と南側にベルトを設定し行い、それ以外必要と思われる個所は適宜サブベルトを残し調査した。セクションベルトの番号は北から順に進番でナンバーを付し、サブベルトは各ブロック毎に番号を付した。



第2図 調査ブロック呼称図

(2) 調査経過

発掘調査は、平成6年4月26日に開始し、同年6月17日に終了した。調査経過の概略は以下に示す通りである。

- 4月26日(水) 調査範囲の設定作業を行う。
- 27日(木) 重機による盛土の掘削作業を開始する。
排土置場の土留め養生を行う。仮事務所
の設置をし、発掘器材を搬入する。
- 5月6日(金) 重機による盛土掘削作業終了。調査グリッドの基準杭を設定する。重機で剥ぎきれなかった攪乱の除去作業を行う。
- 9日(月) 調査区壁面の土留め作業を行う。排土置場の防塵対策用に種付けムシロの張り付け作業を行う。
- 10日(火) 1ブロックから順に土層断面の検討を開始する。
- 12日(木) 分層が終了した断面から順に写真撮影と実測作業を開始する。
- 13日(金) 土留め用ムシロの張り付け作業を終了。
- 17日(火) ブロック単位で遺構検出作業を開始し、順次プランの撮影を行う。
- 18日(水) ブロック毎に覆土掘削作業を開始する。
- 6月3日(金) プラン検出状態の空中写真撮影を行う。
- 4日(土) ブロック毎に溝跡の掘削作業を開始する。
- 5日(日) ブロック毎に完掘した遺構の実測作業を開始する。
- 8日(水) 第1面完掘状態・全測図化用の空中写真撮影を行い、各遺構の細部実測作業を開始。
- 9日(木) 実測作業の終了した所から更に下層の遺構の掘削作業を行う。
- 15日(水) 第2面完掘状態・全測図化用の空中写真撮影を行う。細部の実測作業及び縄文時代の遺構調査を開始する。
- 16日(木) 南ブロックから順次埋め戻し作業を開始。
- 17日(金) 縄文時代の遺構調査終了。埋め戻し作業を終了し、調査の全工程を終える。



写真3. 表土掘削開始



写真4. 表土掘削風景



写真5. 調査風景



写真6. 空中写真測量



写真7. 見学風景

3. 層 序

本調査地区は、武蔵野段丘面上に位置しており、地層は、礫層を基盤に、武蔵野ローム・立川ローム・褐色を基調とした2枚の遺物包含層・表土層の順に堆積している。

本遺跡周辺の本来的の基本層序は、次のように区分される。本調査区ではIa～Ic層による削平・土地改良等が行われており、各層の境界は不明確な部分も多く、I d・I e層は部分的にしか観察できなかった。

- I a層 — 擾乱・盛土層。ローム・ガラ等が混合しており現代の建物造成時の盛土層。調査区全体を覆っており、南側ではIV層まで削平されていた。
- I b層 — 明灰褐色土（表土・耕作土①）。砂質で粘性は少ない。場所によっては固く締まっているが、現代の建物による転圧の影響と思われる。この層から板ガラスや近代の陶器片等が出土しており、それ以降の耕作土と推定される。
- I c層 — 灰褐色土（表土・耕作土②）。明灰褐色土と黒褐色土の混合土。褐色土ブロックを多く含み、締まり・粘性は少ない。
- I d層 — 黒褐色土。粘性が少なく粒子が粗い。
- I e層 — 黒褐色土（奈良・平安時代の遺物包含層）。粘性が少なく粒子はI d層より粗くボソボソしている。
- II 層 — 暗褐色土（縄文時代の遺物包含層）。粒子は細かく下部は硬く締まり粘性も強くなる。本層上面で奈良・平安時代の遺構検出を行う。
- III a層 — 明褐色土（所謂ローム漸移層）。粘性が強く軟質。本層上面で縄文時代の遺構検出を行う。
- III b層 — 褐色ローム（ソフトローム層）。粘性が強く軟質で赤色スコリアを含む。
- IV a・b層 — 褐色ローム（ハードローム層）。粘性が強く硬く締まっている。
- V 層 — 暗褐色ローム。立川ローム第1黒色帯。

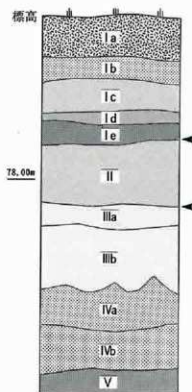
（板野香鏡）



写真8. 調査風景



写真9. 埋め戻し終了



凡例 ◀ 遺構検出面

第3図 基本層序模式図

参考・引用文献

- 『国分寺市史』上巻 国分寺市 1986
- 『武蔵国分尼寺Ⅰ』—平成4年度発掘調査概報— 国分寺市 1994

II. 遺跡の位置と環境

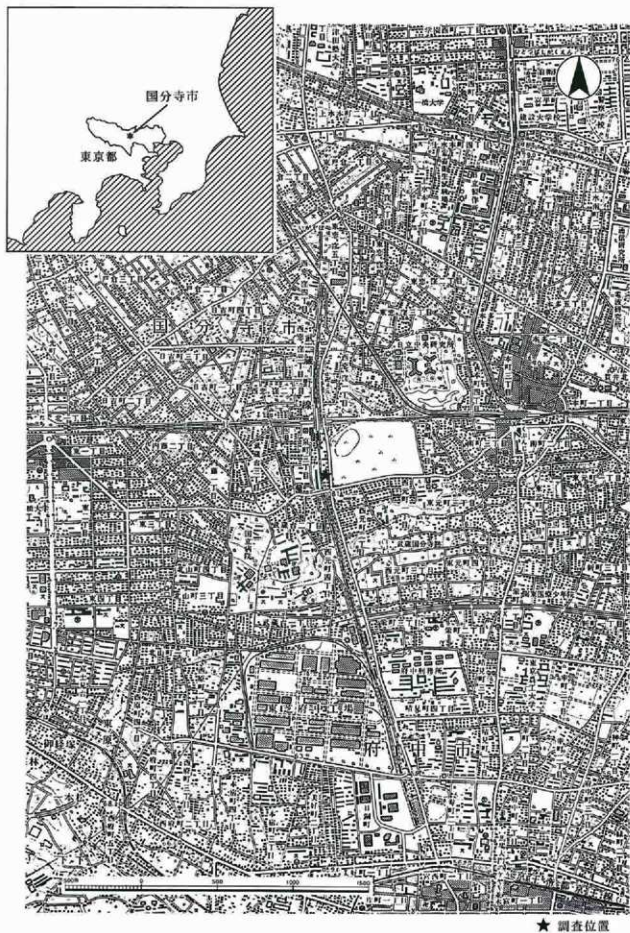
JR中央線西国分寺駅の南約250メートルにあって、東を府中街道、西をJR武蔵野線、南を泉町交差点に囲まれた当該調査区は、多摩川左岸に広がる武蔵野段丘面上に立地し、南には下位段丘である立川段丘との崖線を控え、北には野川の源流域で、武蔵野段丘に深く刻まれた恋ヶ窪谷を控えている。

調査区周辺の歴史的環境としては段丘の発達と崖線下の湧水地という地理的条件からか、その時代性に偏りがあり、旧石器、縄文時代の遺跡群と古代律令期以降の遺跡群にほぼ集約できる。まず、南の崖線上には旧石器時代の多摩川段丘遺跡があり、三ヶ所の礫群の検出とナイフ形石器や石槍、石斧等の出土が報じられている(1)。また、岩宿以前に石器が採集された熊ノ郷遺跡(2)、近年では都立府中病院の増築に先立って実施された武蔵台遺跡の調査(3)や、当該調査区に対峙し、武蔵国分寺跡北西地区遺跡として現在も調査を継続中の西国分寺地区での調査(4)でも、この期の遺物等が検出され、武蔵野段丘面上での人々の活動範囲が広がりがつつある。続く縄文時代の遺跡としては南の崖線上はもとより、野川の源流域に面した崖線上一帯にも連続的に広がりを持ち、かつ賑わいを見せる。中でも、いずれも中期の集落跡であるが、極めて立体的で芸術性にあふれた勝坂式の土器群を住居跡から出土し、その一群が国指定重要文化財に指定されていることで著名な多喜窪遺跡(5)、集落の中央に形成された墓塚群の一つから2点の硬玉製の垂れ飾りを出土したことで著名な恋ヶ窪遺跡(6)、焼け石を含んだ摺り鉢状の集石土坑が多数検出された恋ヶ窪南遺跡(7)などがある。また、先の武蔵台遺跡の調査では新たに早期の集落跡が検出され(8)、当該地域周辺の歴史的環境に大きな変革をもたらすものとして注目されている。

次にこの付近が賑わいを持つのは古代律令期で、立川段丘面を中心に南の崖線斜面にかけて建立された武蔵国分寺と国分尼寺によるもので、寺の建立はもとより、その維持に関わったと思われる人々の集落が広範に形成された。また、当該調査区の南約4キロメートルに位置する府中市大國魂神社付近を中心として形成された武蔵国府との一体化の中で、古代武蔵国の生活、文化の中核であり、交通の要衝としても大いなる賑わいを持ったことは付近一帯の多数の調査結果からも理解できるところである。とりわけ交通の要衝という点では当該調査区の東約200メートルを今回の調査の対象である推定鎌倉街道と並行する形で南北方向に通る推定東山道武蔵路があり、南の崖線下では国分僧寺と尼寺の間を貫けていることから、両寺の前面で十字路(ちまた)を形成していたであろうことは想像できる。とはいうものの、この期の集落も武蔵台・武蔵台東遺跡等に見られるように、その広がりは当該調査区の南を崖線と東西に並行して通る現多喜窪通りを北限としているようで、崖線の縁辺部迄であり、武蔵野段丘上面に迄は及んでいなかったようである。また、賑わいを持った崖線縁辺部の集落群も10世紀頃をもって衰退したようである。

当該地周辺が再び歴史上に明瞭な姿で些かの賑わいを持つのは建武2年(1335)の武蔵国分寺再興に係わる薬師堂建立を契機とした南北朝から室町時代に掛けての13~15世紀の頃である。古代末期から鎌倉時代に掛けては遺跡等としては具体性に欠けるが、文献上では武蔵国分寺の修理を推測させる記事があり、そして元弘3年(1333)5月、足利尊氏の討幕に呼応して上野国で挙兵した新田義貞軍と鎌倉からの幕府軍との間で戦われた分倍河原の合戦に際し国分寺も焼失の憂き目を見た(9)。

この南北朝から室町期の頃の遺跡としては、国分寺周辺はともかく、従前の様相とは少し変わり武蔵野段丘面上に線的ではあるが若干の広がりが見られる。まず国分寺跡が所在する黒鐘公園の北側にあって武蔵野段丘が舌状に南下する尾根上に立地する伝禪心寺跡は、昭和44年に試掘程度の調査が実施さ



第4図 調査位置図



- | | |
|------------------------|---------------------------------------|
| 1. 武蔵国分寺帶寺跡 (奈良・平安時代) | 13. 羽根沢遺跡 (縄文時代) |
| 2. 武蔵国分寺尼寺跡 (奈良・平安時代) | 14. 志ヶ窪東遺跡 (縄文時代) |
| 3. 鎌倉山遺跡 (古代) | 15. 八幡沼遺跡 (縄文時代) |
| 4. 武蔵行遺跡 (先土器・縄文時代) | 16. 龍沢東遺跡 (先土器・縄文時代) |
| 5. 仏持寺跡 (歴史時代) | 17. 蔵ヶ谷戸遺跡 (先土器・縄文時代) |
| 6. 多寄窪遺跡 (縄文・奈良・平安時代) | 18. 水町 (石分寺村石器時代) 遺跡 (先土器・縄文・奈良・平安時代) |
| 7. 新字飯取遺跡 (先土器・奈良時代) | 19. 蔵ヶ谷戸北遺跡 (先土器・縄文時代) |
| 8. 志ヶ窪南寺跡 (縄文・平安・室町時代) | 20. 東京経済大学橋内遺跡 (縄文時代) |
| 9. 日影山遺跡 (縄文・奈良・平安時代) | 21. 散布地 (縄文・奈良・平安時代) |
| 10. 志ヶ窪南遺跡 (先土器・縄文時代) | 22. 散布地 (先土器時代) |
| 11. 花沢西遺跡 (先土器・縄文時代) | 23. 散布地 (縄文・奈良・平安時代) |
| 12. 志ヶ窪遺跡 (先土器・縄文時代) | 24. 散布地 (奈良・平安時代) |

第5図 周辺の遺跡と地形

れ、その結果、この尾根を南北に縦断する推定鎌倉街道に東面して逆コ字状の土塁に囲まれた小規模な礎石を有する建物跡が検出されている。調査当時の判断では、その創建期を平安期頃とされていたが、今日では13世紀末頃から15世紀末頃の遺構とされている。また推定鎌倉街道を挟んだ東側の尾根上には、この伝祥応寺に関連した遺構として15世紀初頭頃の所産とされる一辺22～24メートルの方形の塚が所在している⁰⁹。

つぎに西国分寺駅の南には礎石建物跡1棟、掘立柱建物6棟、塀跡5条、溝、土橋状遺構、土墳墓、火葬墓等が検出された恋ヶ窪庵寺跡が所在している。この遺構群も伝祥応寺跡と同様、幅1.2メートル、深さ0.3メートルの逆コ字形に巡る小溝で推定鎌倉街道に東面して立地しており、13世紀末から15世紀末頃の寺跡として位置付けられている¹⁰。このほか西国分寺駅の北東約200メートルの地点からは15世紀末の瀬戸系灰釉華瓶が、また北北東約400メートルでは13世紀末の地下式土壇が一基検出されている¹¹。

以上が当該調査地周辺の中世の遺跡群であるが、これらはいずれもか推定鎌倉街道に接しているか、隣接して立地しており、かつ南北に線的に並んでいること、13世紀末を上限として15世紀末迄と限られていることに特徴がある。このことは当該調査地周辺の武蔵野段丘上は近世に至って再び賑わいを失い荒廃したか細地化したと思われるが、どちらかというも前者の状況にあったようである。それは幕末に編纂された「新編武蔵風土記稿」の恋ヶ窪村の条に「土人の伝へに此地古へ鎌倉より奥州への街道にして、いとにぎはいたる駅亭なりしかば、(中略)家数凡二十四軒、其内十七人古き百姓のよしにて」とあることから理解できるところである¹²。

(近藤滋)

引用・参考文献

- (1) 『東京の遺跡散歩』 東京都教育委員会 1993
- (2) 同上
- (3) 同上
- (4) 板野晋鏡 「Ⅲ.旧石器時代の調査」『武蔵国分寺跡北西地区の遺跡』—西国分寺地区(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)住宅市街地総合整備事業に伴う平成6年度発掘調査概報 西国分寺地区遺跡調査会 1995
- (5) (1)前掲書
- (6) 同上
- (7) 同上
- (8) 同上
- (9) 有吉重蔵 「国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』 国分寺市 1986
- 09 同上
- 10 同上
- 11 同上
- 12 青木直己 「国分寺を訪れた人々」『国分寺市史 中巻』 国分寺市 1990



写真10. 切り通し風景



写真11. 武蔵台東遺跡・遺構検出状況



写真12. 切り通し風景



写真13. 武蔵国分寺関連遺跡・遺構検出状況

写真提供 写真11, 都営川越道住宅遺跡調査会
写真13, 武蔵国分寺関連遺跡調査会

凡例

— 推定路線 ● 既検出位置



第6図 推定路線・既検出位置図

★ 調査位置



明治19年



大正10年



昭和22年



昭和27年

発行者 国土地理院

第7図 遺跡周辺の変遷



写真14. 遺跡周辺の空中写真（平成7年）

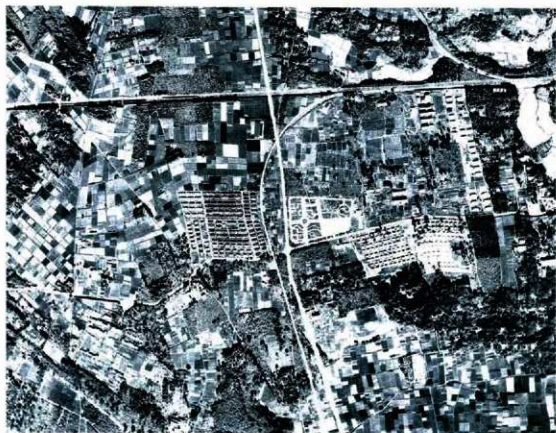


写真15. 極東米軍による空中写真（昭和22年）

III. 歴 史 時 代

1. 遺 構

調査は市教育委員会が実施した試掘調査の結果に基づき、調査対象地のほぼ東半分は東西幅 19.5メートル、南北長 129メートルで、府中街道に並行してトレンチを設定し、南北両端から掘削を始めた。当該地の旧状は集合住宅があり、これを取り壊した際に、廃材をその場に埋め戻していたことから、当初は擾乱が激しく、遺構の遺存状況についてやや危惧の念があったが、結果は盛土、旧表土、擾乱坑の覆土等の除去が進むにつれ、調査区の北半分については比較的良好な状態で遺構面が遺存し、また、擾乱についても遺構に対して横断（東西）方向の通し断面が観察できる状況にあったことから、むしろ、遺構の検討調査の進捗においてはおおおいに役立つこととなった。これに対して調査区の南半分では擾乱が著しく、断面の観察についても通し断面を得ることができなかった。こうした中で、具体的な当該期の遺構としては溝跡7条、道路跡5条を検出することができた。

(1) 溝 跡

今回の調査では7条の溝が検出されているが、いずれも南北の方位を持ち、かつ原則的には北から南への流下方向を有している。このことは基本的に旧地形が南に向かって下がっていることによるものである。

SD-1

調査区の西辺に添って4ブロック以外の全ブロックを通して検出できた断面U-V字型の溝で、4ブロックでは北側のセクションで確認できているものの、平面では削平されていたものである。規模としては平均幅 0.4～0.5メートル、深さ 0.3メートルを測り、覆土はややバサついた茶褐色土で、今回検出の遺構では最も新しいものである。とりわけ第7セクションの観察から溝の直上は近代以降の盛土であり、また7ブロックでは覆土中から当該溝にともなう唯一の遺物として常滑焼の裏底部片が検出されている。

SD-2

SD-1の西にあって東側肩部をこれに切られた溝である。この溝はいわゆる断面が箱掘り状の形状を示す幅約 0.45メートル、深さ 0.2メートル以上の規模を持ち、1～3ブロックに限り検出されている。1ブロック北西隅でトレンチの西壁中より姿を現し、すぐSD-1と重複し、3ブロックでは当該溝よりさらに西側に位置するSD-3と重複し、かつこれを切って、ふたたび西側壁中に隠れるか、あるいは底場のレベルが高位にあることから、後世に削平され3ブロック以南では消滅したものと思われる。覆土は茶褐色を呈しているが下部は黒色土粒、ローム片を多く含み、乾燥時に削るとこれが賽の目状に起きるほど硬く縮まった状態にあり、武蔵台東遺跡の調査で確認された西側溝と当該調査区内ではほぼ類似しているとのことであった※(1)。

SD-3

当該調査区にあって最も西に位置する溝で、かつ蛇行する特徴を有し、2~3ブロックのみ検出されている。しかし、調査の最終段階に3・4ブロックで実施した駐目押しのなトレレンチ調査で、より西側に大きく振れていくことが確認されている。また断面形状は逆梯形を呈し、上幅では約1.1メートル、下幅では約0.4メートル、深さ約0.6メートルの規模を有している。ただ断面形状では西岸部分に段掘りのな様相を呈しており、覆土においても上下で差異があること、他の追認箇所でも1条の溝と見えることから、同一箇所での掘り直しが行われたように思われ、その結果が先の規模と成っているところである。なお覆土は上層が基本的にはSD-2の底部に見られた黒色土粒を主とした黒褐色土で、下部はローム粒を主とした黄褐色土から形成されている。

SD-4

調査区の西側をほぼ直線的にSD-1と重複するかたちで全ブロックを通して検出できる断面U字形の溝で、幅0.8~1.0メートル、深さ0.5メートルの規模を持つ。覆土は3層程度に細分することができるが全体としてはローム粒や黒色土粒を多く含む暗茶褐色土で、間層に孔灰白色気味のやや粘質化した硬化面のブロック片と思われるものが観察された。また、この溝の東側には、のちほど記述する道路遺構のSF-1があるが、このSF-1には3回の路面があって、両者は切ったり切られたりの関係にある。

SD-5

調査区の東側で2ブロックから5ブロックにかけてのみ検出された溝で、SD-6を切っている。断面形状は不定形ながら、溝底はどちらかという最深部を西寄りに持ち、東側からなだらかな傾斜を持って形成されており、溝幅は約2.0~2.4メートル、深さ約0.4メートルの規模を持つ。全体的には南に行くにしたがって溝幅、深さとも減じる傾向にあり、5ブロック以南では旧地形が下り勾配を持つにもかかわらず消滅していることから、それにも増して後世の削平が進んだ結果と想像できる。なお覆土はロームと暗茶褐色土が混ざった明茶褐色土で、やや粘性を持っている。また2ブロックの北側で、この覆土の直上から馬歯と思われる獣骨が検出されている。

SD-6

1ブロックではSF-5に、2から4ブロックではSD-5に切られつつ、SD-4と同様、全調査区を通して検出できた溝である。断面形状は先のSD-5と同様、不定形で皿状もしくは逆梯形を呈し、2~4ブロックでは比較的全断面を維持しているようであるが、1ブロックではSF-5に切られていることから溝底の両端のみ、5ブロック以南では逆梯形の最深部のみなのか、幅、深さに大きな差がある。また全断面が明らかな部分での溝の最深部は、やはりSD-5同様西寄りにあり、しかも東側が一部段掘りので、且つなだらかな傾斜を有している。しかし東側肩部は利用当時に崩れたらしく硬化面にクラックの痕跡があって、この部分では断面へ字形を呈している。ちなみに明確な部分での溝の規模は幅約1.4メートル、深さ0.5メートルを測り、また南端付近では幅約0.6メートル、深さ約0.3メートルを測る。なお覆土はローム粒、黒色土粒を多く含んだ暗茶褐色土で、東側肩部、段掘りの段部等で一部硬化面のブロック片が、あたかも東側から流入したかのような状況で見られた。

SD-7

SF-4の覆土を切って形成された溝で幅0.5メートル、深さ0.15メートルの規模を有している。検出された範囲は1～3ブロックのみで、セクションの観察結果から今回検出された溝群の中では最も新しい時期に属するものの一つといえる。覆土は黒色土粒を多く含む暗茶褐色土で、粘性が僅かにあり締まりのある土となっている。また第2セクションにかかって陶器片が出土しているが、小片のため産地、時期等の特定は困難と思われる。

(2) 道路跡

今回の調査では大別して5条の道路跡が検出されている。しかし1条の道路跡の捉え方にもよるが、一連のいわゆる波板状凹凸遺構や、皿状ビットの並ぶものを1条と考えた場合においては、その数は無数と云えるもので、また、逆に数条と云っても個薄との兼ね合いのなかでは1条に見えることもありえる。ここではそれらを考慮し、路面のベースとなっているローム層との関係から大別としたものである。

SF-1

SF-4の下層にあって調査区の中では最も西に位置しており、トレンチの西壁とはほぼ平行する形で北から南の全ブロックを通して検出されている。路面はトレンチの西壁添いに確認されるローム層の高位面と比較すると、当初はローム層を0.6メートル以上掘り込んで形成されており、また道幅は下幅で2.4メートル以上、上幅で3.5メートル近くあったと想像できる。さらに調査の過程では最下層の最終路面上に数センチの暗灰色を呈する非常によく締まった硬化層があり、これを除去すると下層よりいわゆる波板状凹凸遺構が検出された。しかし、この波板状凹凸遺構も1ブロックでは平面形が不規則な楕円形の集合体に見えたことから、さらに少しずつ削り精査すると、平面形は不整形ではあるが断面が皿状のビットが切り合いつつ列状に並び、ところによっては数条の列が交差しているやに見えた。このことは他のブロックにおいても多少の差異はあってもほぼ同様で、2ブロックの北半分を除いて数条の皿状ビット列から構成されていた。また、このSF-1から別れる小径も検出された。

なお除去した硬化層は除去の際、移植の先端近くを使って草を薙ぐようにして削らなければ除去できないほど硬く、ところどころ乾燥した粘土塊のような部分もあるが、大部分は鱗状に剝離することから長時間を掛けて形成されたと考えられ、最終面ではロームに近い赤色を呈していた。

また、この道路跡で特筆すべきことは埋没の過程で、さらに2回(以後上層をA面、下層をB面と仮称する)の路面を形成していたと考えられる。各々の路面は最終面で見られるような硬化面を持たず、締まった様子も見られないが暗灰褐色硬化層の碎片が散布すること、2ブロックのB面最下層で皇宋通宝(1ブロックの覆土上面からも元祐通宝)が出土したことから、明らかに路面としてある時期存在したことが考えられる。ただ、このA・B両面の道路跡は1～3ブロックの範囲で検出されただけで、以南のところについては後世の掘削により消滅したと考えられる。

SF-2

SF-1の東にあって、やや蛇行気味ではあるがこれと平行する道路跡であり、やはり全ブロックを通して検出されている。ただ路面の高さは調査区の北側ではSF-1より若干高位にあり、南側ではほぼ同一面にあった。また、この路面の精査の結果は図面に記されたとおり、幅0.5～0.8メートル、深さ

0.05～0.1メートルの細く浅い硬化面を持つ10条近くの小径が、蛇行しあるいは直進しながら複雑に交差し、結果としてそれが凡そ2条の中規模程度の道幅にまとまり、さらにこれが大別した幅約4メートル、深さ0.2メートルの道路跡を形成している。ただ全体に皿状ビット列は少なく、幅についても南側では狭くなっていたが、これは後世の削平の結果によるものと思われた。

なお、この遺構で特筆すべきことは1ブロックから3ブロックの範囲で暗灰褐色硬化層の直上に宝永の火山灰層が堆積していたことである。しかし、第2セクションの所では最終路面との間に間層があり、この意味では最終路面の時期を決するものでないことは明らかである。

S F—3

SF—2の東にあって、路面はより高位に位置し、SF—1・2との間わりの大きいと思われる道路跡で、やはり全ブロックを通して検出されている。このことから、路面の硬化の状況や道幅を構成する小径の集合の状況等は、SF—1・2とほとんど同様である。ただ遺存状況については、路面がより高位にあることから2ブロック以南では中規模程度の路幅にまとまったものの、片方が後世に削平されたようで、1ブロックでは幅約3.5メートルあったものが2ブロック以南では幅約0.8メートルに減じ、さらに最南端では狭くなって路面の最深部のみが残されているような状況にある。

なお、この道路跡の状況としては走行の方向が南に行くにつれ、より西に寄っていることが注目される。

S F—4

SF—1の上層に重複した状態で検出された道路跡で幅約0.8メートル、深さ約0.2メートルの規模を持ち、路面は厚さ3センチ程の硬化層で形成されていた。また、この覆土を切ってSD—7が開削されていることは先にも触れたとおりである。そして当該硬化面においても暗灰色硬化層を覆土に持つ皿状ビット列が検出されている。

なお、この道路跡も1～3ブロックのみで遺存しており、以南については消滅している。また、厚さを持つ明確な硬化層は1ブロックにのみで検出された。

S F—5

今回の調査で検出された道路跡の中では最も東に位置し、かつ路面が最も高位にあって、SD—6を切り、1ブロックのみに遺存している。道幅は約0.7メートル、深さ約0.15メートルと規模、断面形状、路面の硬化の状況等、大部分SF—4と同様の状況を呈している。

以上、今回の調査で検出された歴史時代の遺構について評述してきたところであるが、これらは何れも断面が各々遺存しているGLに対して凹状に窪んでいることから界線が明らかで、かつ、その状況から溝や道路跡として図に記録され区分されてきたが、これとは別に断面が凸状で具体的な界線が入らないものの、遺存状況から判断して、さらにもう一条の道路遺構が有ったように思われる。それは調査区の東辺に有って西をSD—6に界され、東は東壁以来に潜り込んで不明であるが、この部分にSD—6の項で触れたように、硬化面、及び硬化層の広がりが見出されている。調査の開始時点では当該調査も他の遺跡同様、機械掘削によったが、この時点ではトレンチ東辺のHGLが予想以上の高位での遺存状況や、コ

ンクリート塊等が混入した盛土直下に近かったことから、残しながらこの部分では掘りすぎたところが多く、調査過程で部分的な残存箇所があったことと東壁セクションの観察結果によって判明したところである。

なお、検出された硬化層は、黒色土粒に細かいローム粒や橙色スコリアが混入した非常に硬く縮まったもので、遺存の良好な箇所では厚さ5～7センチ程あり、明らかにある時期の路面と思われ、当該調査の考察をするうえで重要な遺構と考えられることから、今後はSF-6と位置付ける。（近藤）

※(1)調査中に現地で確認いただいた西野善勝氏の教示による。



写真16. 3ブロック硬化面検出風景



写真17. SD-1・SF-1 全景（南から）

※ 実測図と状況写真

〈 凡 例 〉

1. 歴史時代の各遺構は重複しているものが多く、遺構実測図が煩雑になることを避けるため図を2枚に分け、次のようにそれぞれ第1面・第2面として表記した。

第1面 = SD-1・SD-2・SD-7・SF-4・中央火山灰範囲・SF-2上層硬化面・SF-5上層硬化面・SD-5

第2面 = SD-3・SD-4・SF-1・SF-2・SF-3・SF-5・(SF-6)

2. 第1面の平面図は、層位的には中央部の遺構が一段高くなっており、断面図と平面図を対応させるため、便宜上断面図を波線で分断し層位の差を表現している。
3. 断面図中の地山部に示した点線は、基本層序のⅢb層とⅣ層の境界を表わす。
4. 土層説明は、挿入中に表記されている層のみとした。全断面を通じての説明は以下の通りである。

1 明灰褐色土 表土層。粒子が細かく砂質。

2 明灰褐色土 1よりやや明るい。表土層。暗褐色土粒子を含む。

3 茶褐色土 SD-1覆土。黒色土・ローム粒子を多く含む。締まり・粘性は共に弱い。

4 茶褐色土 SD-2覆土。3に類似するが色調はやや暗い。下部に黒色土粒子・ロームブロックを多く含む。

4' SD-2覆土上層。4に類似する。

5 暗茶褐色土 SD-7覆土。暗褐色土(Ⅱ層)ブロック・ローム粒子を含む。粘性僅かにあり。締まりあり。

6 暗茶褐色土 5と同一層だが色調はやや暗い。

7 暗茶褐色土 黒色土・ローム粒子を多く含む。下部は締まりが強く最下部は硬化層。

8 明茶褐色土 SD-5覆土。黒色土・ローム粒子を多く含む。締まりは弱い。

9 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。締まりは強い。

10 暗灰褐色土 黒色土・ローム粒子を多く含む。

11 明茶褐色土 黒色土粒子を多く含む。締まりは強い。

12~15 暗茶褐色土 SD-6覆土。黒色土・ローム粒子を多く含む。色調は下層に行くにつれやや暗くなり、締まりも強くなる。最下部は硬化層。

16~19 黒褐色土 SD-3覆土上部。色調は各層とも類似するが、明暗にやや差がある。黒色土・ローム粒子を多く含む。19は締まりが強く、下部は硬化層。

20 黄褐色土 SD-3覆土下部。ロームブロック主体。黒褐色土粒子を含む。締まり・粘性共に強い。

21・22・24 暗茶褐色土 SD-4覆土上部。色調は類似するが、明暗にやや差がある。黒色土・ローム粒子を多く含む。

23 暗茶褐色土 SD-4覆土下部。締まりは強く上部に硬化面がある。黒色土・ローム粒子を多く含む。

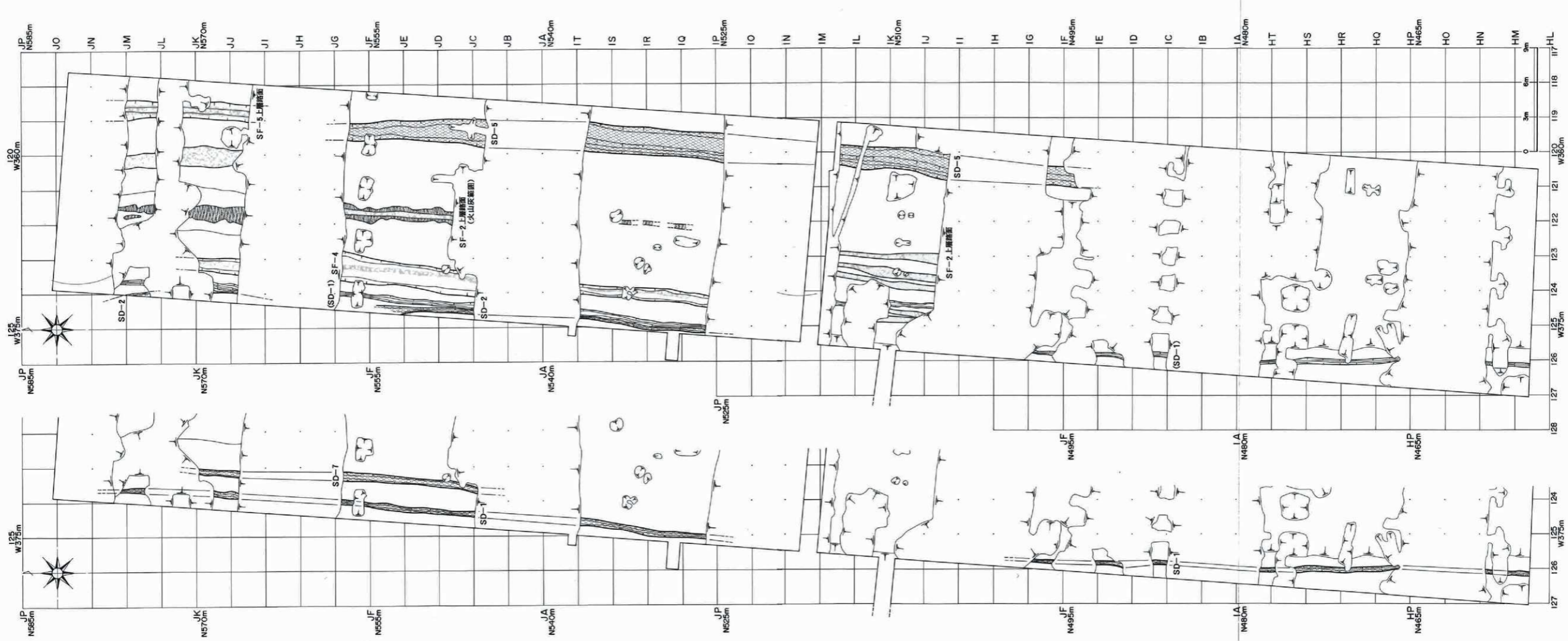
25・26 暗灰褐色土 SF-1覆土。砂質粒子を含み固く締まっている。下層の色調はやや赤味を呈す。



= 硬化層。非常に固く締まっている。



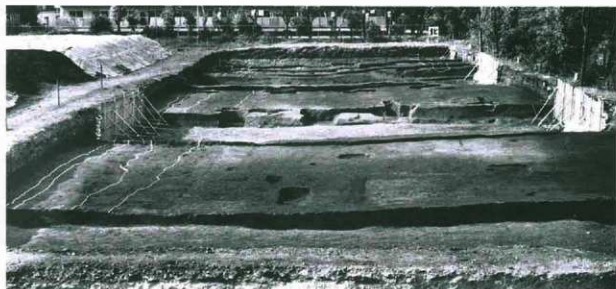
= 木根跡・攪乱



第8図 歴史時代第1面遺構全体図



1. 1~3 ブロック プラン全景 (北から)

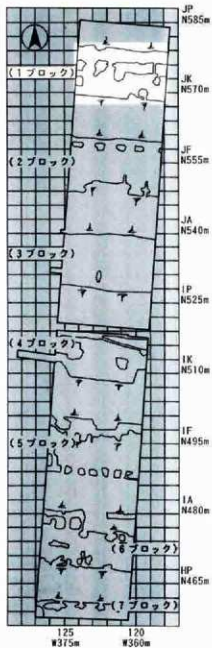


2. 1~3 ブロック プラン全景 (南から)



3. SD-1 ブラン全景 (南から)

第1面
1ブロック



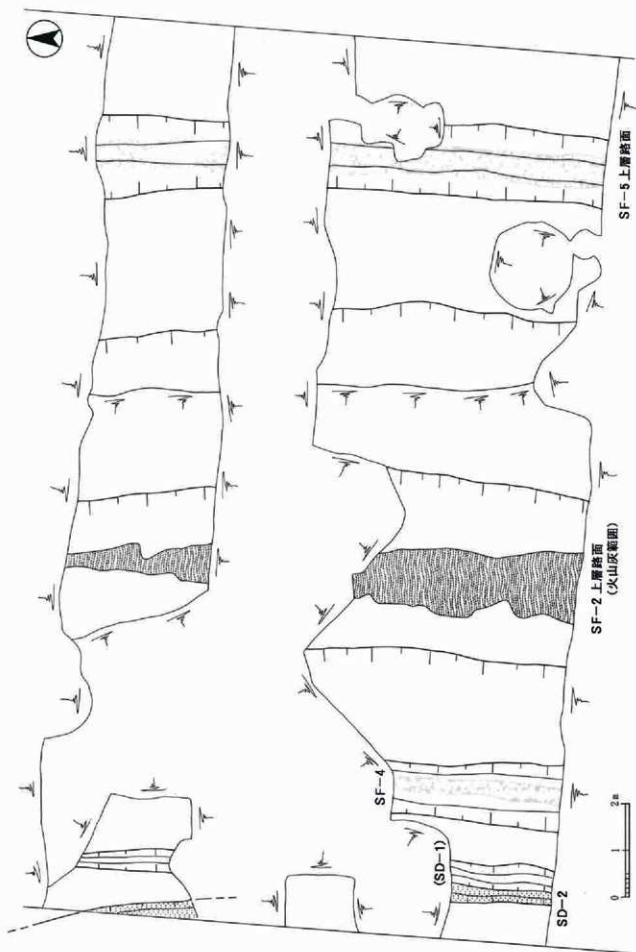
1. プラン検出 (西から)



2. 西側プラン検出 (南から)

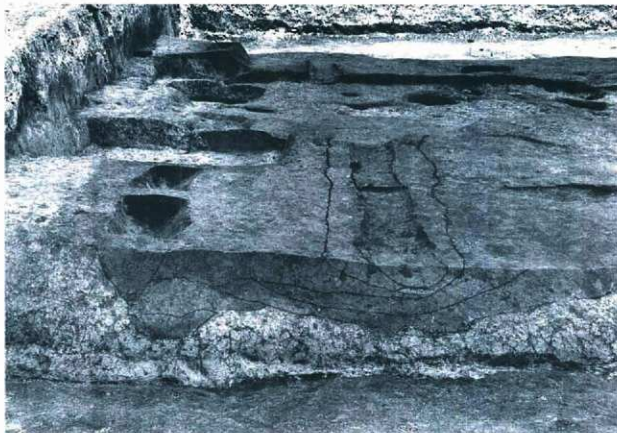


3. SD-1 プラン検出 (南から)



第9図 第1面1ブロック遺構実測図

図版—3 第1面 1ブロック (2)



1. SD-1-7 完掘 (南から)



2. SD-2 プラン検出 (南から)



3. SD-2 完掘 (南から)



1. SD-2・4 プラン検出/
SF-4 完掘 (南から)

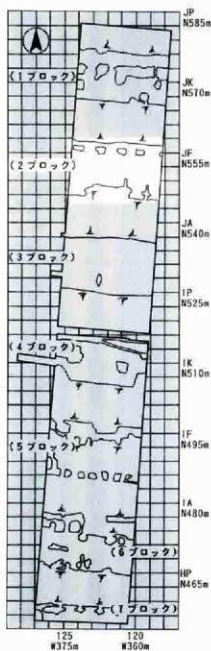


2. 中央部宝永火山灰
検出範囲 (南から)



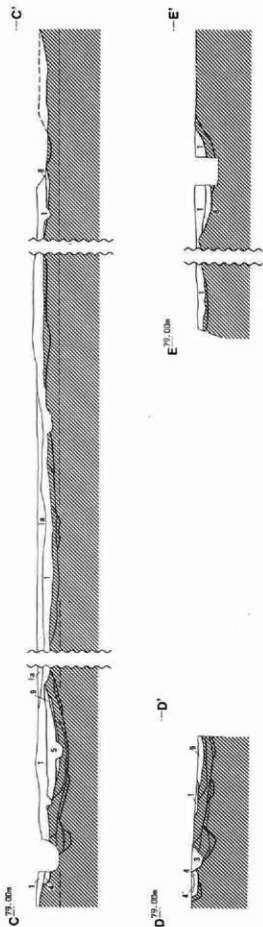
3. SF-5 上層硬化面
(南から)

第1面 2ブロック

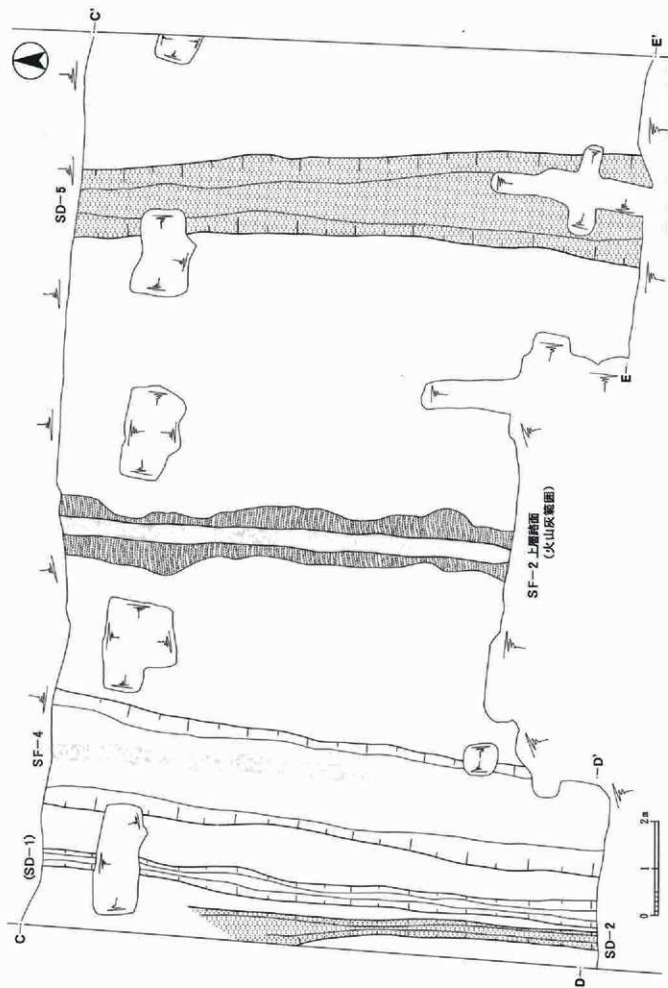


〈土質説明〉

- 1 暗灰褐色土 (表土層、粒子が細かく砂質)
- 2 茶褐色土 (SD-1面上、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まり・粘性は共に強い)
- 3 茶褐色土 (SD-2面上、3に類似するが色調はやや暗い、下部に黒色土粒子・ロームブロックを多く含む)
- 4 (SD-2面上1層、4に類似する)
- 5 暗茶褐色土 (SD-7面上、暗褐色土 (自然) ブロック・ローム粒子を含む、粘出状にはあり、締まりあり)
- 6 暗茶褐色土 (SD-5面上、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 7 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む、締まりは強い)



第10図 第1面2ブロック土層断面図



第11図 第1面2ブロック遺構実測図

図版-5 第1面 2ブロック(1)



1. SD-1 完掘/SD-2・7 プラン検出 (南から)



2. SD-1・2 完掘 (南から)



3. SD-5 完掘 (南から)

1. SD-3 完掘/SF-4
完堀 (南から)



2. 中央部宝永火山灰
検出範囲 (南から)

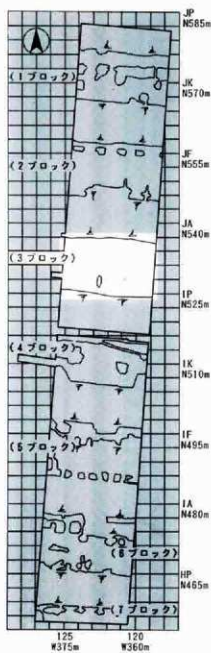


3. 調査風景



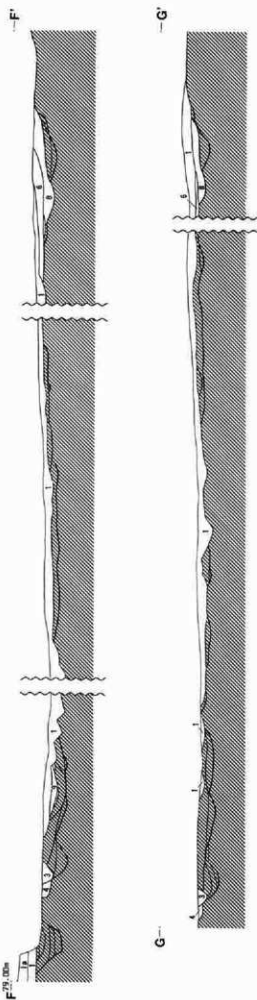
第1面

3ブロック

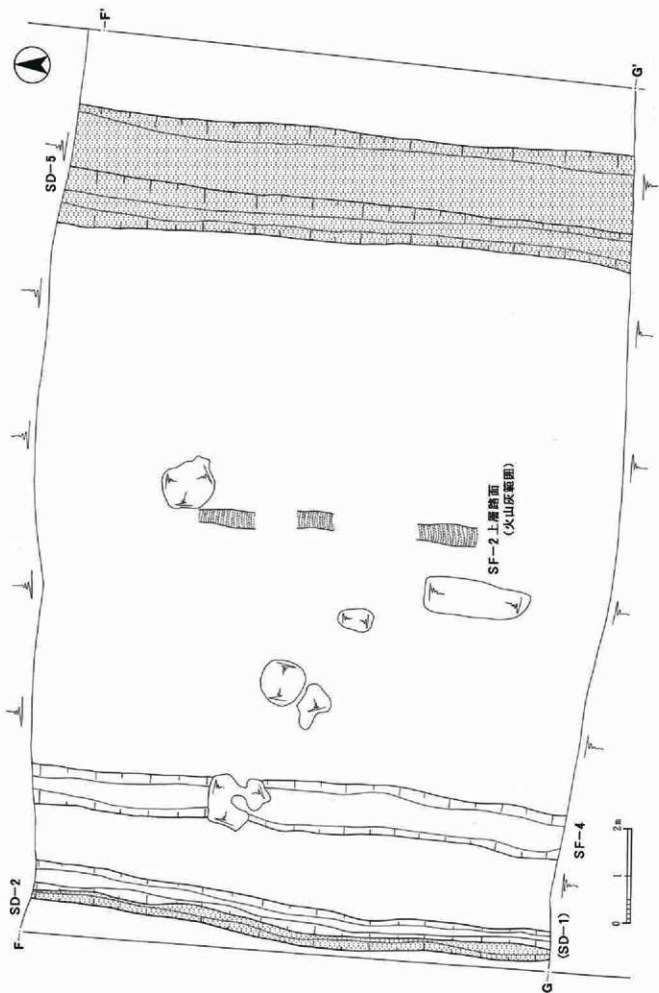


<土層説明>

- 1 明成赤色土 (表土層、砂子が細かく砂質)
- 2 赤褐色土 (SD-1層土、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まり・軟性は表に強い)
- 3 赤褐色土 (SD-2層土、3に類似するが色調はやや暗い、下部に黒色土粒子・ロームブロックを多く含む)
- 4 暗茶褐色土 (5と同一層だが色調はやや暗い)
- 5 明茶褐色土 (SD-3層土、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 6 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む、締まりは強い)

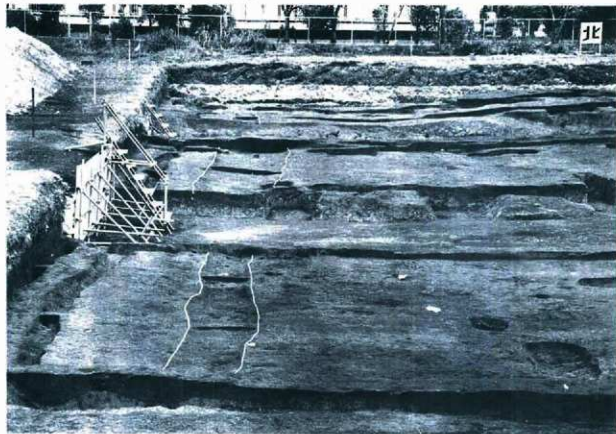


第12図 第1面3ブロック土層断面図



第13図 第1面3ブロック遺構実測図

図版-7 第1面 3ブロック (1)



1. SD-1・SF-4 完掘 (南から)

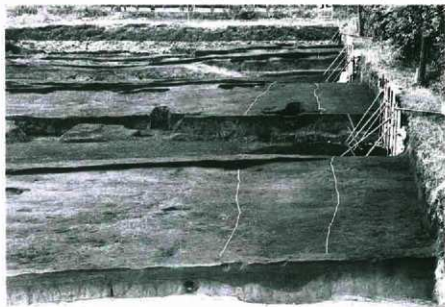


2. SD-2 プラン検出 (南から)

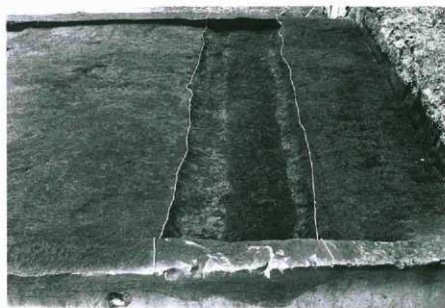


3. SD-2 完掘 (南から)

1. SD-5 プラン検出
(南から)



2. SD-5 完掘 (南から)

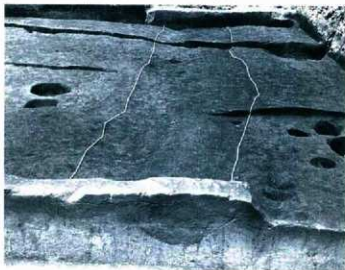
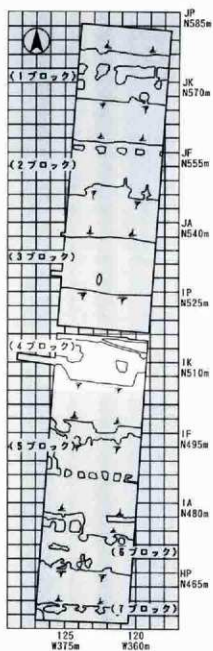


3. 中央部宝永火山灰
検出範囲 (南から)



第1面

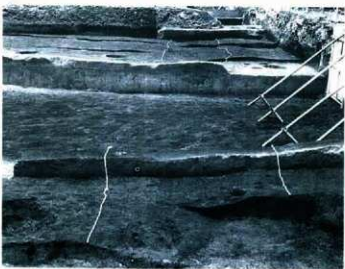
4ブロック



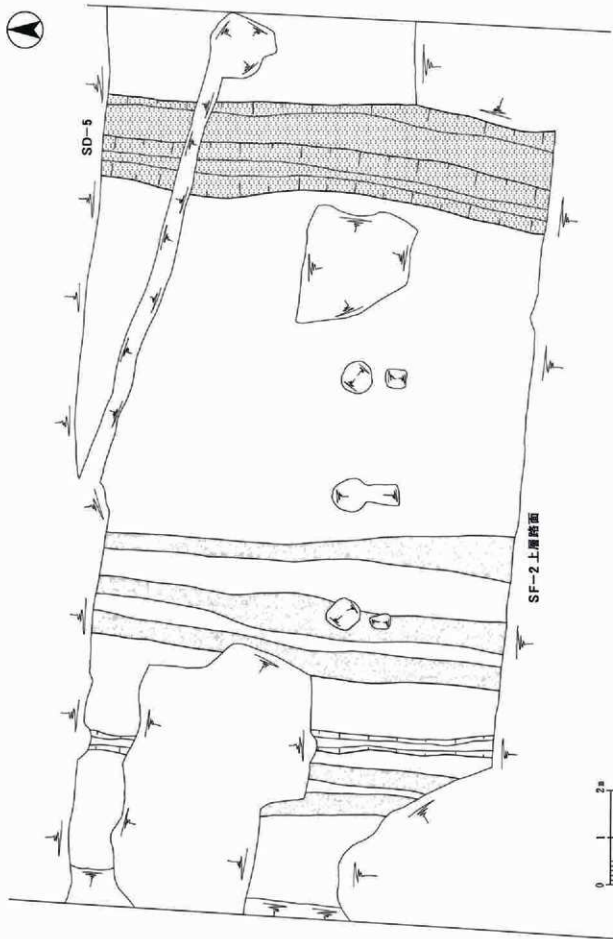
1. 4ブロック SD-5 完掘 (南から)



2. 4ブロック 中央部硬化面 (南から)

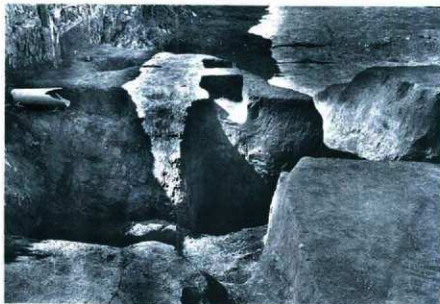


3. 5ブロック SD-5 完掘 (南から)



第14図 第1面4ブロック遺構実測図

図版—10 第1面 5~7ブロック



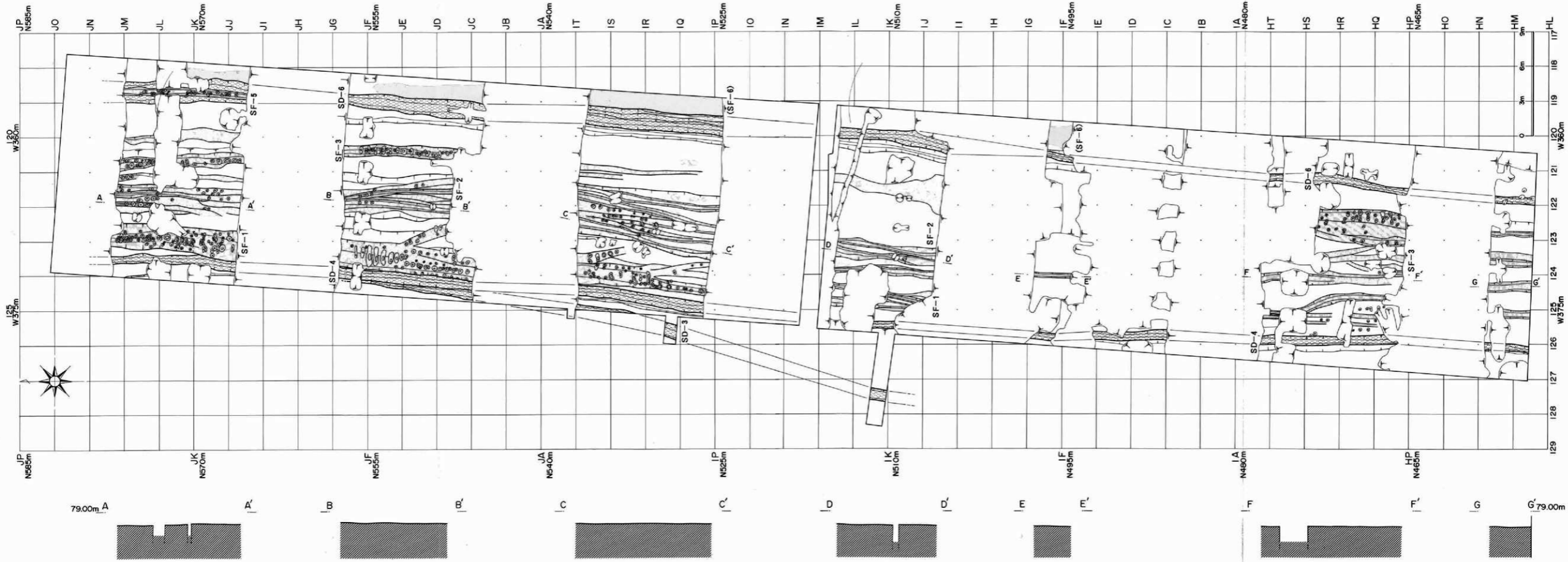
1. 5ブロック SD-1 完掘
(南から)



2. 6ブロック SD-1 完掘
(南から)



3. 7ブロック SD-1 完掘
(南から)



第15図 歴史時代第2面遺構全体図



1. SD-4-8 プラン検出 (南から)



2. 完掘 (南から)

図版-12 第2面 全景(2)



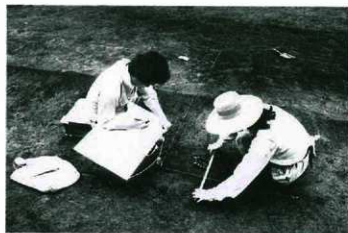
1. 6~7ブロック 完掘(北から)



2. 1~2ブロック 完掘(南から)



1. 1-3ブロック 完掘 (南から)



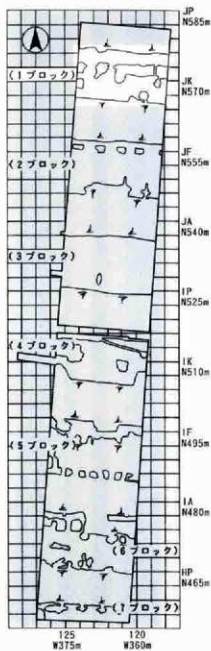
2. 調査風景



3. 調査風景

第2面

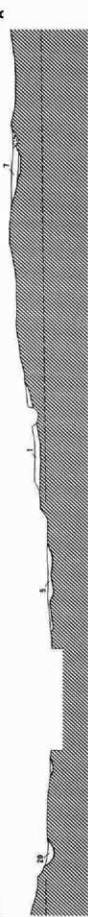
1ブロック



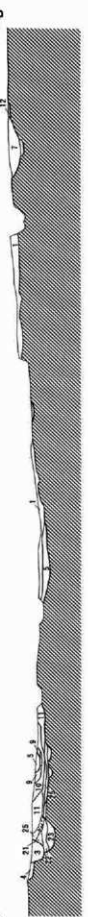
(土層説明)

- 1 暗茶褐色土 (表土層、粒子が細かく砂質)
- 2 赤褐色土 (SD-1覆土、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まり・粘性は共に弱い)
- 3 赤褐色土 (SD-2覆土、3に類似するが色調はやや暗い、下部は黒色土粒子・ローム粒子を多く含む)
- 4 赤褐色土 (SD-2覆土、3に類似するが色調はやや暗い、下部は黒色土粒子・ローム粒子を多く含む)
- 5 暗茶褐色土 (SD-3覆土、暗褐色土 (II層) ブロック・ローム粒子を含む、粘性僅かにあり、締まりあり)
- 6 暗茶褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む、下部は締まりが強く前下部は硬化層)
- 7 暗茶褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 8 暗茶褐色土 (ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 9 暗茶褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 10 暗茶褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 11 暗茶褐色土 (黒色土粒子を多く含む、締まりは強い)
- 12~15 暗茶褐色土 (SD-4覆土、黒色土・ローム粒子を多く含む、色調は下部に行くにつれやや暗くなり締まりも強くなる、前下部は硬化層)
- 21・22・24 暗茶褐色土 (SD-4覆土上部、色調は類似するが明確にやや差がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 23 暗茶褐色土 (SD-4覆土下部、締まりは強く上部に硬化層がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 25・26 暗茶褐色土 (SF-1覆土、砂質粒子をのみ固く締まっている、下部の色調はやや暗味を呈す)

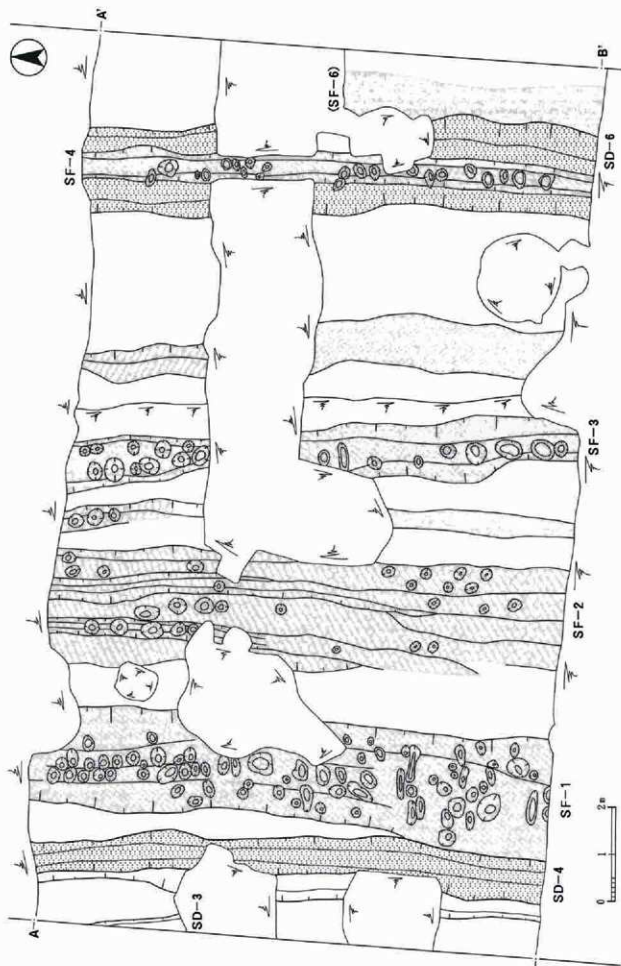
A 20.0m



B 20.0m



第16図 第2面1ブロック土層断面図



第17図 第2面1ブロック遺構実測図

図版—14 第2面 1ブロック(1)



1. SD-4 中間硬化面検出
(南から)



2. SF-5 完掘 (南から)



3. SD-6・SF-5 完掘
(南から)



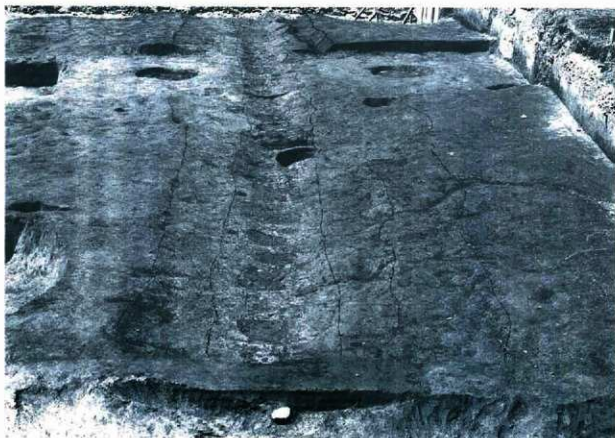
1. 完掘全景 (西から)



2. SD-4 完掘/SF-1 硬化面検出 (南から)



1. SF-2 硬化面検出 (南から)



2. SF-5 硬化面検出 (南から)

1. SF-1 北側硬化面
検出近景 (西から)

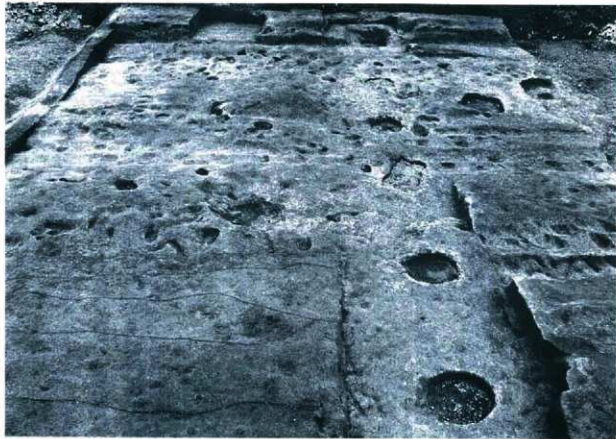


2. SF-1 南側硬化面
検出近景 (西から)

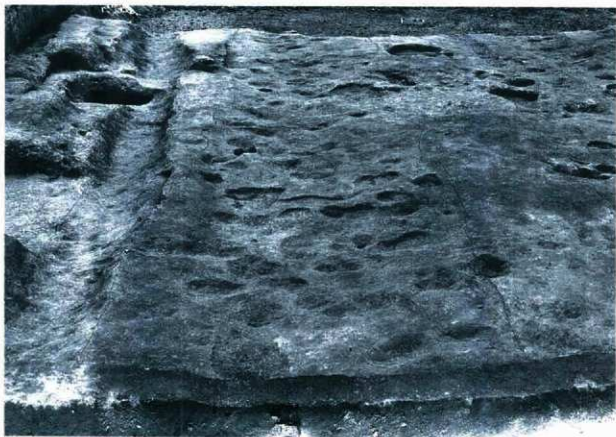


3. SF-3 硬化面
検出近景 (南から)





1. 完掘全景(東から)



2. SF-1 完掘(南から)



1. 完掘全景 (南から)



2. SF-2 完掘 (南から)



3. SF-3 完掘 (南から)

図版—20 第2面 1ブロック (7)



1. No.1セクション中央部 (北から)



2. No.2セクション西側 (南から)



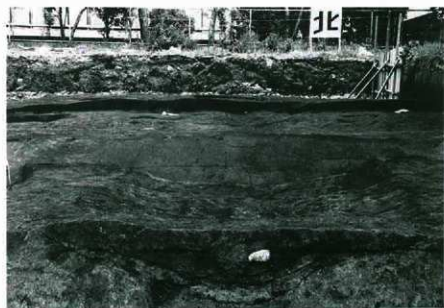
3. No.2セクション中央部 (南から)



1. Na2 セクション東側 (南から)



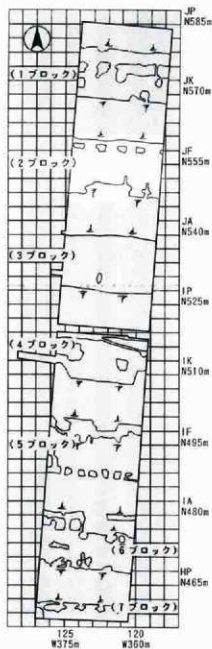
2. 西側サブセクション
(南から)



3. 東側サブセクション
(南から)

第2面

2ブロック



(土質説明)

- 1 明茶褐色土 (最上層、粒子が細かく均質)
- 2 明茶褐色土 (1よりやや明るい、表土層、暗褐色土粒子を含む)
- 3 茶褐色土 (SD-1層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、粘まり・粘性は共に強い)
- 4 茶褐色土 (SD-2層上、3に類似するが色調はやや暗い、下部に黒色土粒子・ローム土を多く含む)
- 4' (SD-2層上上部、4に類似する)
- 5 暗茶褐色土 (SD-7層上、暗褐色土 (目粉) ブロック・ローム粒子を含む、粘性僅かにあり、粘まりあり)
- 6 明茶褐色土 (SD-5層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、粘まりは強い)
- 7 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む、粘まりは強い)
- 8 暗茶褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 11 明茶褐色土 (黒色土粒子を多く含む、粘まりは強い)
- 12~15 暗茶褐色土 (SD-6層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、色調は下部に行くにつれやや暗くなり粘まりも強くなる、最下部は硬化層)
- 20 茶褐色土 (SD-3層上下部、ローム土主体、黒褐色土粒子を含む、粘まり・粘性共に強い)
- 21・22・24 暗茶褐色土 (SD-1層上上部、色調は類似するが明確にやや差がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 23 暗茶褐色土 (SD-1層上下部、粘まりは強く上部に硬化面がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 25・26 暗茶褐色土 (SD-1層上、砂質粒子を含み固く粘まっている、下部の色調はやや赤みを呈す)

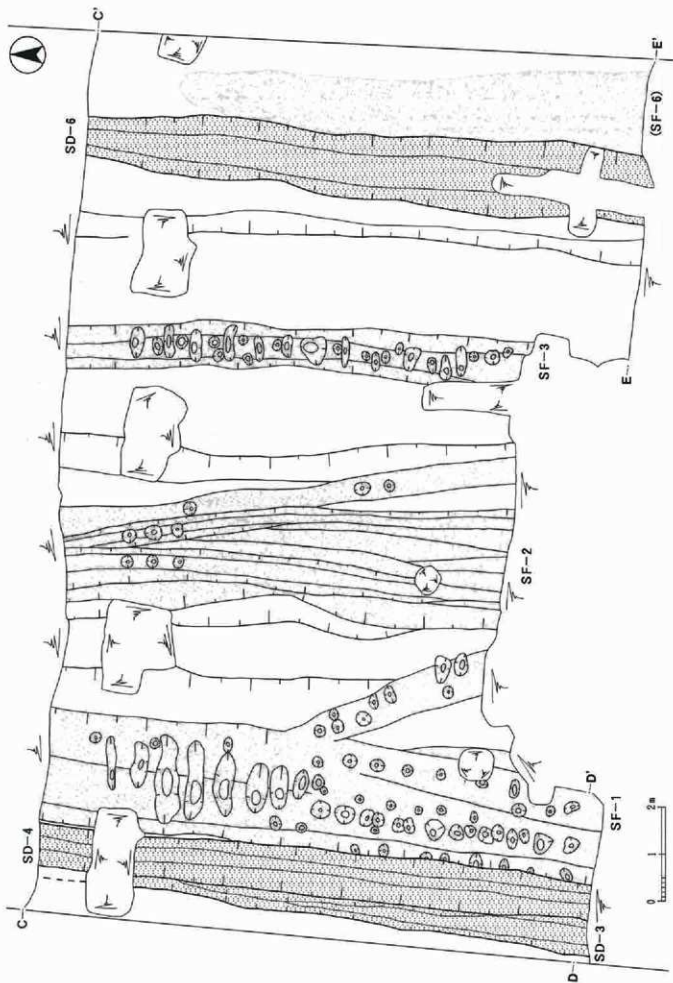
C 79.00m



D 79.00m



第18図 第2面2ブロック土層断面図



第19図 第2面2ブロック遺構実測図



1. SD-4 中間酸化面検出
(北から)



2. SD-4 完掘 (南から)



3. SD-6 完掘 (南から)



1. SF-1 硬化面検出 (南から)



2. SF-2 硬化面検出 (南から)



1. SF-1 硬化面検出
(西から)



2. SF-1 南側硬化面
検出近景 (西から)



3. SF-3 硬化面検出
(北から)

1. SF-1 完掘 (南から)



2. SF-1 完掘近景
(南から)



3. SF-2 完掘近景
(南から)

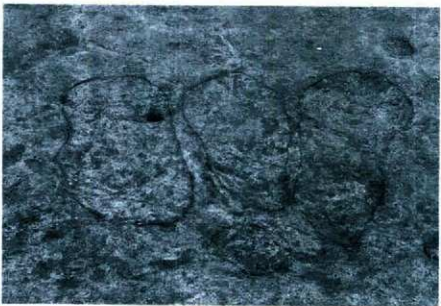




1. SF-3 完掘近景
(南から)



2. SF-1 完掘接写
(西から)



3. SF-1 完掘接写
(西から)



1. No.3セクション全景(北から)



2. No.3セクション西側(北から)



3. No.3セクション中央部(北から)

1. No.3セクション・
SD-4 (北から)



2. No.3セクション・
SF-1・4 (北から)



3. No.4セクション西側 (南から)





1. No 4 セクション・
SD-5・6 近景 (南から)



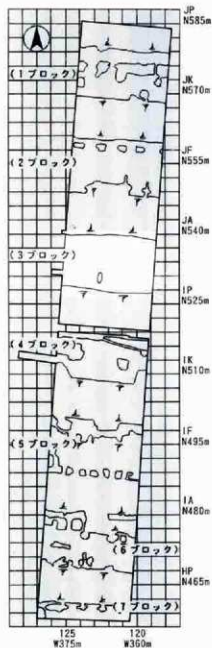
2. No 4 セクション・
SD-1・4 近景 (南から)



3. 西側サブセクション
(南から)

第2面

3ブロック



(土層説明)

- 1 暗灰褐色土 (表土層、粒子が細かく砂質)
- 2 暗灰褐色土 (1よりやや明るい、表土層、暗褐色土粒子を含む)
- 3 赤褐色土 (SD-1層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 4 赤褐色土 (SD-2層上、3に類似するが色調はやや暗い、下部に黒色土粒子・ローム粒子を多く含む)
- 5 暗赤褐色土 (5と同一層だが色調はやや暗い)
- 6 暗赤褐色土 (SD-5層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 7 暗赤褐色土 (ローム粒子を多く含む、締まりは強い)
- 8 暗赤褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 9 暗赤褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 10 暗赤褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 11 暗赤褐色土 (黒色土・ローム粒子を多く含む)
- 12-15 暗赤褐色土 (SD-6層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、色調は下部に行くにつれやや暗くなり締まりも強くなる、基下層は酸化層)

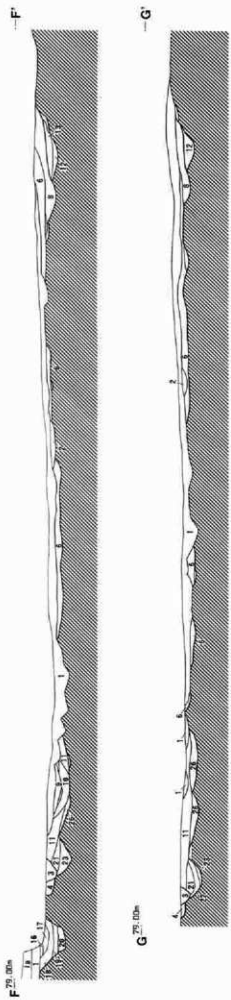
16-19 暗赤褐色土 (SD-3層上層上層、色調は各層とも類似するが、明暗にやや差がある、黒色土・ローム粒子を多く含む、19は締まりが強く下部は酸化層)

20 黄褐色土 (SD-3層上下層、黒色土・ローム粒子を多く含む、締まりは強い)

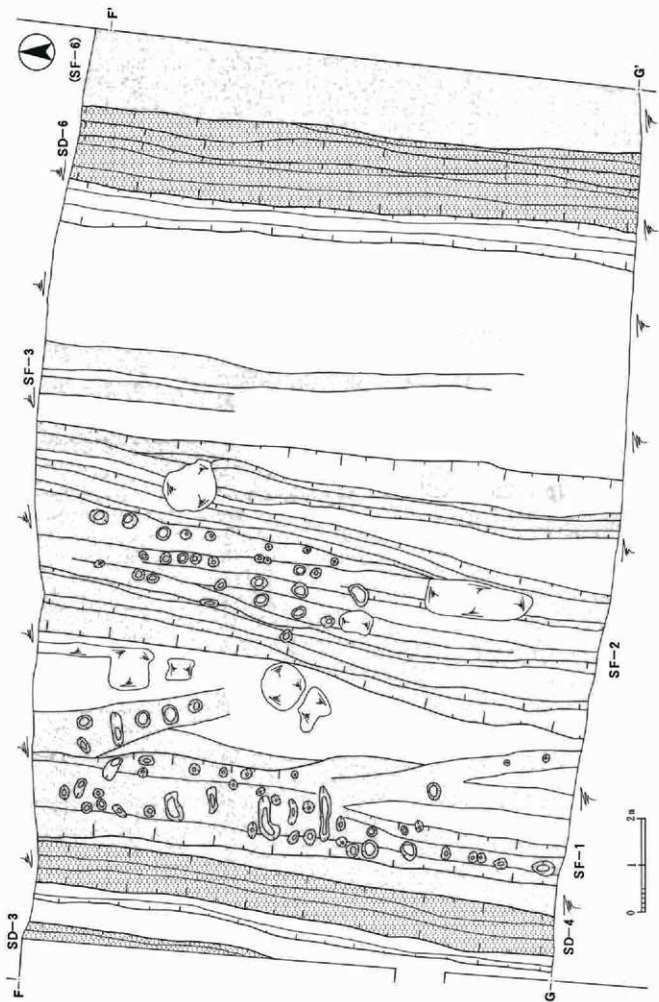
21・22・24 暗赤褐色土 (SD-4層上層上層、色調は類似するが明暗にやや差がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)

23 暗赤褐色土 (SD-4層上下層、締まりは強く上部に酸化層がある、黒色土・ローム粒子を多く含む)

25・26 暗赤褐色土 (SF-1層上、砂質粒子を含み固く締まっている、下部の色調はやや本城を呈す)



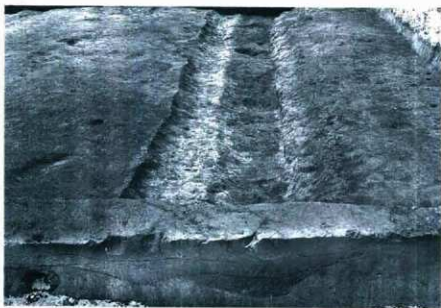
第20図 第2面3ブロック土層断面図



第21図 第2面3ブロック遺構実測図



1. SD-4 中間硬化面検出
(南から)



2. SD-6 中間硬化面検出
(南から)



3. SD-3 完掘(北から)



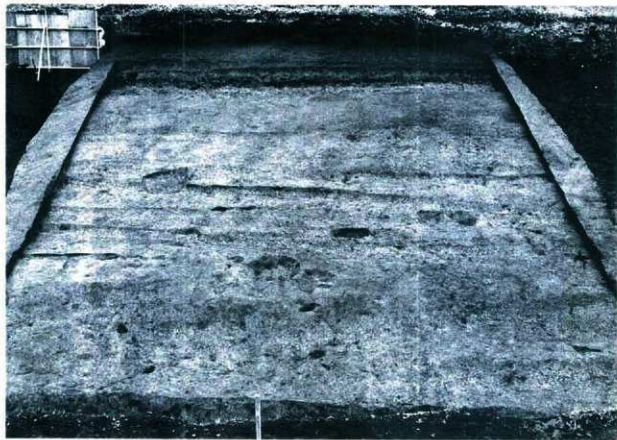
1. SD-4 完掘 (南から)



2. SD-6 完掘 (南から)



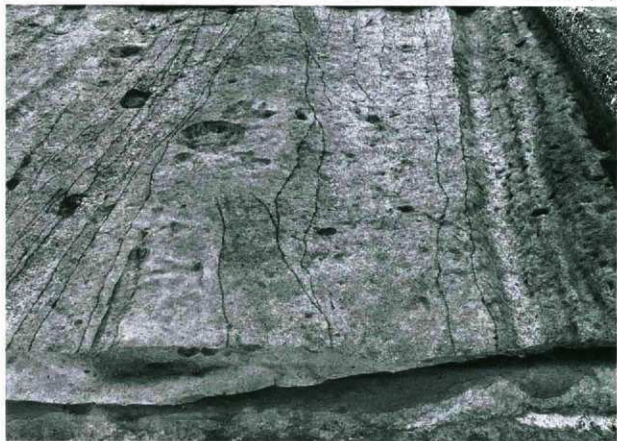
3. 完掘全景 (南から)



1. 完掘全景 (西から)



2. SF-2 完掘 (南から)



1. SF-1 完掘 (北から)



2. SD-4・SF-1 完掘 (南から)



1. SF-1 北側硬化面検出
(西から)



2. SF-1 北側硬化面検出
(西から)



3. SF-3 硬化面検出
(南から)

1. SF-1 完掘 (南から)

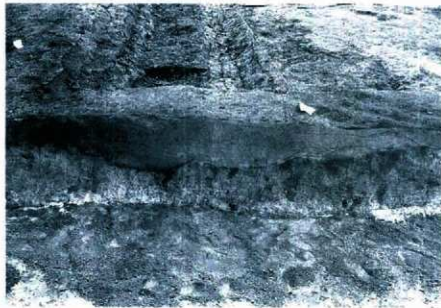


2. SF-1 北側完掘
(西から)



3. SF-1 南側完掘
(西から)

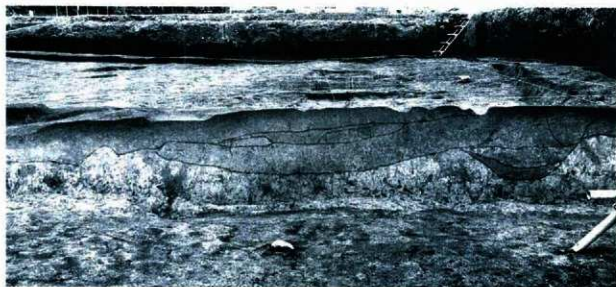




1. No.5 セクション・
SD-5・6 (北から)



2. No.5 セクション中央部
(北から)



3. No.5 セクション西側 (北から)

1. No.5 セクション・SF-3
近景(北から)



2. No.5 セクション・SD-4
(北から)



3. No.5 セクション・
SD-3・4 (北から)





1. No.6セクション西側(南から)

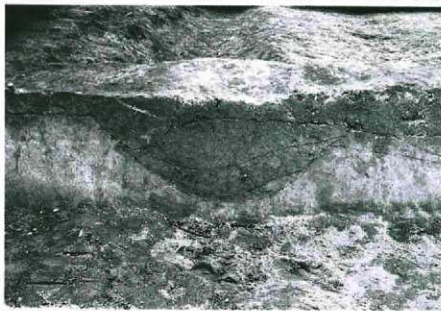


2. No.6セクション中央部(南から)



3. No.6セクション東側(南から)

1. No.6 セクション・SD-4
近景 (南から)



2. No.6 セクション・SF-2
近景 (南から)

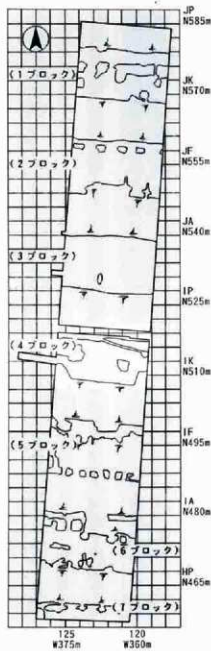


3. 西側サブセクション
(南から)



第2面

4ブロック

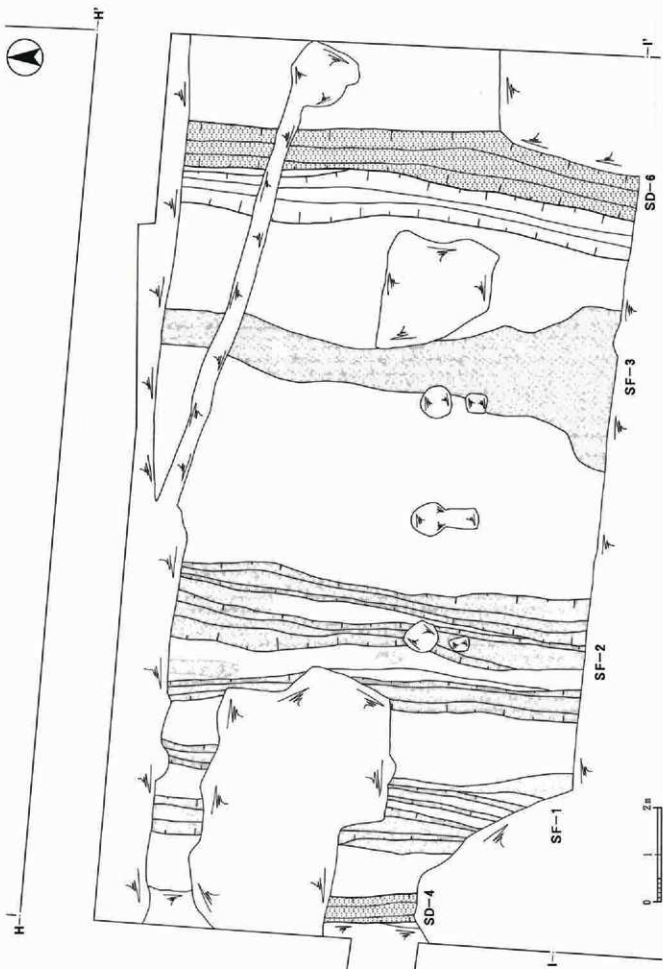


《土層説明》

- 1 褐色細砂土 (表土層、粒子が細かく砂質)
- 2 褐色細砂土 (1よりやや粗い、表土層、暗褐色土粒子を含む)
- 3 赤褐色土 (SD-1層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 4 赤褐色土 (SD-2層上、暗褐色土 (田舎) ブロックを多く含む、結まりあり)
- 5 赤褐色土 (SD-3層上、暗褐色土 (田舎) ブロックを多く含む、結まりあり)
- 6 暗茶褐色土 (SD-4層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 7 暗茶褐色土 (SD-5層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 8 暗茶褐色土 (SD-6層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 9 暗茶褐色土 (SD-7層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 10 暗茶褐色土 (SD-8層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 11 暗茶褐色土 (SD-9層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 12~15 暗茶褐色土 (SD-10層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、色調は下部に行くにつれやや暗く多量に結まりを多く含む。最下部は硬化層)
- 16 暗茶褐色土 (SD-11層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 17 暗茶褐色土 (SD-12層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 18 暗茶褐色土 (SD-13層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 19 暗茶褐色土 (SD-14層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 20 暗茶褐色土 (SD-15層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 21 暗茶褐色土 (SD-16層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 22 暗茶褐色土 (SD-17層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 23 暗茶褐色土 (SD-18層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 24 暗茶褐色土 (SD-19層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)
- 25 暗茶褐色土 (SD-20層上、黒色土・ローム粒子を多く含む、結まりは弱)



第22図 第2面4ブロック土層断面図



第23図 第2面4ブロック遺構実測図



1. SD-4 完掘 (南から)



2. SD-6 中間硬化面検出
(南から)



3. SD-6 完掘 (南から)



1. 完掘全景 (西から)



2. 完掘全景 (南から)

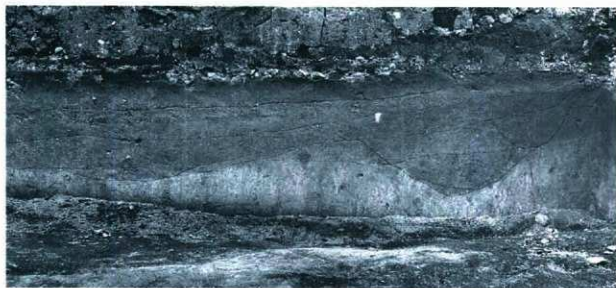


3. SF-1 近景 (南から)

図版—42 第2面 4ブロック(3)



1. No.7セクション全景(北から)



2. No.7セクション西側(北から)



3. No.7セクション東側(北から)



1. No.7 セクション中央部
(北から)



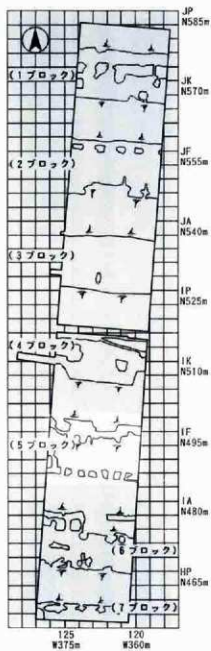
2. No.9 セクション西側
(南から)



3. No.9 セクション東側 (南から)

第2面

5ブロック



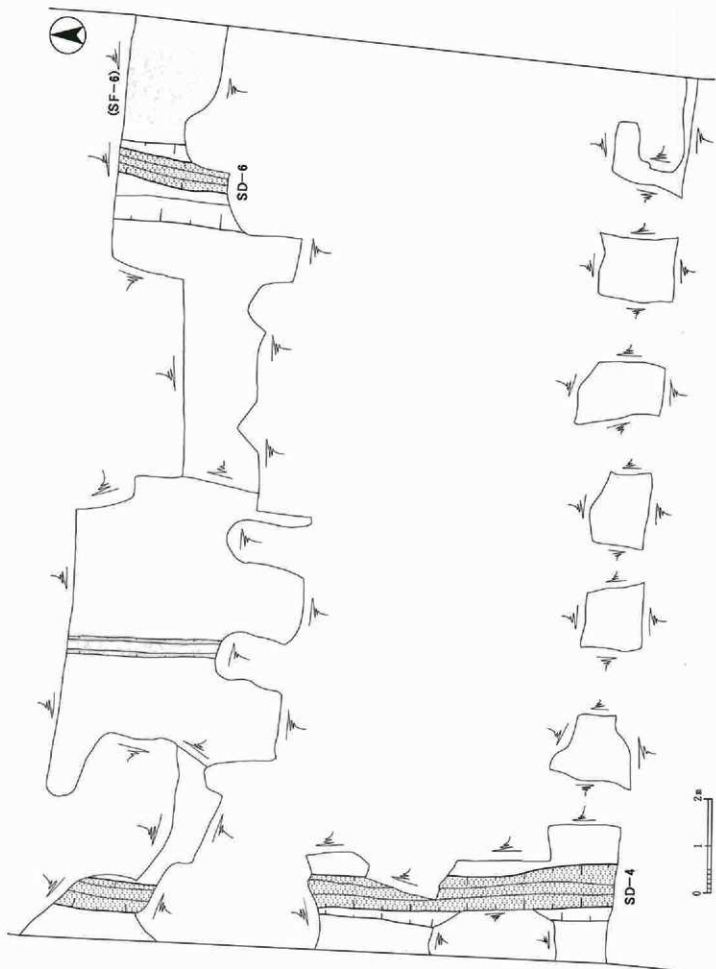
1. SD-4 中間硬化面検出 (南から)



2. SD-4 完掘 (南から)

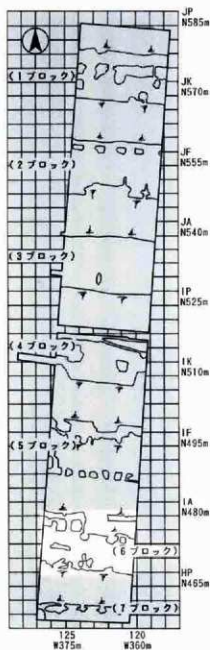


3. No10セクション東側 (北から)

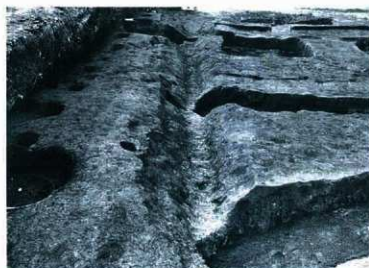


第24図 第2面5ブロック造構実測図

第2面
6ブロック



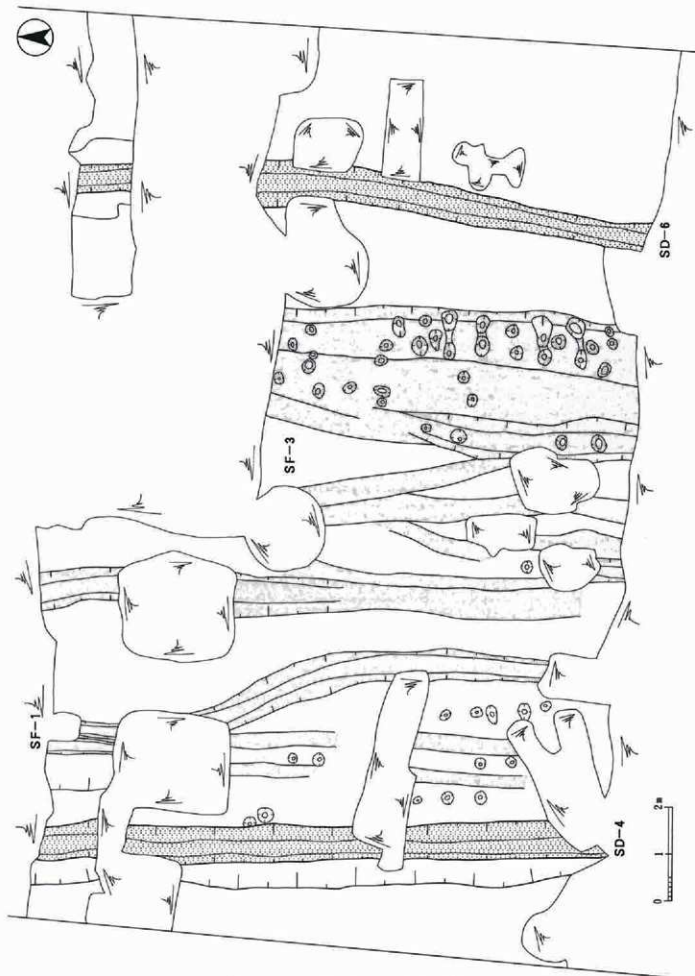
1. SD-4 中間硬化面検出 (南から)



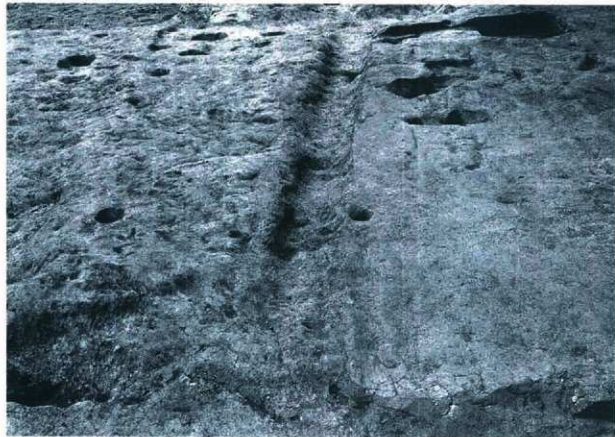
2. SD-4 完掘 (南から)



3. SD-6 プラン検出 (北から)



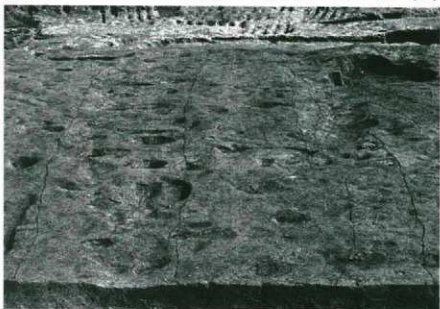
第25図 第2面6ブロック造構実測図



1. SD-6 完掘 (南から)



2. SF-3 硬化面検出 (南から)



1. SF-3 近景 (北から)



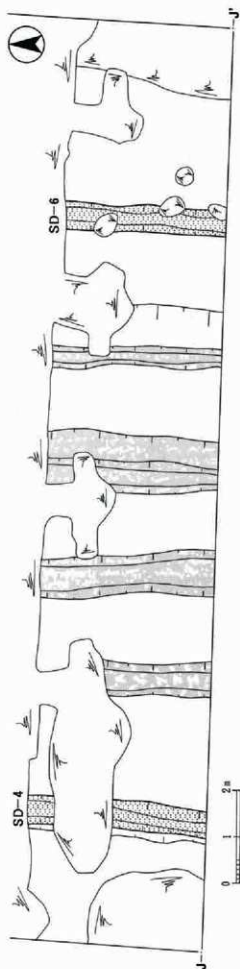
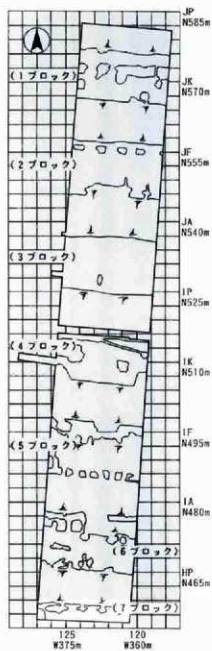
2. SF-3 近景 (東から)



3. SF-1 近景 (南から)

第2面

7ブロック



第26図 第2面7ブロック遺構実測図

1. SD-4 中間硬化面検出
(北から)



2. 中央路面部完掘
(北から)



3. SD-6 完掘 (北から)



4. SD-4 完掘 (北から)

2. 遺物

該期の遺物は図示した陶器1点・金属製品1点・貨幣6点・瓦13点と須恵器・土師器・瓦の細片110点が出土しており、金属製品・貨幣を除き大半が破片資料である。出土位置は、路面や溝跡の覆土中からのものが多く遺構の性格上埋没過程における流れ込みか遺棄遺物と思われる。そのほかに2ブロックSD-5覆土中及びその周辺から馬歯が、南ブロック1c層（表土）から獣骨が出土している。

1（第27図・図版59）は、常滑系の甕の底部の転用品。14～15世紀頃の所産と推定される。器厚は12.5～19mm。色調は茶色で裏面下部は施釉されている。割れ口の四方が摩耗しており、特に上部の摩耗が著しい。出土位置は6ブロックのSD-1覆土中程である。

2（第27図・図版59）は、目貫。中世末頃の所産と推定される。銅製で御葉を模して製作されたと思われる。左側付け根部には幅2～3mm、長さ9mmの木枝状の棒が縦に取り付いており、付け根部からは膨らみを持ち広がっていき、中程から先端に向かっては狭まっていく。先端部はやや上向き方向に細く尖っており、表面中央には幅1mm程の葉脈状の膨らみが横方向に一本走る。裏面は中央部全体が皿状に窪んでおり、中央部には取り付け金具の痕跡が僅かに残っている。全長50mm、最大幅8.4mm、中央部の厚さ2.5mm、重量3.5gを測る。完形品で裏面はやや錆びているものの遺存状態は良好である。出土位置は1ブロックSF-4の覆土上層からである。

3～8（第27図・図版59）は、貨幣。説明は下記の第1表にまとめた。

9（第27図・図版59）は、男瓦の破片。擾乱部分からの出土である。

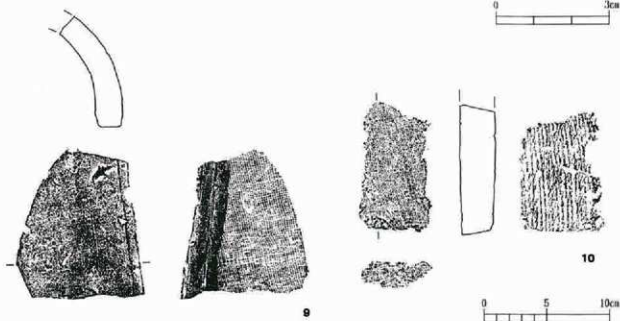
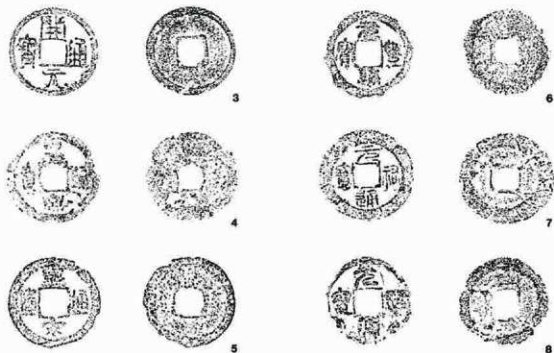
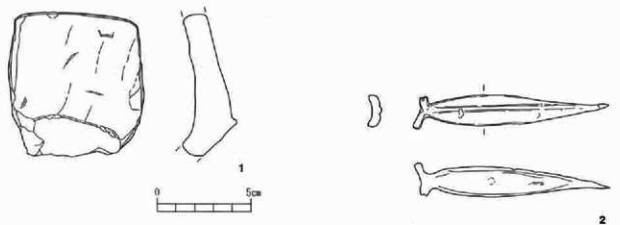
10～21（第27～29図・図版59～60）は、女瓦の破片。出土位置は、11・13号擾乱からで、その他は溝跡の覆土から出土している。

第1表 出土貨幣一覧表

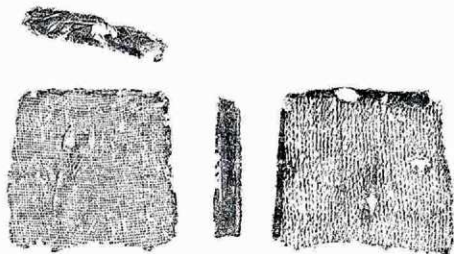
番号-挿図 (図版)	古銭名	初鋳年 (西暦)/時代	径 (cm)	量目 (g)	出土位置	特徴・備考
3-27(49)	開元通寶	621/唐	2.44	2.10	2ブロックSF-1B	銅銭。無背。
4-27(49)	皇宋通寶A	1039/北宋	2.50	1.30	2ブロックSF-1B	銅銭。無背。外輪が一部欠損。文字不鮮明。
5-27(49)	皇宋通寶B	n/n	2.50	1.95	2ブロックSF-1B	銅銭。無背。
6-27(49)	元豐通寶	1078/n	2.48	2.04	表土一括	銅銭。無背。
7-27(49)	元祐通寶A	1086/n	2.57	2.06	擾乱一括	銅銭。無背。外輪が太い。
8-27(49)	元祐通寶B	n/n	2.42	1.92	1ブロックSF-1B	銅銭。無背。外輪が劣化し欠損。

引用・参考文献

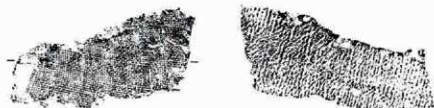
竹尾進 「3. 中世以降/多摩ニュータウンNa4 8 4 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和58年度（第3分冊）-東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集- 東京都埋蔵文化財センター 1984・3



第27图 出土遗物(1)



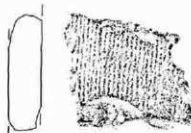
11



12



13



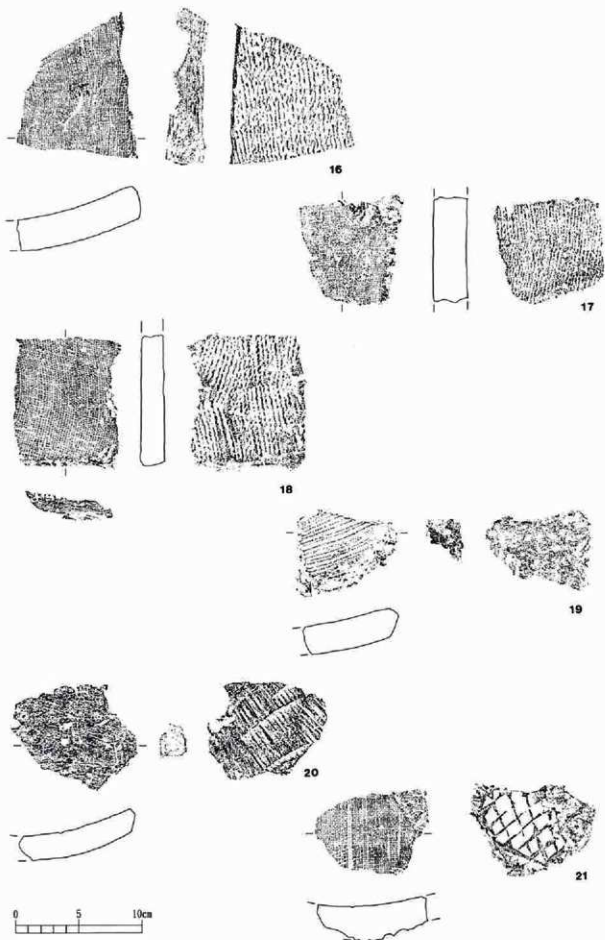
14



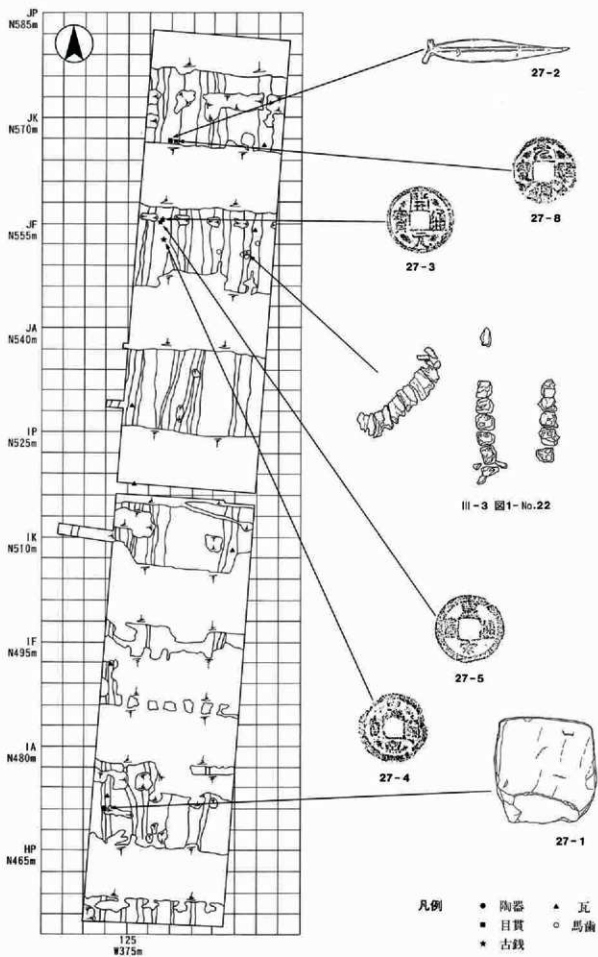
15



第28図 出土遺物(2)



第29図 出土遺物(3)



第30圖 遺物分布圖



27-1



27-2



27-3



27-9



27-4



29-17



27-5



28-14



27-6



27-7



29-18



27-8

図版—50 出土遺物(2)



28-11



28-12



28-13



27-10



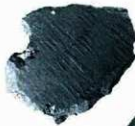
29-16



29-19



29-21

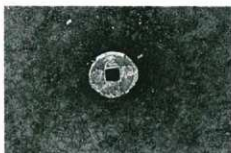


29-20



28-15

图版—51 遺物出土狀況 (1)



3. 武蔵国分寺跡北西地区遺跡出土のウマ遺体

金子 浩昌

はじめに

本遺跡からは幾つかのウマの遺骸が出土している。残されていたのはすべて歯のみであったが、上・下の臼歯列が確認されその場所に頭蓋、下顎骨の埋存していることが推測された。当時のウマの遺骸に対する扱い方を知り得る貴重な資料である。これまでに国分寺関係の遺跡からはウマの遺骸の出土があったが、報告される機会が無いままにきたのが現状である。今回の調査に当たり東京都教育庁文化課の早川泉氏、西国分寺地区遺跡調査会の板野晋鏡氏に種々御教示いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

ウマの歯とその出土状況

本地区ではウマの歯が数地点で出土しているが、特に2ブロック東側地点で集中的に出土していた。

No22 (図1・図版51)：ここには1～20の連番号によって採取された標本がある。それらは精査すると次のような上顎歯列の歯と下顎歯列の歯であった。上・下の顎骨の順に記載するので、1番からの番号順にはなっていない。

上顎歯列の臼歯

7～12：右側上顎歯列、 $P^2 \sim P^4$ 、 $M^1 \sim M^2$ までの歯が順次それに該当する。

14～18：左側上顎歯列、 P^3 、 P^4 、 $M^1 \sim M^2$ までの歯が順次それに該当する。この歯列では P^2 が欠けているが、右側の P^2 も破損が激しいので何等かの理由でこの部分が破損したのであろう。

下顎歯列の臼歯

1～6：右側下顎歯列、 $M_3 \sim M_1$ 、 $P_4 \sim P_2$ までの歯が順次それに該当する。

19：この番号として採取された歯は上記右側歯列の3～5の下面にあった歯であって、これらの歯は左側 $M_3 \sim M_1$ であった。

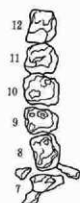
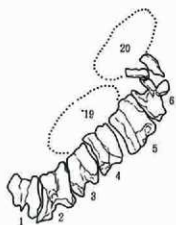
20：ここでは一括して採取された下顎歯があったが、これらは左側 $P_3 \sim P_4$ である。この歯は19として採取された歯と同一の個体と考えられるもので、なんらかの理由で前臼歯の部分のみずれたものと考えられる。

以上のべた各歯列から考えられるウマの顎骨の埋存の状況は、7～18までの上顎歯で示される左右の歯列が解剖学的な位置を保って並び、咬面を下にしていることからここには頭蓋がほぼ平らにおかれていたと推定される。

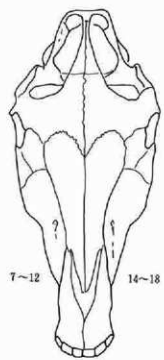
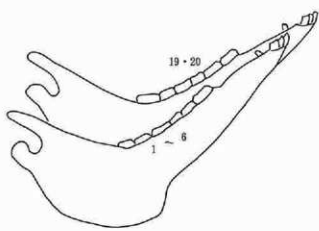
1～6までの右側下顎歯は傾側をみせて横倒しの状態で並んでおり、右側の下顎骨が倒れた状態であり、さらにその反対側に左側の下顎骨がほとんど重なるようなかたちであったようである。ただ左側は歯が何故か前臼歯部分と後臼歯部分がずれているかたちになっているので、左右の下顎骨自体が当初からずれていたと考えられる。

この頭蓋の向きと下顎骨の向きは同じでなく、互いに反対の方向をむいていたことになる。

No23(図版52)：右側 $P_3 \sim P_4$ 、 $M_1 \sim M_3$ が順次並び、左側 M_1 が P_3 のさらに前の位置にあった。右側の下顎



No. 22



III-3 図1 No.22馬歯出土状況/頭蓋と下顎骨の位置推定図(数字は上図の臼歯につけられた番号)

歯列は頰側を向けて正常に並んでおり、ここに右側の下顎骨が横倒しの状態にあったと思われる。ただし左側M₁の歯については原位置にあったかどうか不明である。

計測値を示しておく。(文中の御崎ウマ、トカラウマについての計測値は西中川駿(1989)による)ウマの歯列長

No23 P₂~M₃: 155mm± (P₂は欠けているので推定値)、M₁~M₃: 85mm±

No22 P²~M³: 135mm± (P²が欠けているので推定値)、M¹~M³: 66mm±

No23の下顎白歯長は日本の在来馬の一つ御崎ウマの歯の大きさと一致し、No22の上顎白歯長は日本在来馬中もっとも小さいトカラウマよりもさらに小さい。このことから出土したウマは白歯からみれば限り、いわゆる中型馬の中でもより小さい個体と、いわゆる小型馬にはいるような大きさの個体であった。ちなみに御崎ウマの歯の体高 131cm、トカラウマの歯の体高 117cmである。このNo23にみた大きさは古代から近世のウマにもっとも普通にみる大きさであり、No22の小型馬の例は稀である。

No24・No25・No26 (図版52):ウマ白歯片。

No27・No28 (図版52):上顎白歯片。

次の骨格は近年のものとの混入である。

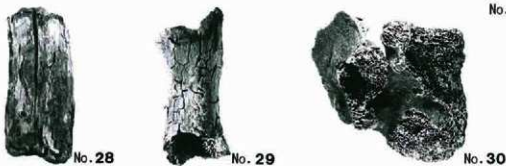
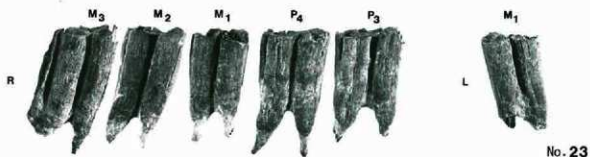
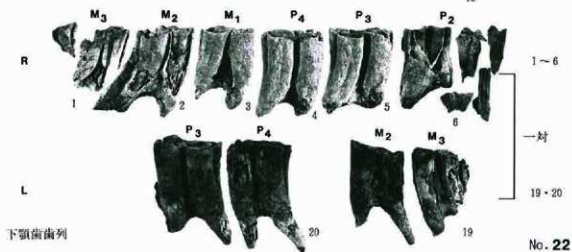
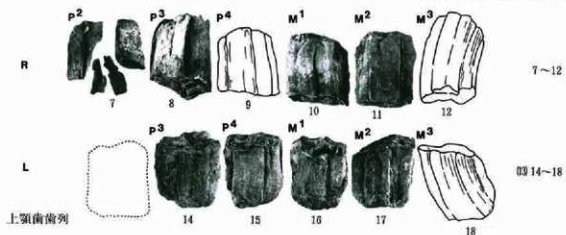
No29 (図版52):ブタ、大腿骨片。 No30 (図版52):ウシ、胸椎片。

要 約

上述したように本遺跡でのウマの遺骸は歯と顎骨からなるものであって、頭蓋、四肢骨、胴骨などを全く検出することはできなかった。これらの骨格が当初からなかったかどうかについては問題の残るところであるが、上下顎骨の出土状況からみてこの場所にウマが埋葬された形跡はみられないので、やはり単独に頭蓋、下顎骨があったものと想定しておきたい。

1. No22. 頭蓋とそれに隣接して反対の向きに左右の下顎骨が重なるように横に倒れていた。
2. No23. 右側の下顎骨が横に倒れた状態で埋存していた。左側は歯1点。
3. 点在する歯。
4. 新しいブタなどの骨。

以上の要約から、本地区の2ブロックにあったウマの頭蓋と下顎骨、下顎骨のみ例が確認される遺骸の在り方になる。そして散在する歯も元は顎骨を伴うものであったのであろう。これらはいずれも意図的に置かれていたものであり、祭祀な意味のあったものであろう。ウマの歯牙、骨格の出土に際しては、それが本来どのような意図でおかれたものか、出土状況から正確に把握する必要があり、これまでの調査には問題となるところであった。今回の調査ではこの点かなり精度の高い結果が得られ、ウマ遺骸の在り方を知ることでできる貴重な資料が得られたと言えよう。こうした資料の集積によって、今後各時代のウマの形質、人とウマとの関わり方についての研究も着実に進められることであろう。





4. 武蔵国分寺跡北西地区遺跡における 古鎌倉街道のテフラと覆土

松田 隆夫（府中市役所）

(1) 古道の覆土とテフラ

武蔵野台地南西部に位置する国分寺市・府中市域では、ここ数年相次いで道路状遺構である古鎌倉街道が発掘され、数地点でその遺構と覆土を観察する機会を得た。国分寺—府中間の古鎌倉街道（鎌倉往還）は、これまでの遺跡調査によって武蔵野段丘および立川段丘で点から線に結ばれて推定されており、国分寺崖線（武蔵野段丘崖）の切り通しは国分寺市文化財に指定され、古鎌倉街道の推定線上に位置している。古鎌倉街道のテフラ（火山灰）分析は、この切り通しを登り、武蔵野段丘の平坦部にさしかかった地点（武蔵台東遺跡、都宮川越道住宅遺跡調査会）と、その北方の地点（泉町遺跡、国分寺市遺跡調査会）で分析結果を得ている（松田 投稿中）。本稿の調査地は、この2地点の北方への延長上にあつて古鎌倉街道に相当する。また、古道の路面が両側溝を含めて全面的にみられる。



III-4 図1 調査位置図

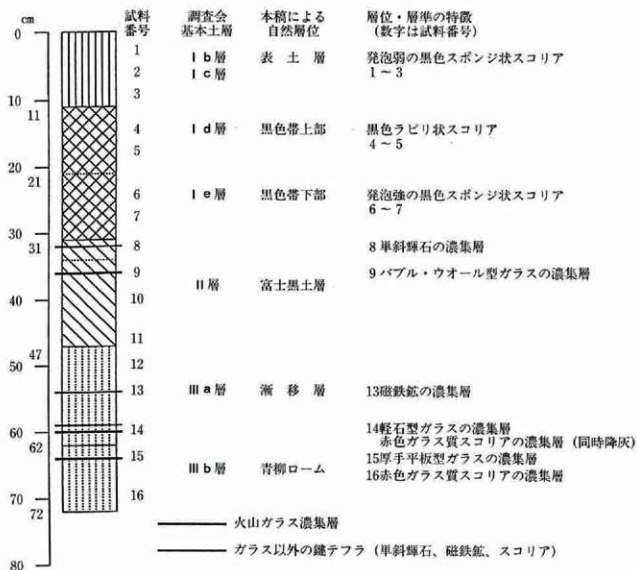
ここでは武蔵国分寺跡北西地区遺跡（国分寺市泉町）の古道に関わるテフラについて記載した。

なお、遺跡調査会の基本土層は上位から1b・1c層（表土層）、1d・1e層（黒色帯）、II層（富士黒土層）、IIIa層（漸移層）、IIIb層（青柳ローム）となる。カッコ内の層位名は松田ほか（1990）による。武蔵野台地の埋積谷や凹地では、I層とII層との間に褐色帯（東京都埋蔵文化財センターの基本土層「IIy層」に相当）を挟むが、台地平坦部に位置する遺跡調査地では褐色帯の層位は形成されていない。褐色帯は相模野台地北部（神奈川県城山町川尻）より以西では段丘平坦部でも層位を形成する。

(2) 古道のテフラ分析

分析試料は古道側溝や古道面等の覆土分析結果と比較するため、遺跡調査地内で保存の良いと思われる自然堆積テフラ（第1地点）を採取した。道路状遺構では道路側溝内の覆土と古道面上の覆土、硬化層とその下位の自然堆積テフラを採取したものを分析した。

分析方法は試料10gを水洗い（碗がけ）後、さらに超音波洗浄処理を行い、クエン酸三ナトリウムとハイドロサルファイトナトリウムを加えて脱鉄処理を行った。試料乾燥後、ふるい分けで0.25(1/4)～0.125(1/8)mmのテフラ粒子を検出し、実体顕微鏡・偏光顕微鏡で検鏡した。軽鉱物・重鉱物は各200粒子以上を、軽石を除くスコリアなどの岩片は100粒子以上をカウントし、その量比（粒数%）を組成表で示した。



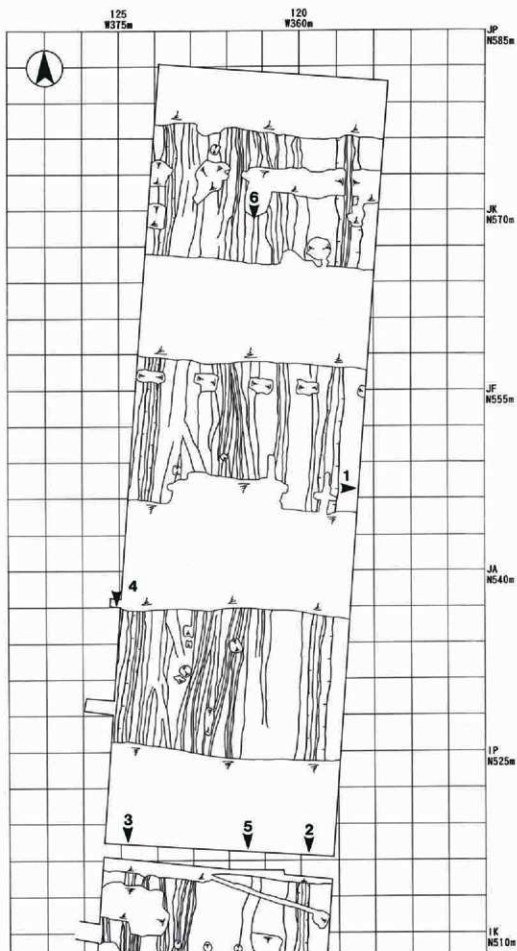
III-4 図2 調査地第1地点の文化層と鍵テフラ

(3) 分析結果

(調査地第1地点の自然堆積テフラ)

自然堆積のテフラは、上位から黒土層の表土層 (I b・I c層)、黒色帯上部 (I d層)、黒色帯下部 (I e層)、富士黒土層 (II層)、漸移層 (III a層)、青柳ローム (III b層) が累積する。軽鉱物・重鉱物・岩片組成 (表1-1) のスコリアは表土層、黒色帯で富み、12.2%~25.3% になって富士黒土層から青柳ロームにかけて急減する。

軽鉱物組成 (表1-2) の火山ガラスは、富士黒土層でバブル・ウォール (BW) 型ガラスの弱い濃集層 (ピーク) がみられ、試料9で5.0%になる。このガラス濃集層は無色透明であり、降灰時期、給源火山は明らかではないが、埼玉・東京・神奈川北部の各台地で対比され、とくに武蔵野台地東部の目黒区では20%近くになる。また、漸移層では無色透明の軽石 (スポンジ状) 型ガラスの濃集層がみられ、試料14で16.4%になる。青柳ローム上部では無色透明の厚手平板型ガラスの濃集層がみられ、試料15で20.7%になる。漸移層、青柳ローム上部で検出されるガラス濃集層は、「UG」火山灰 (山崎1978) であり、その給源は北関東の浅間山と考えられている。



III-4 図3 サンプル採取位置図

表1 調査地第1地点の自然堆積テフラ層 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表1-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料番号	軽鉱物	重鉱物	岩片		合計
			スコリア	軽石	
1	37.9	33.2	25.3	3.5	99.9
2	42.4	35.6	18.2	3.9	100.1
3	39.3	45.9	12.7	2.1	100.0
4	53.4	23.6	21.5	1.4	99.9
5	40.6	43.0	15.4	1.0	100.0
6	44.5	30.0	20.1	5.5	100.1
7	44.8	40.6	12.2	2.5	100.1
8	45.5	41.4	9.1	4.0	100.0
9	42.2	52.2	3.6	2.1	100.1
10	45.5	46.9	4.3	3.3	100.0
11	43.7	52.9	2.8	0.7	100.1
12	43.8	50.8	2.7	2.7	100.0
13	41.4	55.2	2.5	0.9	100.0
14	51.2	38.9	5.0	5.0	100.1
15	36.0	61.1	2.3	0.5	99.9
16	19.5	78.7	1.9	0.0	100.1

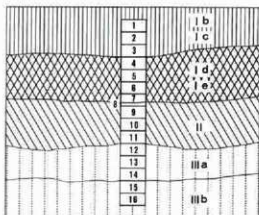


表1-2 軽鉱物組成

試料番号	石英	長石	火山ガラス					不明風化粒	合計
			BW型	厚手平板型	軽石型	繊維型	小計		
1	0.9	85.3	0.5	5.1	6.0	0.0	11.6	2.3	100.1
2	0.3	86.3	0.3	6.7	3.6	0.0	10.6	2.7	99.9
3	0.3	89.0	0.3	4.7	4.0	0.0	9.0	1.7	100.0
4	0.0	86.8	0.8	2.7	5.0	0.0	8.5	4.7	100.0
5	0.4	89.1	0.8	5.0	2.5	0.0	8.3	2.1	99.9
6	0.0	79.5	1.0	8.7	7.7	0.8	18.2	2.3	100.0
7	0.0	81.1	2.4	6.7	6.3	1.2	16.6	2.4	100.1
8	0.0	72.1	1.9	11.2	10.7	1.9	25.7	2.3	100.1
9	0.3	78.9	5.0	9.1	5.3	0.3	19.7	1.2	100.1
10	0.0	78.2	2.9	7.4	8.5	0.9	19.7	2.1	100.0
11	0.8	78.2	2.4	7.1	7.1	0.4	17.0	4.0	100.0
12	0.0	75.2	2.7	11.2	8.1	0.8	22.8	1.9	99.9
13	0.0	74.7	0.4	17.0	6.6	0.0	24.0	1.3	100.0
14	0.0	66.2	3.4	10.1	16.4	2.4	32.3	1.4	99.9
15	0.0	68.9	4.5	20.7	4.5	0.9	30.6	0.5	100.0
16	0.5	67.3	5.0	16.3	6.4	1.5	29.2	3.0	100.0

表1-3 重鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃石	磁鉄鉱	黒雲母	不明風化粒	合計
2	42.0	37.7	9.8	0.7	6.2	0.0	3.6	100.0
3	38.7	37.9	10.3	0.0	9.5	0.0	3.7	100.1
4	40.6	41.8	9.8	0.0	2.3	0.0	5.5	100.0
5	42.1	38.1	7.1	0.0	8.3	0.0	4.4	100.0
6	45.6	33.5	9.9	0.0	6.8	0.0	4.2	100.0
7	43.5	39.6	8.3	0.0	7.8	0.0	0.9	100.1
8	41.4	35.1	10.8	0.0	8.1	0.0	4.5	99.9
9	47.0	30.7	9.5	0.0	10.2	0.0	2.6	100.0
10	45.5	33.4	10.0	0.0	7.7	0.0	3.7	99.9
11	41.6	41.0	3.9	0.0	12.1	0.0	1.3	99.9
12	44.1	34.4	6.4	0.0	10.4	0.0	4.7	100.0
13	48.9	27.9	5.9	0.0	15.1	0.0	2.3	100.1
14	53.1	19.1	6.6	0.0	12.5	0.3	8.3	99.9
15	65.8	18.6	4.7	0.0	9.7	0.0	1.2	100.0
16	71.4	18.1	4.8	0.0	4.3	0.0	1.4	100.0

表1-4 スコリア組成

試料 番号	黒色スコリア				赤色スコリア				暗褐色 スコリア	褐色ガ ラス質 スコリア	合 計	
	スポンジ状		ラビ状	小 計	スポンジ状		ラビ状	ガラス質				小 計
	発泡弱	発泡強			発泡弱	発泡強						
1	30.2	12.6	19.5	62.3	3.8	0.6	7.5	0.6	12.5	3.1	22.0	99.9
2	28.8	13.0	16.8	58.6	2.9	2.4	2.4	1.4	9.1	1.0	31.3	100.0
3	25.4	17.3	17.3	60.0	3.0	3.6	4.1	0.5	11.2	1.0	27.9	100.1
4	19.3	12.9	27.5	59.7	5.8	0.6	2.9	0.0	9.3	1.2	29.8	100.0
5	16.0	14.1	28.8	58.9	0.0	1.9	5.1	0.0	7.0	0.6	33.3	99.8
6	11.7	21.9	18.9	52.5	2.6	4.6	4.1	0.0	11.3	0.5	35.7	100.0
7	16.8	30.2	16.1	63.1	4.7	3.4	6.7	0.7	15.5	0.0	21.5	100.1
8	14.6	19.9	21.6	56.1	3.5	3.5	10.5	2.9	20.4	2.9	20.5	99.9
9	12.1	19.7	28.0	59.8	3.8	5.3	8.3	2.3	19.7	2.3	18.2	100.0
10	11.8	19.7	33.9	65.4	3.9	0.0	6.3	4.7	14.9	5.5	14.2	100.0
11	11.9	25.4	33.3	70.6	1.6	5.6	7.1	2.4	16.7	2.4	10.3	100.0
12	10.7	16.1	39.3	66.1	2.7	1.8	10.7	8.9	24.1	0.0	9.8	100.0
13	13.6	6.8	56.3	76.7	4.9	1.9	6.8	2.9	16.5	1.0	5.8	100.0
14	5.1	9.4	23.9	38.4	1.7	2.6	7.7	46.2	58.2	0.9	2.6	100.1
15	9.4	7.5	59.4	76.3	0.9	0.9	15.1	0.9	17.8	0.9	4.7	99.7
16	7.0	5.2	52.2	64.4	1.7	0.9	11.3	20.0	33.9	0.9	0.9	100.1

表2 調査地第2地点の古道側溝の覆土 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表2-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料 番号	軽鉱物	重鉱物	岩 片		合 計
			スコリア	軽 石	
1	46.2	26.0	26.4	1.4	100.0
2	38.6	44.5	15.9	1.0	100.0
3	44.4	39.5	12.3	3.8	100.0
4	45.8	38.3	13.6	2.2	99.9
5	49.2	35.9	12.0	2.9	100.0
6	46.3	42.6	9.3	1.8	100.0
7	42.7	43.5	12.6	1.2	100.0
8	49.0	36.3	12.2	2.5	100.0
9	53.2	34.7	10.7	1.4	100.0
10	51.5	34.0	11.7	2.7	99.9
11	40.6	46.9	11.4	1.0	99.9
12	38.6	46.8	12.6	2.1	100.1
13	44.3	39.5	14.4	1.8	100.0
14	43.6	44.0	11.2	1.2	100.0
15	37.5	55.7	5.8	1.1	100.1

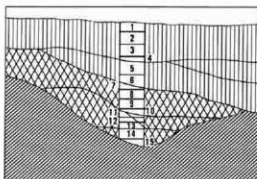


表2-2 重鉱物組成

試料 番号	カンラン 石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃 石	磁鉄鉱	黒雲母	不明 風化粒	合 計
1	44.1	31.4	10.2	0.0	9.0	0.0	5.3	100.0
2	48.1	26.6	8.4	0.0	12.1	0.7	4.0	99.9
3	44.4	39.5	8.7	0.0	5.6	0.4	6.5	99.9
4	40.9	35.1	13.3	0.0	8.0	0.0	2.7	100.0
5	42.6	32.5	9.6	0.0	8.4	0.4	6.4	99.9
6	41.5	33.5	13.4	0.0	7.6	0.0	4.0	100.0
7	41.0	39.6	5.1	0.0	8.8	0.5	5.1	100.1
8	35.1	32.3	13.7	0.0	11.8	0.0	7.1	100.0
9	43.6	33.7	10.3	0.0	6.6	0.0	5.8	100.0
10	39.0	30.7	10.0	0.0	6.9	0.3	12.8	100.0
11	46.4	33.7	6.9	0.0	9.4	0.0	3.6	100.0
12	42.9	33.6	8.6	0.0	6.7	0.4	7.8	100.0
13	43.8	32.4	10.0	0.0	7.8	0.5	5.5	100.0
14	43.5	33.2	10.7	0.4	5.0	0.0	7.3	100.1
15	55.0	21.7	7.9	0.0	10.4	0.3	4.7	100.0

表2-3 スコリア組成

試料 番号	黒色スコリア				赤色スコリア				暗褐色 スコリア	褐色ガ ラス質 スコリア	合 計	
	スポンジ状		ラビリ状	小 計	スポンジ状		ラビリ状	ガラス質				小 計
	発泡弱	発泡強			発泡弱	発泡強						
1	36.0	11.1	30.7	77.8	1.8	0.9	2.2	0.0	4.9	0.0	17.3	100.0
2	37.6	7.9	23.8	69.3	3.2	2.1	6.3	0.5	12.1	0.5	18.0	99.9
3	33.8	7.8	23.4	65.0	2.6	1.3	4.5	0.6	9.0	0.0	26.0	100.0
4	28.5	16.5	21.5	66.5	3.2	3.2	5.7	1.9	14.0	0.6	19.0	100.1
5	33.6	11.8	25.0	70.4	1.3	3.3	7.9	2.0	14.5	0.7	14.5	100.1
6	29.9	15.6	18.6	64.1	2.4	2.4	4.8	0.6	10.2	1.2	24.6	100.1
7	15.8	11.4	42.4	69.6	3.8	1.9	3.8	1.9	11.4	0.0	19.0	100.0
8	11.2	15.8	35.5	62.5	1.3	4.6	11.2	0.7	17.8	0.7	19.1	100.1
9	19.8	13.5	37.3	70.6	2.4	0.8	5.6	0.0	8.8	0.0	20.6	100.0
10	15.9	20.0	28.2	64.1	0.0	4.1	6.5	0.6	11.2	0.0	24.7	100.0
11	17.9	15.0	31.4	64.3	2.1	2.1	2.1	0.0	6.3	1.4	27.9	99.9
12	10.0	16.5	29.4	55.9	1.7	4.3	10.0	0.4	16.4	2.2	25.5	100.0
13	10.9	14.0	38.9	63.8	4.7	0.5	6.2	1.0	12.4	0.0	23.8	100.0
14	16.5	22.4	23.5	62.4	2.4	2.9	4.7	0.6	10.6	0.6	26.5	100.1
15	10.6	21.7	36.6	68.9	0.6	3.1	4.3	1.9	9.9	2.5	18.6	99.9

表3 調査地第3地点の古道側溝の覆土 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表3-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料 番号	軽鉱物	重鉱物	岩 片		合 計
			スコリア	軽 石	
1	35.9	33.6	29.0	1.4	99.9
2	38.7	24.4	35.1	1.7	99.9
3	41.4	22.5	32.3	3.9	100.1
4	39.7	48.0	11.9	0.5	100.1
5	45.7	39.0	11.9	3.4	100.0
6	46.3	44.4	7.8	1.6	100.1
7	37.7	51.6	8.9	1.8	100.0
8	42.8	49.5	7.3	0.4	100.0
9	41.2	51.4	5.2	2.2	100.0
10	43.4	50.5	4.4	1.7	100.0
11	48.8	41.7	7.0	2.5	100.0
12	41.5	49.4	6.5	2.5	99.9
13	45.4	45.7	5.9	3.0	100.0
14	39.4	54.9	4.9	0.8	100.0

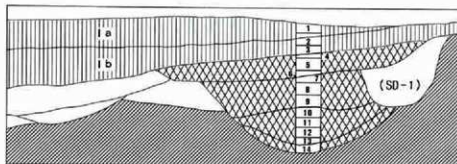


表3-2 重鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃石	磁鉄鉱	黒雲母	不明風化粒	合計
1	43.8	32.9	7.8	0.0	7.3	0.0	8.2	100.0
2	42.9	31.6	9.0	0.0	6.6	0.0	9.9	100.0
3	50.2	29.9	10.0	0.0	5.4	0.0	4.6	100.1
4	51.0	31.0	7.8	0.0	5.2	0.0	4.9	99.9
5	44.9	33.8	8.8	0.0	2.8	0.0	9.7	100.0
6	50.1	29.0	6.8	0.0	8.9	0.3	4.9	100.0
7	52.1	26.3	9.0	0.0	7.7	0.0	4.9	100.0
8	48.9	28.5	9.6	0.0	5.2	0.0	7.8	100.0
9	55.1	28.5	5.3	0.0	1.9	1.0	8.2	100.0
10	54.0	29.5	6.4	0.0	5.4	0.0	4.7	100.0
11	47.6	32.6	8.6	0.0	5.2	0.4	5.6	100.0
12	51.0	28.4	7.8	0.0	7.4	0.4	5.1	100.1
13	45.5	26.2	6.8	0.0	7.9	0.4	13.3	100.1
14	58.9	21.8	6.9	0.0	5.9	0.5	5.9	99.9

表3-3 スコリア組成

試料番号	黒色スコリア				赤色スコリア				暗褐色スコリア	褐色ガラス質スコリア	合計	
	スポンジ状		ラビリ状	小計	スポンジ状		ラビリ状	ガラス質				小計
発泡弱	発泡強	発泡弱			発泡強	発泡弱			発泡強			
1	32.7	9.9	18.5	61.1	4.9	1.2	2.5	0.6	9.2	0.0	29.6	99.9
2	34.2	5.6	25.2	65.0	4.1	0.4	1.9	0.0	6.4	0.4	28.2	100.0
3	41.1	5.6	24.2	70.9	2.4	1.6	4.0	0.0	8.0	0.0	20.2	99.9
4	16.4	20.4	28.3	65.1	0.7	0.0	1.3	0.7	2.7	2.0	30.3	100.1
5	13.2	17.2	25.3	55.7	1.7	1.7	4.0	9.8	17.2	0.6	26.4	99.9
6	13.5	17.7	26.2	57.4	2.8	2.1	4.3	2.1	11.3	2.8	28.4	99.9
7	11.7	22.6	28.5	62.8	2.9	5.1	4.4	1.5	13.9	1.5	21.9	100.1
8	11.2	17.1	28.9	57.2	0.7	2.0	6.6	3.3	12.6	1.3	28.9	100.0
9	11.5	18.0	33.1	62.6	3.6	1.4	8.6	2.9	16.5	0.0	20.9	100.0
10	10.4	12.6	40.7	63.7	2.2	1.5	6.7	0.0	10.4	0.0	25.9	100.0
11	8.6	11.7	43.8	64.1	0.8	1.6	4.7	1.6	8.7	3.1	24.2	100.1
12	14.0	11.4	40.4	65.8	0.9	1.8	6.1	2.6	11.4	1.8	21.1	100.1
13	11.5	12.3	38.5	62.3	1.6	0.8	4.9	4.1	11.4	1.6	24.6	99.9
14	11.8	11.8	42.7	66.3	0.9	1.8	5.5	0.0	8.2	0.9	24.5	99.9

表4 調査地第4地点の古道側溝の覆土 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表4-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料番号	軽鉱物	重鉱物	岩片		合計
			スコリア	軽石	
1	42.6	38.8	12.6	6.0	100.0
2	43.2	38.2	16.8	1.9	100.1
3	46.2	29.1	15.4	9.3	100.0
4	38.6	38.3	11.6	11.5	100.0
5	41.2	41.8	13.9	3.1	100.0
6	42.1	41.6	13.2	3.2	100.1
7	44.1	28.9	15.2	11.8	100.0
8	33.9	49.8	8.8	7.6	100.1
9	39.4	52.7	7.1	0.8	100.0
10	25.7	67.3	2.3	4.7	100.0
11	26.1	68.1	5.3	0.5	100.0
12	11.5	84.9	3.6	0.0	100.0

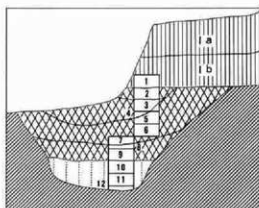


表4-2 重鉱物組成

試料 番号	カンラン 石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃 石	磁鉄鉱	黒雲母	不 明 風化粒	合 計
1	39.8	39.8	7.8	0.0	5.6	0.0	6.9	99.9
2	36.6	41.8	7.0	0.0	12.5	0.0	2.1	100.0
3	45.0	29.3	12.2	0.0	9.2	0.4	3.9	100.0
4	38.6	35.9	8.5	0.0	9.4	0.0	3.0	100.0
5	34.1	31.7	4.5	0.0	6.5	0.0	23.2	100.0
6	27.6	28.5	4.5	0.0	3.7	0.0	35.8	100.1
7	36.2	28.7	5.9	0.4	3.9	0.0	24.8	99.9
8	20.7	14.6	4.6	0.0	5.2	0.3	54.7	100.1
9	40.6	31.4	10.2	0.0	6.5	0.0	11.4	100.1
10	65.6	18.5	4.6	0.0	6.2	0.4	4.6	99.9
11	74.1	13.8	3.5	0.0	4.3	0.0	4.3	100.0
12	76.3	13.6	2.1	0.0	6.4	0.0	1.7	100.1

表4-3 スコリア組成

試料 番号	黒色スコリア				赤色スコリア					暗褐色 スコリア	褐色ガ ラス スコリア	合 計
	スポンジ状		ラビリ状	小 計	スポンジ状		ラビリ状	ガラス質	小 計			
	発泡弱	発泡強			発泡弱	発泡強						
1	24.6	15.6	19.6	59.8	1.1	1.1	5.0	2.2	9.4	1.1	29.6	99.9
2	17.2	14.5	24.2	55.9	0.5	0.5	4.3	0.0	5.3	0.5	38.2	99.9
3	13.7	13.0	28.8	55.5	0.7	1.4	2.1	2.1	6.3	0.0	38.4	100.2
4	6.5	13.6	32.5	52.6	1.8	2.4	7.7	1.2	13.1	0.0	34.3	100.0
5	8.8	21.9	28.1	58.8	0.0	4.4	3.5	2.6	10.5	0.9	29.8	100.0
6	10.2	14.1	36.2	60.5	2.8	1.7	6.8	1.1	12.4	0.6	26.6	100.1
7	8.1	21.1	37.4	66.6	2.4	3.3	2.4	2.4	10.5	0.8	22.0	99.9
8	11.9	20.6	35.0	67.5	0.6	1.3	4.4	2.5	8.8	1.9	21.9	100.1
9	12.8	11.6	36.0	60.4	1.7	0.6	11.6	0.6	14.5	2.3	22.7	99.9
10	14.4	19.7	41.7	75.8	0.0	2.3	2.3	3.0	7.6	0.0	16.7	100.1
11	7.5	13.3	38.3	59.1	3.3	0.8	15.0	16.7	35.8	0.0	5.0	99.9
12	6.6	10.7	43.8	61.1	0.8	2.5	4.1	23.1	30.5	0.8	7.4	99.8

表5 調査地第5地点の古道面トレンチ 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表5-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料 番号	軽鉱物	重鉱物	岩 片		合 計
			スコリア	軽 石	
1	28.7	22.9	46.5	1.9	100.0
2	34.1	16.3	44.9	4.6	99.9
3	31.7	17.3	48.5	2.5	100.0
4	31.1	17.7	48.2	3.1	100.1
5	29.9	17.7	50.4	2.0	100.0
6	29.7	29.1	41.0	0.3	100.0
7	33.5	32.8	30.6	3.1	100.0
8	36.3	45.7	15.5	2.5	100.0
9	54.5	38.1	5.2	2.2	100.0
10	45.1	48.0	5.9	1.1	100.1
11	46.0	47.1	5.4	1.4	99.9
12	45.8	49.1	4.5	0.6	100.0
13	28.8	66.2	5.0	0.0	100.0
14	42.5	56.0	1.0	0.5	100.0
15	34.7	62.9	2.2	0.2	100.0
16	25.3	73.3	1.4	0.0	100.0
17	11.8	83.8	4.4	0.0	100.0

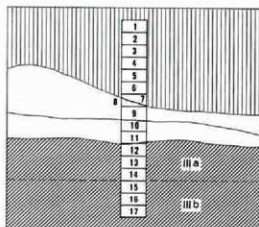


表5-2 軽鉱物組成

試料 番号	石 英	長 石	火山ガラス				小 計	不 明 風化粒	合 計
			BW型	厚手平板型	軽石型	纖維型			
1	0.0	85.5	2.7	5.0	3.2	0.0	10.9	3.6	100.0
2	0.0	84.4	2.9	4.5	4.5	0.8	12.7	2.9	100.0
3	0.0	84.3	2.0	6.5	2.7	0.0	11.2	4.4	99.9
4	0.5	86.4	0.9	4.7	4.2	0.0	9.8	3.3	100.0
5	0.0	85.2	2.2	5.2	3.0	0.4	10.8	3.9	99.9
6	0.5	82.4	2.9	6.9	4.4	0.0	14.2	2.9	100.0
7	0.8	82.5	3.3	5.7	4.5	0.8	14.3	2.4	100.0
8	1.3	80.3	1.3	9.0	4.7	0.4	15.4	3.0	100.0
9	0.5	70.5	8.2	10.0	6.8	1.4	26.4	2.7	100.1
10	0.0	83.4	0.8	5.5	6.7	1.6	14.6	2.0	100.0
11	0.7	73.7	6.9	9.3	5.5	2.1	23.8	1.7	99.9
12	0.4	73.6	5.5	6.8	10.6	0.9	23.8	2.1	99.9
13	1.3	75.8	2.2	9.7	8.8	0.4	21.1	1.8	100.0
14	0.9	58.3	3.2	15.7	19.4	1.4	39.7	0.9	99.8
15	0.5	65.5	5.3	21.4	5.8	0.5	33.0	1.0	100.0
16	0.9	78.7	1.7	10.6	6.8	0.9	20.0	0.4	100.0
17	0.0	74.6	2.4	12.2	8.3	0.5	23.4	2.0	100.0

表5-3 重鉱物組成

試料 番号	カンラン 石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃 石	磁鉄鉱	黒雲母	不 明 風化粒	合 計
1	39.9	35.2	4.7	0.0	10.7	0.0	9.5	100.0
2	39.8	28.8	3.6	0.0	12.4	0.4	15.0	100.0
3	33.3	28.8	7.0	0.0	11.9	0.4	18.5	99.9
4	39.5	36.7	3.3	0.0	8.6	0.0	11.9	100.0
5	43.8	25.0	8.9	0.9	6.3	0.0	15.2	100.1
6	39.0	24.5	6.0	0.0	2.5	0.0	28.0	100.0
7	44.4	29.9	6.2	0.0	6.2	0.0	13.3	100.0
8	49.3	26.5	6.8	0.0	5.4	0.0	11.9	99.9
9	45.6	18.9	8.9	0.0	3.0	0.0	23.7	100.1
10	50.2	30.9	6.7	0.0	5.9	0.0	6.3	100.0
11	52.4	29.4	7.4	0.0	5.1	0.0	5.7	100.0
12	50.8	30.6	7.1	0.0	8.3	0.0	3.2	100.0
13	50.7	25.0	6.4	0.0	15.0	0.4	2.5	100.0
14	61.2	17.8	5.9	0.5	11.0	0.0	3.7	100.1
15	77.6	12.8	3.6	0.0	2.8	0.0	3.2	100.0
16	74.4	12.0	3.4	0.0	5.3	0.0	4.9	100.0
17	82.3	10.0	3.6	0.0	2.0	0.0	2.0	99.9

表5-4 スコリア組成

試料 番号	黒色スコリア				赤色スコリア				暗褐色 スコリア	褐色ガ ラス質 スコリア	合 計	
	スポンジ状		ラビリ状	小 計	スポンジ状		ラビリ状	ガラス質				小 計
	発泡弱	発泡強			発泡弱	発泡強						
1	35.8	6.5	29.9	72.2	0.0	0.5	4.5	0.0	5.0	0.0	22.9	100.1
2	36.4	3.9	33.1	73.4	0.6	0.6	2.6	0.0	3.8	0.0	22.7	99.9
3	46.2	4.8	27.4	78.4	3.8	1.0	1.4	0.0	6.2	0.0	15.4	100.0
4	34.9	7.5	28.2	70.6	1.6	1.6	1.6	0.0	4.8	1.2	23.4	100.0
5	37.0	4.8	26.0	67.8	1.4	1.4	2.1	0.0	4.9	0.0	27.4	100.1
6	34.9	5.2	31.8	71.9	3.1	2.1	4.7	0.0	9.9	0.5	17.7	100.0
7	34.9	8.9	25.0	68.8	2.6	0.5	3.1	0.0	6.2	1.0	24.0	100.0
8	28.1	9.9	28.7	66.7	0.6	2.3	9.9	2.3	15.1	0.0	18.1	99.9
9	19.8	14.7	33.6	68.1	1.7	0.9	5.2	1.7	9.5	0.9	21.6	100.1
10	14.0	15.8	34.2	64.0	1.8	2.6	5.3	4.4	14.1	1.8	20.2	100.1
11	23.5	12.6	20.2	56.3	3.4	1.7	3.4	0.8	9.3	0.8	33.6	100.0
12	33.8	9.3	33.1	76.2	0.0	0.7	6.6	0.7	8.0	1.3	14.6	100.1
13	17.9	20.0	31.7	69.6	0.0	0.0	4.1	15.2	19.3	0.0	11.0	99.9
14	11.7	11.7	40.8	64.2	3.3	3.3	7.5	15.8	29.9	0.0	5.8	99.9
15	9.5	4.3	59.5	73.3	1.7	0.9	15.5	7.8	25.9	0.0	0.9	100.1
16	7.9	18.3	50.8	77.0	4.0	5.6	8.7	3.2	21.5	0.8	0.8	100.1
17	14.0	13.2	56.1	83.3	0.9	1.8	2.6	2.6	7.9	0.9	7.9	100.0

表6 調査地第6地点の古道面トレンチ 粒径0.25~0.125 粒数パーセント

表6-1 軽鉱物・重鉱物・岩片組成

試料番号	軽鉱物	重鉱物	岩片		合計
			スコリア	軽石	
1	20.8	8.3	68.2	2.7	100.0
2	21.3	3.4	73.1	2.1	99.9
3	25.8	15.9	52.6	5.7	100.0
4	38.9	46.2	11.0	3.9	100.0
5	37.0	52.3	6.1	4.6	100.0

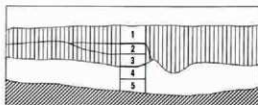


表6-2 重鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	普通角閃石	磁鉄鉱	黒雲母	不明風化粒	合計
1	40.6	39.3	6.3	0.0	6.3	1.3	6.3	100.1
2	46.0	34.3	7.5	0.5	4.7	0.5	6.6	100.1
3	46.2	31.2	8.7	0.4	2.8	0.8	9.9	100.0
4	51.9	21.9	9.1	0.0	9.1	0.3	7.7	100.0
5	48.9	25.0	8.0	0.3	7.7	0.9	9.4	100.2

表6-3 スコリア組成

試料番号	黒色スコリア				赤色スコリア					暗褐色スコリア	褐色ガラス質スコリア	合計
	スポンジ状		ラビリ状	小計	スポンジ状		ラビリ状	ガラス質	小計			
	発泡弱	発泡強			発泡弱	発泡強						
1	41.1	10.0	15.6	66.7	1.7	2.2	1.7	0.0	5.6	0.0	27.8	100.1
2	39.8	5.3	29.6	74.7	0.9	0.0	2.7	0.0	3.6	0.0	21.7	100.0
3	33.8	5.5	22.8	62.1	1.4	0.0	4.1	0.0	5.5	0.0	32.4	100.0
4	23.3	11.0	35.6	69.9	2.5	0.6	4.9	0.0	8.0	0.6	21.5	100.0
5	17.9	8.3	35.9	62.1	5.5	2.1	5.5	0.0	13.1	2.1	22.8	100.1

重鉱物組成(表1-3)は、富士黒土層上部で単斜輝石の濃集層がみられ、試料8で10.8%になる。この濃集層は東京・神奈川の各台地で検出されて鍵層になり、縄文時代中期の層準である。また、漸移層では磁鉄鉱の極大値がみられ、試料13で15.1%になる。青柳ロームのカンラン石は、試料15で65.8%、試料16で71.4%になって増加する。武蔵野台地では青柳ローム下部でカンラン石の極大値を示す。

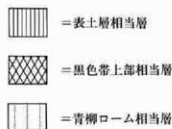
スコリア組成(表1-4)の特徴的な傾向は、表土層で発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに、黒色帯上部で黒色ラビリ(ゼリー)状スコリアに、黒色帯下部で発泡の強い黒色スポンジ状スコリアなどに層位的特徴がみられる。このうち、表土層のスコリアは、富士山を給源とする宝永スコリア(Ho、S-25 1707.A.D噴火)に対比され、黒色帯上部のスコリアは上杉(1990)のS-24の一部に対比されるものと思われる。スコリア組成では富士黒土層から青柳ロームにかけて赤色スコリアが増加する傾向にあり、とくに、漸移層で赤色ガラス質スコリアの濃集層が検出され、試料14で46.2%になる。また、青柳ロームの試料16で20.0%になる。

なお、スコリアの発泡度合は、宝永スコリアにみられる「発泡弱」を目安にして、それより発泡程度が強いスコリアを「発泡強」とした。「ラビリ(ゼリー)状スコリア」は、発泡がほとんどみられないスコリアであり、褐色や赤色の「ガラス質スコリア」は、やや透明なガラスを含むスコリアとした。

(調査地第2地点の古道側溝の覆土)

第2地点の古道側溝は古道の東端に位置する。古道側溝内の覆土は最下部の試料14、15で褐色テフラ粒子が混入する。とくに、試料15は大量の褐色テフラ粒子が含まれ、軽鉱物・重鉱物・岩片組成(表2-1)のスコリアの量比は5.8%に急減することから、立川ローム層のテフラ粒子の流れ込みとみられる。第2地点のスコリア組成(表2-3)は、試料1～6までが発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに層位的特徴があり、宝永スコリアを含む表土層(1c層)に対比される。試料7～13は、試料12、13で褐色テフラ粒子が混じるものの、黒色ラビリ状スコリアに層位的特徴があつて黒色帯上部(1d層)に対比され、側溝の覆土ベースを形成する。

覆土の凡例



(調査地第3地点の古道側溝の覆土)

第3地点の古道側溝は、第4地点の古道側溝とともに西端に位置する。スコリア組成(表3-3)は、試料1～3で発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに層位的特徴をもち、宝永スコリアを含む表土層に対比される。試料4～14は黒色ラビリ状スコリアに層位的特徴をもつが、試料5は赤色ガラス質スコリアが9.8%になり、漸移層および青柳ローム上部のテフラ粒子が混入したものと思われる。第3地点の側溝の覆土ベースは、黒色帯上部に対比される試料4～14になる。

(調査地第4地点の古道側溝の覆土)

第4地点の古道側溝は古道西端に位置する。スコリア組成(表4-3)は、試料1が発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに特徴をもち、宝永スコリアを含む表土層に対比される。試料2～9は、黒色ラビリ状スコリアに特徴をもち、黒色帯上部に対比される。このうち、試料3、4は側溝の覆土の中で硬化層を形成し、その下位の試料5～9は風化粒(風化カンラン石)が重鉱物組成(表4-2)で11.4%～54.7%と多くなる。この風化粒は他の側溝の覆土で見られないものであり、覆土中の硬化層と関連して乾湿の繰り返しに激しい環境に置かれたものと思われる。褐色テフラである試料10～12は、軽鉱物・重鉱物・岩片組成(表4-1)で重鉱物が67.3%～84.9%になること、重鉱物組成(表4-2)でカンラン石が65.6%～76.3%になること、スコリア組成(表4-3)で赤色ガラス質スコリアが試料11で16.7%、試料12で23.1%になることなどから、青柳ロームに対比される。この青柳ロームは側溝整備時に掘り揚げられずに残されたものと思われる。第4地点の側溝の覆土ベースは試料2～9になる。

(調査地第5地点の古道面の覆土)

第5地点の古道面では、スコリア組成(表5-4)の試料1～7で発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに特徴をもち、宝永スコリアを含む表土層に対比される。また、軽鉱物・重鉱物・岩片組成(表5-1)のスコリアは試料1～7で30.6%～50.4%になって、自然堆積テフラである表土層(表1-1)と比較して2倍以上の含有量を示す。スコリア組成の試料8～11は、発泡の弱い黒色スポンジ状スコリア(表土層)と黒色ラビリ状スコリア(黒色帯上部)との混合した状態を示す。試料12～17は、軽鉱物・重鉱物・岩片組成で重鉱物が漸移層で49.1%～66.2%に、青柳ロームで62.9%～83.8%になること、重鉱物組成(表5-3)でカンラン石が漸移層で50.7%～61.2%に、青柳ロームで74.4%～82.3%になること、磁鉄鉱は漸

移層の試料13で15.0%になって極大値を示すことなどから、調査地第1地点の自然堆積の漸移層、青柳ロームに対比される。

また、軽鉱物組成(表5-2)の火山ガラスは、漸移層で軽石型ガラスの濃集層が試料14で19.4%に、青柳ローム上部で厚手平板型ガラスの濃集層が21.4%になる。

このことから古道面の下位の漸移層、青柳ロームは、自然堆積のテフラ層を示す。

(調査地第6地点の古道面の覆土)

第6地点の古道面では、スコリア組成(表6-3)の試料1~3で発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアに特徴をもち、宝永スコリアを含む表土層に対比される。また、試料1~3のスコリアは、軽鉱物・重鉱物・岩片組成(表6-1)で52.6%~73.1%になる。とくに、試料2はスコリアが73.1%になることから、宝永スコリアの純層に近い堆積を示す。試料4、5はスコリア組成で黒色ラピリ状スコリアが卓越するが、試料4で発泡の弱い黒色スポンジ状スコリアが23.3%になることから、第5地点の古道面の覆土(試料8~11)と同様に、表土層と黒色帯上部のテフラが混合したものである。

(4) 考察

(1) 調査地第1地点の自然堆積テフラは、黒土層から青柳ローム上部まで累積し、テフラ中のスコリアは表土層(表土)と黒色帯で富み、富士黒土層から青柳ローム上部にかけて急減する。そのスコリアはスコリア組成で特徴的な傾向を示し、とくに表土層、黒色帯上部、黒色帯下部で層位的特徴を示す。富士黒土層から青柳ローム上部にかけては赤色スコリアが増加する。漸移層では赤色ガラス質スコリアの極大値がみられ、青柳ローム上部でも赤色ガラス質スコリアの多い層層がみられる。以上のスコリアはいずれも、玄武岩質の富士山を給源とするもので、赤色ガラス質スコリアにはカンラン石を取り込んだ粒子もみられる。

重鉱物組成のカンラン石は、調査地第1地点の試料14~15や第5地点の試料15~17でみられるように青柳ロームで富み、武蔵野台地では青柳ローム下部で極大値を示すことが明らかにされている(羽鳥1971)。磁鉄鉱は漸移層で極大値を示す。

(2) 古道側溝の覆土(調査地第2、3、4地点)は、第4地点の側溝の覆土最下部(青柳ローム)を除くと、側溝直上の覆土は黒色帯上部に対比される覆土であり、覆土ベースを形成する。この覆土の上位は表土層に覆われる。

(3) 古道面の覆土(調査地第5、6地点)は、当時の地表面より掘り下げられて、青柳ロームの上位で古道面が造成(整備)されている。古道整備以後、宝永スコリアを含む表土層に埋積されるまで、硬化層に相当する覆土が形成される。この覆土となるテフラは、新旧のテフラがみられ、とくに、第5地点では黒色帯上部と表土層のテフラが混合してみられる。この混合した覆土層の上位は表土層に覆われ、両者は覆土ベースを形成する。

古道面より下位のテフラ層は、調査地第5地点のテフラ分析で明らかのように、自然堆積の漸移層、青柳ロームに対比される。このことは古道の整備に際して、古道を当時の地表面(黒色帯上部)から富士黒土層の下位まで掘り下げたことを示す。

(4) 古鎌倉街道の整備は、古道側溝の覆土ベースが近世(宝永スコリア、S-25)以前に降灰した黒色帯上部(S-24の一部)であり、古道面の覆土が黒色帯上部と表土層のテフラが混合した覆土層(硬化層に相当)と、その上位に宝永スコリアを多く含む表土層に覆われている。このことは古道が宝永スコリアの降灰(1707.A.D.)以降、道路としての使用(往還)が衰退したことを示す。

(5) 調査地第4地点の古道側溝の覆土は、試料3、4で硬化層(黒色帯上部に相当)を形成し、その上位には表土層(試料1)に覆われている。このことは古道面の覆土、とくに表土層と関連してみると古道の使用の衰退にともない、人々の往還に際して古道側溝が目印にされたのではないかと推定されるが、この点は古道側溝の覆土中の硬化層についての人為的営みであり、その考察にかかわることであると思える。

引用文献

- 上杉 陽 (1990) 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その1: S-25~Y-114—関東の四紀, 16, p3-28
- 羽鳥謙三 (1971) 模式地における立川ローム層の層位について—野川遺跡を中心として—第四紀研究, 10, p244-250
- 松田隆夫・大倉利明・坂上寛一 (1990) 武蔵野台地南西部における立川面の区分と層序 日本第四紀学会講演要旨, 20, p114-115
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動 第四紀研究, 16, p231-246

IV. 縄文時代

1. 遺構と遺物

該期の調査は、歴史時代の調査終了時に2ブロック東側で確認された陥し穴と炉穴の計2基の土坑を対象に6月15日から17日まで行った。尚、陥し穴については土層断面の観察が容易な事と調査期間等の関係から地山ごと断ち割って調査する方法をとった。

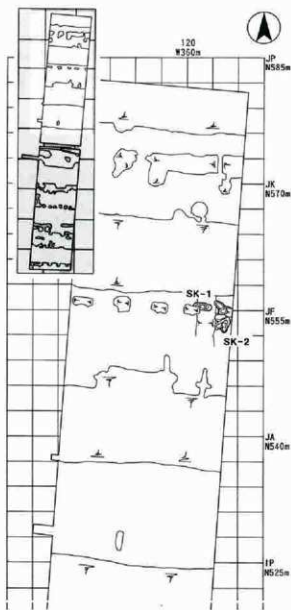
また、遺構からの出土遺物は無く、図示した1(第32図・図版56、前期後半諸磯B式に並行)と2(第32図・図版56、後期前半塚之内式土器)の土器片2個が歴史時代の遺構の覆土から出土しているのみである。

SK-1 (陥し穴)

JF-120グリッドに位置し、南西隅は擾乱により一部破壊されていた。平面プランは東西方向の長楕円形を呈し、長軸 2.1m、短軸 0.9m、深さ 0.9mを測る。底面は平坦で、長軸 1.5m、短軸 0.5mの隅丸方形を呈し、壁の立ち上がりは四方とも急角度である。また、底面には長軸方向上にピットが2個並んで検出された。ピットは共に直径約20cm、深さ約50cmを測る。覆土は暗褐色土を主体としており、下部には壁が崩落したと思われるロームブロックが多く混入していた。ピットの覆土はローム主体で締まりが乏しく、杭を埋設した痕跡と考えられる。

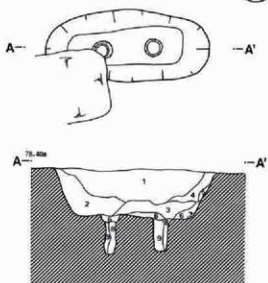
SK-2 (炉穴)

JE・JF-119グリッドに位置し、西側は一部SD-6に、東側は擾乱により破壊されていた。検出プランは不整形をしており複数の土坑が重複していると思われるが、切り合い関係の識別は容易ではなかったため同じ遺構番号を与え調査した。結果的には計5基の土坑が重複している様子が窺えた。全体の新旧関係は不明であるが、南側の2基については土層断面から推定すると旧d・新eと考えられる。覆土は暗褐色土主体で下層には焼土が堆積しており、各土坑の燃焼部の床面は被熱し赤化していた。全体の規模は南北約3.9m、東西約2m、最深部約0.5mである。また、各土坑の燃焼部と足場と推測される部分には高低差があり、特にeの土坑には僅かながら段差が認められた。(板野)



第31図 縄文時代遺構配置図

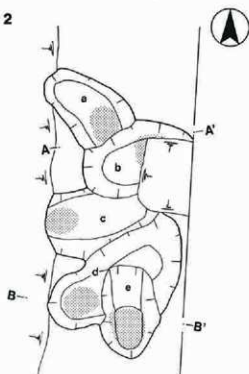
SK-1



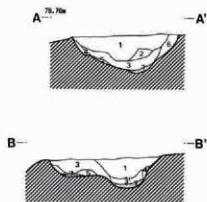
- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 黄褐色土 (暗褐色との混合土)
- 4 暗褐色土 (1より明るい)
- 5 暗褐色土 (4に比べ跡まじりや少ない)
- 6 黒褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 黄褐色土 (3よりやや明るい)
- 9 黄褐色土 (8より明るい)



SK-2



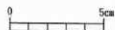
- 1 暗褐色土
- 2 明黄褐色土
- 3 暗茶褐色土
- 4 茶褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 明朱褐色土
- 7 朱褐色土
- 3' 3に準ずる



1



2



第32図 SK-1・SK-2 実測図/出土遺物

図版—54 縄文時代遺構 (1)

1. SK-1 プラン検出
(南から)



2. SK-1 完掘 (南から)



3. SK-1 土層断面
(南から)

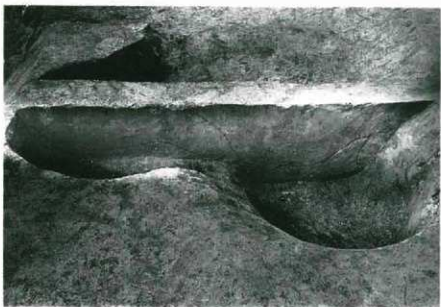




1. SK-2 完掘 (西から)



2. SK-2 土層断面
(南から)



3. SK-2 土層断面
(南から)



1. SK-1・2 完掘全景
(南西から)



2. 調査風景



32-1



32-2

V. 小 結

従来、道路・街道等についての研究は古代駅制や直線道路、近世の宿の構成、助郷の研究など、主に文献や歴史地理学からのアプローチが中心で、考古学の分野ではあまり取り上げられることがなかった。しかし最近の発掘調査では各地で道路状遺構の検出が相次ぎ、とりわけ古代の東山道・東海道・北陸道・西海道など、ある種ブーム的な状況にあり、研究会の発足、雑誌での特集号の刊行等、考古学を含めたより広範な分野からの研究が活況を呈してきた。また、近世の街道についても国の補助事業で各県での「歴史の道」調査が進められ、町並み保存や松並木・石畳の復元など観光行政も相俟って、「まちおこし」事業の核の一つとして各地で幅広く受け入れられつつある。

こうした中で、では中世の街道はというと中世城郭の分布調査との関わりから、交通路、市・宿等と集落との関係等が重要視されているにもかかわらず、具体的資料に欠けることから、その調査・研究は、やや遅れを取っているような感が否めない。このことは古代や近世の交通体系が、一部とはいえ官道として中央政権の手で整備されたことから、わが国の歴史上での普遍的な制度史等として研究対象となりやすいが、中世においては中央政権での統一的な整備等がなされなかったと考えられることから、普遍性に欠け研究対象となりがたかったことによるものと思われる。

また考古学的にも古代の官道としては幅12メートルや6メートルの規模を持ち、両側溝を有すること、直線的であること、礫による路面や路肩を整形している例等、道路状遺構としてより判断しやすいが、中世の物については兵馬や物資の移動を想定するとそれなりの幅員等を想像できるが、現時点では幹線道路といえども幅員、側溝の有無等は不規則で道路状遺構として判断しがたく、なかには硬化面や、いわゆる波板状凹凸遺構が報文中や図版に記載されていても、どちらかというところ最近までは溝跡として処理され、他の調査結果から改めて道路状遺構として追認しているような状況もある。

この意味では今回の調査は当初から推定鎌倉街道の地を道路遺構の確認という目的で実施したものであって、その調査結果においては担当者間で側溝の問題、周辺での他の調査との関係等で若干の意見の相違があるようではあるが、路面の捉えかた、その詳細な状況等についての認識は明らかにできたとと思われる。

では改めてここで今回の調査結果と問題点を整理することで小結にかえることとし、鎌倉街道の具体的な姿については今後の他の調査結果に委ねたい。

1. 鎌倉街道について

伝承鎌倉街道の調査、研究については先学諸氏の多くの著述を有するが、これらはどちらかというところ先に触れたように文献や歴史地理からの研究が主であった。しかし、近年、発掘調査の成果がこの武蔵国府近辺や埼玉・千葉県等で相次いで報告され、羅げながらその実態が明らかになりつつある。ただ鎌倉街道と称されているものは何条もあり、その道筋等によって一概に比較検討はできないと考えられるが、相対的な規模、形状を明らかにする意味で、まず他の報告例を概括したい。

①埼玉県入間市毛呂山町市場地先(1)

埼玉県教育委員会が「歴史の道」調査の一環として、その実態を明らかにすることを目的に推定鎌倉

街道上道の線上で四ヶ所を選定し、実施した発掘調査のうちの一つである。また調査地の選定にあたっては丘陵や台地上から低地に移行する傾斜地を前提にしており、現況では上幅10～12メートル、下幅5～7メートルの掘割り状の痕跡を残しているところに、これに対して直行方向で60メートルの間隔を持ち、幅0.5メートル、長さ14メートルのトレンチを2本設定し実施された。

調査の結果は現地地表下0.3メートルのところで踏み固めたような状況ではないが、やや堅めの幅3メートルの平坦面が検出され、その西側には幅1メートル、深さ0.2メートル、東側には幅1.2メートル、深さ0.5メートルの溝が検出され、この溝と平坦面はほぼ同時に形成され使用された一体の遺構であることが明らかにされている。なお、ここでの道路断面は中央部が水平、または若干窪み状に盛り上がりしており注目される。

②埼玉県比企郡小川町伊勢根地先

「歴史の道」調査で実施された四ヶ所の一つで、堀切りの上幅10～13メートル、下幅5～8メートル、深さ1～2.5メートルの現況の所に、これと直行する方向で55メートルの間隔を持って幅2メートル、長さ10メートルと13.5メートルの2本のトレンチを設定して確認調査が行われた。

調査の結果は第一トレンチで堅い細砂礫層を底面（6層下面）とするところが検出され側溝が伴っていたようである。しかし、報文中で6層下面に伴う側溝としたら溝A・Bとされているが、断面図によるとAは4層上面から、Bは3層上面から切り込まれており、この点では当初の路面には側溝が伴っていないように思われる。そして、ここでの道路断面は中央部が窪み、西国分寺地区での調査例に類似している。なお当該箇所では6層以降にも人為的な埋戻し等も伴って数次の路面が想定されている。

次に第二トレンチでは中央部で幅約3メートルの堅い小砂礫層が検出され、その両側は落ち込み、東側の底面は不規則に小さく凹凸していることが確認されている。しかし、ここではこの底面から密着あるいは若干浮いた位置とあるが近世の陶磁器の出土が報じられていることが少々気になる点である。

③埼玉県日高市下向山遺跡(2)

入間川左岸の入間台地上に立地する遺跡で当該調査区の中を鎌倉街道上道の推定路が横断している。調査の結果、推定鎌倉街道と関連する遺構として13～15号溝が考えられているが、残念ながら具体的な路面との関わり等を検討できるような遺構は検出されていない。ただ15号溝からは多数の北宋銭が出土し、その内の最も新しい初年号から溝の時期を平安時代末から鎌倉時代初頭とされ、この溝に切られた道路遺構（13・14号溝）と、他に検出されている住居跡の時期等から、9世紀後半に集落間を結ぶ道として存在した13・14号溝のルートが基礎となって13世紀以降に鎌倉街道上道として整備されたと考え、15号溝が鎌倉街道の整備に関わり掘り込まれたものではと推定されており、いわゆる鎌倉街道の起源について触れられた点で参考となる。

④埼玉県毛呂山町堂山下遺跡(3)

養護学校の建設に際し発掘調査された地区に隣接する農道が推定鎌倉街道であったことから、トレンチ状にこの農道を掘り割り道路跡が検出されたものである。

調査の結果、他遺構の確認と同じ地山ローム層上面から東端が掘り割りのため攪乱されているものの、西側は幅約0.4メートル、深さ約0.1メートルの側溝を持つ、推定幅員約4メートルの規模で、そ

の上面には黒褐色土層による硬化面が「三和土」状に広がる道路跡が検出されている。そして、この堂山下遺跡が14世紀前半頃から16世紀初頭頃迄の集落で、越辺川の渡河地点に形成された鎌倉街道の宿「若林宿」の跡と想定されているところである。

なお、当該道路は藩形断面を有し、その後も、この上面で幾度か路面が形成されているが、断面は同様に藩形を呈している。しかし側溝についてはなかったようである。

⑤埼玉県所沢市東の上遺跡(4)

この遺跡は東山道武蔵路の遺構を検出したところとして著名であるが、ここでも推定鎌倉街道の遺構が検出されている。調査は首都圏のスプロール化に伴う小規模な宅地開発等に伴って実施されているもので、このため検出遺構も点的ではあるが、これまでに第54・56・59次の調査で推定鎌倉街道跡と思われる掘割り状遺構が検出されている。

調査の結果、第54次で断面が箱壱研堀状の形状を呈し、底部は平坦、そして底上面に小砂利を伴って検出されたが、トレンチの隅であったため道幅については7メートル以上とされている。しかし、底面のみで考えれば2メートル程度しか検出されていないことになる。また、側溝についてはなかったようである。

次に59次の調査では調査区の北東隅をかすめるような状態で、幅4.5メートル長さ約5メートルの範囲で堀り込み等もなく、部分的に硬化面が検出され、硬化面上並びにそれ以外のところから礎等と共に北宋銭、南宋銭、明銭が検出されている。

なお、56次については報文がないため不明であり、また、62次の報文では55次でも検出されているようであるが、調査位置図を見るときルートから外れているようで、これについても不明である。

⑥千葉県市原市椎津中林遺跡(5)

市原市と袖ヶ浦町の行政界にあって、通称鎌倉街道と呼ばれている現道沿いに四ヶ所で調査され、このうちのBⅠ・BⅢ地区で3条の溝状の道路跡が検出されている。

調査の結果、上幅1.4メートル、下幅0.4メートル、深さ0.8メートルの規模を持つ溝0.8について、三者の中で最も古く、出土遺物はないが鎌倉街道に関わるものがあるとしたら、これを置いて他にないと述べられている。また溝の断面について壁上半部の傾斜が緩いものに対して下半部は急で、浅い溝の中央は一段と深く掘り下げたような特徴的な形状を示しているとも述べられていることから、詳細は不明である。

⑦千葉県市原市外迎山遺跡(6)

遺跡の西側を走る現道が土塁を伴うもので、鎌倉街道の有力な候補地であったため、土塁に対して2本のトレンチを設定し調査されたが、結果は中世に遡る確証はなかったとされている。

⑧千葉県袖ヶ浦市山谷遺跡(7)

低平な台地上で鎌倉街道と呼ばれる現道直下が調査され、調査区の中央で延長128メートルに及ぶ道路跡が検出されている。

調査の結果、道路跡は下幅4.5～10.6メートルの断面逆台形の掘割りの底にあって、基本的には両側

溝を有した溝心々 3.5～4.5メートル、路面幅 1.6～3.1メートルの規模のものとして記している。特に東端では中世のプライマリーな道路面が検出されたとして溝心々 2.6メートル、路面幅 1.6メートルの規模であったことが報じられている。また、開道時期は周辺の集落遺構から14世紀には存在し、現在まで続くが、側溝がほとんど埋没した後も多数の中世遺物が流入し、そして、その上層に宝永期の火山灰が堆積していることから、側溝が機能するように管理されていたのは15世紀までではと記している。

⑨東京都国分寺市武蔵国分寺跡(8)

第94次と114次で検出されており、前者では道路跡は幅 4.1メートル、深さ0.35メートルの規模で、溝状に掘削したのち底面から小石および瓦を混じる粘質土を突き固めて構築したもので、路面は非常に堅くなっていたとあり、後者についてはきわめて狭い範囲の調査で全体を明らかにできないが、道路の位置、方位及び築造方法から、前者と同一の道路で鎌倉街道の道筋に一致すると報じられている。

なお西国分寺地区での今回の調査の直後、泉町交差点の南西部で第403次の調査がなされ(9)、その結果、両側に幅 0.7メートル、深さ 0.4メートルの側溝を持ち、規模は両心々間で幅約12メートルの道路跡が検出された。築造状況はローム層を浅く皿状に掘りくぼめ、道路の方向に対して直行する細長い波板状の凹凸面を作り、さらにその上を小砂利を混ぜたロームと褐色土によって厚さ10センチ程度に突き固めて路面を作っていたと記されている。また、硬化面中に火山灰と考えられる砂粒が検出されたようであり、今後の火山灰の供給源と噴出年代の分析が注目されている。

⑩東京都府中市武蔵国分寺関連遺跡(0)

都計街路3・2・2の2号棟建設に伴う平成2年度の調査で、延長30メートルに亘って検出された、南北の方位を持つ道路跡(SX3)である。

調査の結果、2面の硬化面と、その下層から3条の溝が検出され、下層の硬化面には波板状凹凸面を作ることが明らかにされた。そして下層の溝が道路側溝とすればSD6とSD7の間が11メートル、SD6とSD8の間が15メートルということをもとに、調査担当の一人である早川泉氏は、この道路遺構が硬化面上層から北宋銭が出土していること、鎌倉街道と呼ばれる道路が溝跡のすぐ脇を通過していることなどから旧鎌倉街道と関連付けることが常識的としつつ、結論では中世鎌倉街道にも側溝が存在するのか、その規模が幅12メートル前後の大路であったのか、解決すべき課題は多いと記されている。

⑪東京都府中市武蔵台東遺跡(0)

都営川越道住宅改築に伴う平成5年度の調査で、伝祥応寺跡の北にあって、推定鎌倉街道の谷状の切り通しになっている西側斜面で実施され、硬化した道路面と西側側溝と考えられる溝が検出されている。

調査の結果、ローム層のうえに黒褐色土が強くブロック状に貼りついた硬化面が全長15メートル、幅 4メートルの範囲で検出され、これを除去したところで波板状凹凸遺構が確認されている。また台地平坦面で現道に沿い、断面箱形で、やや蛇行する全長40メートル、幅 0.5～0.7メートルの溝も検出されている。そして現道路寄りの最も堅い硬化面直上と側溝の覆土の表層で宝永の火山灰が確認されたこと、道路の掘り込みは側溝よりも新しく構築されたと考えられること、今回の発掘範囲が道路片側に限定されていたことから道路跡全体の構造、溝と同時期の道路面の状況が確認できなかったこと等が記されている。

以上、伝承・推定等の鎌倉街道に関わる調査結果について概括したところであるが、改めてここでその内容を振り返ってみると、側溝の有無や側溝を有する場合の両側溝か、片側溝か、道路幅は、道路の断面形状は、硬化面は、波板状凹凸遺構は、時期は等何れのことに因してもバラエティーに富み、当初の目的の相対的な規模、形状は分からずじまいの状況にある。しかし、このことはそれぞれの調査者の思い込みによるところから生じた結果で、交通整理ができれば、いままじ相対的なことが明らかになると思えるところである。問題はこの交通整理ということであるが、このことは調査の方法、道路の構築方法及び構造、使用期間等あらゆることに関わる根本的なことであるため、改めて後述することとした。

2. 溝と道路跡の関係について

今回の調査では7条の溝と6条の道路跡が検出されたが、それぞれがどのように関係するかを判断する必要があり、この結果、ここで道路跡が側溝を持つかどうかということ等が明らかとなり、初めて前項の各遺跡と比較することが可能となり、また交通整理の一助となるものと考えられる。

まずSD-1と道路跡との関係であるが、この溝は今回検出された溝のなかでは最も新しい時期のもので、かつ深さがあり、ある道路跡の両側溝を形成するものであったとしたら、西側の未調査区に有るのなら兎も角、東側には対応するものがないため両側溝は考えられない。では片側溝かというと、SF-1 A・B、SF-4は調査区の南では削平され消滅するが、SD-1は旧地形に沿って南でも遺存することから、これらの道路跡とは道離し、側溝とは成りえない。

SD-2はどうかというと、これについても東側では対応するものがない。またこの溝は1ブロックの北西端ではトレンチ内に現れてくるが、SF-1とそのA・B、SF-4はトレンチの壁と平行の関係であり、この意味では、これら道路跡と道離しすることになる。

SD-3は大きく蛇行するという特徴があり、この結果3ブロックで西壁の中に潜り込むことから、南北方向で直線的に走行する道路跡とは関係がないことは明らかである。

次にSD-4は後にしてSD-5であるが、1ブロックでは道路跡が遺存するにもかかわらず、消滅しており、かつ南においてもSF-1～3が遺存しているのに消滅していることは、これらの道路跡とは関係がないと判断される。ただこの溝の断面形状、覆土の堆積状況、南側で消滅しているがSF-6が高位で遺存していること、SD-6と方位、位置等関わりがあるように思えることから、SF-6との関係は完全には捨てきれないところである。

次にSD-6であるが、これについては遺構の説明のところで述べたようにSF-6の硬化層が覆土内に落ち込み、また、3ブロックではSF-6の路肩にクラックがはいり、これがSD-6の溝肩を形成していることから両者は一体的なものであることは言うまでもない。このことはこの溝の西側にはこれと対応する溝はないこととなり、ひいてはSF-1～3とは関係ないことは明らかである。しかしSF-6が最低片側溝であっても、これが両側溝かどうかは不明である。また、このことから先のSD-5は、SF-6に伴わないこととなる。

SD-7についてはSD-1と同様、最も新しい時期の溝となるが、これについても対応するような溝はなく、またSF-4に重なることから、これ以降の道路跡がないため道路側溝とはなりがたい。

最後にSD-4であるが、溝の切り込み面等や、覆土の堆積状況からSF-1に伴う可能性がある。しか

し、ここで問題であるが波板状凹凸面を持つローム面での硬化面を近江俊秀氏が云う路床と考え路面ではないとした場合③SF-1の路面はこれを覆う硬化層となるが、2ブロックの知見では波板状凹凸面を伴うローム面の硬化面は路面の範疇である。つまり、ここで云う不整形の皿状ピットをSD-4が切っていることから、ここではローム面の硬化面が波板状凹凸面を覆う硬化層の路床になりえても開道期のSF-1においては路面と云えるところである。この点で考えるとSD-4は第2期のSF-1と伴うこととなり、当初は側溝がなしということとなる。併せてSF-1Aを考えたばあい、これはSD-4の覆土を切って造成されていることからこの段階では再度、側溝を伴わなかったことになる。結果としてSF-1A・Bは共に当該調査区内では対を為すものがなかったこととなる。

次に道路跡について少し検討を加えてみると、道路跡については既に遺構説明の段階から大別したとして先入観的にSF-1～3としたところであるが、果してこの大別が良かったのか、つまり、この三者は本来一体のものであって道路使用時の水溜まりや、荒れた部分を避けて通行していた結果、3状に別れたのではという疑問が残らないでもない。この場合SD-4は幅10数メートルの大路の側溝となり、SF-2・3に側溝の伴わないことが領けるところである。しかし、ここでは遺構面近くまで掘乱れを受け具体的な各々の切り合いが十分に確認することができないことから状況判断でしかないが、まず、第2セクションの検討の段階で地山ローム層に対してSF-1の東端の立ち上がりが際立って明確に見えたことにある。これはその後、幾度かの分層、検討段階で削られ、最終的には不明確なものとなったが、このこととSF-2との間のローム層の立ち上がりが注目されたところである。この結果、全調査区のセクションをこの観点から検討したところ、各々の大別した路面、つまり硬化面と次の硬化面との間隔が南に行くにつれ狭くなること、また硬化面と次の硬化面のレベルが南ではほぼ同一面であるが北ではより東が高く、差があることが明らかとなり、加えてSF-1A・Bが幅を限っていることから道路幅を想定し、大別したところであり、平面調査の結果においても是れを肯定したところである。

この結果、一時期の道路幅は3メートル程度で利用時期により道も振れたが、南の伝祥寺横の切り通しの位置は動かないことから、平面的に3路面全体の道路痕跡を捉えた場合においては、南が狭くなり、切り通しに向かって集約されるであろうことが明らかとなり、SD-4はSF-1にのみ伴う側溝と判断したところである。

3. ま と め

以上、今回の調査の結果を先学の意見も参考にしながら検討してきたところであるが、この結果、当該地区での推定鎌倉街道はある時期に限り片側側溝を持つが、多くは側溝を持たない幅3メートル前後のものであったこととなった。このことから先の関東各地でのバラエティーのある調査結果を振り返ってみると両側溝で有ったところは①の市場地先と④の堂山下遺跡、⑤の山谷遺跡、⑥の武蔵国分寺跡第403次地点、⑦の武蔵国分寺関連遺跡のSX3であるが、まず、⑥については当該調査区と一体と云える場所であり、この点では余りにも調査結果に差がありすぎるということとなる。しかし、セクション図や層位等の記述がないため判断できないが、遺構の検出状況は当然酷似していることから「各調査区での層位と構造を比較しながら」と述べられているように、今後の整理分析の結果を待ちたい。また、⑦であるが、報文中にも有るように、いわゆる波板状凹凸面は3状の溝の上層にあること、遺物の散乱状況や重複関係を写真等で判断すると両者は若干方位が異なること、硬化面から貨幣が出土したこと等から別次元の

ものと考えられる。しかも溝の方位、状況については、むしろ東山道に近いことから、当該地域で何条か確認されている古代の国分寺周辺に敷設された道路の1条として考えたほうが理解しやすい。そして、このように上層と下層を別と考えると場合は上層、つまり波板状凹凸面を伴う道路遺構は側溝を伴わないこととなり、同時に波板状凹凸面の幅から3メートル前後の道路跡が想定できることとなる。この意味で報文中の早川氏の卓越した先見性について感服の一部に尽きる場所である。

最後に④、⑤の遺跡についてであるが、是れは各々の報文に有るように渡河地点、或いは市といった集落内での検出で、他の検出状況とは異なる場所である。また、この点では①の市場地先という地名は考えすぎであろうが、やや出来すぎの感がある。

次に道路幅についてであるが、路面の幅で特異なところは⑤、⑨、⑩の3ヶ所である。このうち⑨、⑩は先の側溝にかかる検討で明らかであり、ここでは⑤の東の上遺跡だけであるが、結論は単純なところで、当該遺跡での鎌倉街道は堀切り断面を呈している。報文での幅の記述はこの堀切りの上端から測っているもので、道路幅をどのように捉えるかの差によるところである。つまり、堀切りは堀切りであって路面ではなく、堀切り底部の硬化面なし、下幅を道幅と考えた場合には、今回の場合ではその一部分が検出されただけで道路幅を示すまでには到っていない。

なお、ここでの道路幅の検討は各々の遺跡の第1次の遺構に対してであって、多くの遺跡においてその後の改修等を重ね、基本的には宝永の火山灰の被覆や、寛永通宝の出上から18世紀頃まで利用されていたようであり、この意味においては後世に拡張されたところがあるやもしれないが、今回の調査でもそうであるが目的の主たるところは道路の名称に示された鎌倉期の鎌倉街道の実態の把握に有ることである。

以上、これまでに関東各地で検出されてきた伝承・推定鎌倉街道の相対的状況について溝や道路跡から検討してきたところであるが、この結果、鎌倉街道は3メートル前後の幅を持ち、市や集落にかかるところでは側溝を持つことがあるが、一般的には側溝を持たない道路であったであろうことが明らかになったところである。

なお、最後になったが、ここでの推定鎌倉街道の開通時期についてであるが、現推定路線では国分尼寺跡との関係が問題で、その消滅についての資料は明らかでないが、国分寺の消失と再建、伝祥庵寺跡等、沿道の遺跡の消長等から考え、凡そ13世紀末頃が想定できるのではなからうか。この意味においては残念ながら「すお鎌倉」とはなりがたい。

今回の調査地は北の恋ヶ嶺と南の伝祥庵寺の両処にある切り通しの丁度中間的な位置にあり、両処間の距離がさほどないところから、当初はより明確な形で鎌倉街道を捉えることができるのではと考えていたが、この考えは甘かったようであった。しかし、調査区内での擾乱は遺構にとっては不幸であったかもしれないが、我々にとっては大いに幸いしたところで、単に平面だけでの判断でなく事前に十分セクションの検討が可能であったからである。また、当該地は調査区の北東が高く、それぞれ西、南に低くなった斜面地に鎌倉街道が通過していたことからトレンチ内での遺構の遺存状況が異なっていたこともまとめるにあたって幸いした。反面、ここでの遺構の分析結果を考えた場合には各々の溝は独立していたと考えたことから、それではその溝の性格はというと、是れが新たな問題であり、SF-6の検出も同様である。この硬化面の形成、波板状凹凸面の性格等問題は山積しているが、これらに対して何ら答えることができなかったことについては調査の機会を提供して戴いた多くの方々申し訳ないと感じるところで、今後の課題としたい。

(近藤)

引用・参考文献

- (1) 『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第一集 埼玉県教育委員会 1983
- (2) 『日高市 谷津・二反田・下向山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (3) 『毛呂山町 堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (4) 『第53次・54次 東の上遺跡』所沢市埋蔵文化財調査報告書第3集 埼玉県所沢市教育委員会 1995
『東の上遺跡 第59次調査』所沢市埋蔵文化財調査報告書第4集 埼玉県所沢市教育委員会 1995
- (5) 宮本敬一 「稚津・中林遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』 市原市文化財センター 1986
- (6) 『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』 市原市文化財センター調査報告書第20号 平和農産工業株式会社、市原市文化財センター 1987
- (7) 柴田龍司 「鎌倉街道と市一袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から一」『研究連絡誌第41号』 熊千葉県文化財センター 1994
- (8) 有古重蔵 「国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』 国分寺市 1986
- (9) 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 XXI』—国分寺市公共下水道面整備西元地区5・6号工事に伴う尼寺西・南方地区他の調査— 国分寺市道路調査会 1996
- (10) 『武蔵国分寺間連遺跡の調査II』 南方地区・府中市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う平成二年度発掘調査概報 武蔵国分寺間連（府中市計画道路3・2・2の2号線）遺跡調査会 1991
- (11) 『武蔵台東遺跡発掘調査概報4』武蔵国分寺北方地区一都宮川越道住宅改築に伴う平成5年度発掘調査概報 都宮川越道住宅遺跡調査会 1994
- (12) 近江俊秀 「道路道橋の構造—波板状凹凸面を中心として」『古代文化』第47巻第4号 1995

VI. 総 括

今回の調査は、平成5年度末に国分寺市教育委員会によって実施された試掘調査の結果に基づき、本調査の対象範囲が定められ、それによって調査計画が立案され本調査が実施された。

調査区は、東西幅19.5メートル、南北の長さ129メートルで設定され、7条の溝と6面の道路面が検出された。かつて当該地に存在していた集合住宅による大きな複乱が、遺構面を東西方向に切る形で7カ所あったが、この断面が調査の当初から層位の確認に役立ったことは不幸中の幸であった。我々は、まずこの各断面を精査し、観察や分析を充分におこなって、最上面の路面から最下面の路面までの層序や各路面の横の広がり、及び溝との関連や新旧関係の把握に力を入れ多くの時間を費やした。

道路は、最初に作られてから廃絶されるまで、その期間が長ければ長いほど、幾層もの路面が形成されており、その路面は蛇行したり、離れたり、重複したりしている。調査では、それぞれの路面が幾つあるか、その前後関係や溝との関連はどうであったか、更にはどのような造り方をしているか等を明らかにすることに最大限の努力をすることが必要である。上層から掘り下げていくと、土層や路面を面としての広がりで見とらえることは大変困難である場合が多く、どうしてもセクションを切って、断面で層位を把握すると同時に面としての広がりを把握し、溝を伴う場合は路面との関連を明らかにしながら、掘り進めて行かなければならない。セクショントレンチも道路に直交するものだけでなく、必要に応じて平行方向にいれなければならないこともある。また、溝が何条か検出された場合、出土遺物によって構築時期が判断できる場合であっても、それぞれの溝の覆土の比較や切り込み面の土層等から、できるかぎりそれぞれの遺構の構築時期を判定し、片側側溝なのか、両側側溝なのか、あるいは側溝を伴わない路面であったのかを明らかにしていくことが大切である。こうした事は、発掘調査の常識として誰でも心がけ実行しているにも拘わらず、調査報告書を読んでみると、こうした手順を分かり易く説明しながら解説したものが以外に少ないことに気が付く。検討した資料の内容や状況説明が十分に説明されないまま、結論だけを述べているものが多い。中には、最終調査面まで掘り下げ、結果的に調査範囲の両端に2条の溝が残る間に路面が検出されれば、両側溝をもつ幅何メートルの道路であると断定したのではあるまいかと疑いたくなるほど、説明不足の報告例もある。

路面のとらえ方についても、硬化面の範囲だけを路面としてとらえ道路幅として云々して良いかという問題がある。硬化面がどのようにして造られたかによって諸説が分かれるところであるが、その成因として人々が長期間にわたって同じところを往来した結果踏み固められてきたものか、道路の構築時に版築等の工法により突き固めて造られたものかによっても違ってくる。特に硬化面の下から波板状の凹凸が連続して一定の幅を持った一条の筋として検出された場合、その凹面に小礫が敷かれ堅く締まった状態になっている調査例では版築されていると判断される場合もある。堅く突き固めて道路面を構築したのであれば、その硬化面の下からは、ある程度整地された路床が検出されるであろう。これらの問題は、その道路がどのような地理的環境の場所に造られているかによって違うであろうから、一概に一般論として云々できないと思われる。低湿地や斜面に造られた道路は突き固める必要があったであろうし、平坦な地形であっても雨水の流路や水溜まり等の状況で、ある時期に一定の範囲で突き固める工事が行われたかも知れない。今回の調査区では、波板状の凹凸面がどのようにして造られたかを明らかにする資料が得られなかったのは残念であるが、既に他の報告例にあるように、道路の構築時に道路の基礎を固める一つの工法として造られたものであろうとか、修繕で重い物を運搬する際に丸太を敷いた間

に残った梔子の跡であろうというような判断はできなかった。今後検討して行かなければならない重要な課題であると考え。

今回の調査区の東約100メートル離れた武蔵国分寺北西地区遺跡で、古代の推定「東山道武蔵路」が南北330メートルにわたって検出されたが、古代の官道として造られた東山道は、当初から心々距離12メートルの両側溝を持つ道路として構築され、ほぼ南北一直線に伸びた計画道路である。この道路跡と鎌倉街道の道路跡を比較してみると、検出された溝の在り方が大きく異なるようである。この両者は道路として利用された時代や期間が異なることは勿論であるが、当初に造られた時に、強い政治権力によって大土木工事として造られたのが東山道であり、古代律令制度が崩れるまでは官営で駅や路面の補修工事が行われ、道路として管理されていたと考えられている。道路両端の溝は、切り込みの層位や覆土の比較検討の結果、同時期に道路の両側溝として造られたことが明確であった。一方、鎌倉街道は各集落や地方を結ぶ道路が発展して、鎌倉へ通じる道路となったものであると考えられる。多くの報告例をみると、鎌倉街道の道路跡から検出される溝は、地域によっては明らかに側溝として造られたものもあるが、目的が明確でない溝が検出される地域もある。それぞれの溝の規模も様々であり、道路幅や路面の状況も各種各様である。鎌倉街道全体として道路の在り方のイメージが捕えがたい状況である。こうしたことから、中世以降の道路の実態を明らかにするには、当時の人々の道路に対する意識を理解することが先決ではあるまいか。現状では明らかになっていないが、当時の道路の管理は誰が、どのような時に、どのような方法で行っていたのであろうか。このことと道路跡に残された遺構とは大きな関連があるはずである。一本の街道がそれぞれの地域の中心的な集落を通る部分と、集落間の山林原野を通る部分とは同じ道路面に違いがあるはずであり、低湿地や傾斜地と平坦な台地上とでも違うであろう。村の中を通る部分はどのような組織で維持管理が行われたのであろうか。村はずれの山林原野を通る部分の補修維持管理はどのようになされたのであろうか。第2次世界大戦前までの農村では、地域の人々が集まって勤労奉仕による道普請が日常茶飯事のように行われていたり、自分の家の前を通る公道は各自が除草や清掃をしたり簡単な排水工事をを行うのは常識とされていた。中世や近世ではどうであったのだろうか。現代の人々が道路に対して持っている意識と、中世の人々が持っていたそれとは、大きな違いがあったものと考えられる。中世以降における政治支配体制の中での道路管理や、地方の権力者による道路管理と、村落共同体としての働きなど、不明の部分が多い。文献史料からは殆ど明らかにされていない鎌倉街道の築造工事の様子や、維持管理の具体的な方法を少しでも明らかにするには、発掘調査による考古学的方法しか残されていない現在、我々に課せられた大きな課題である。(持田友宏)

VII. おわりに

“鎌倉街道”を「関東地方・中部地方に集往する東国御家人と鎌倉を結ぶ道路」と説いた新城常三氏は（『鎌倉時代の交通』1967年）、「鎌倉への物資の輸送管」の役割をも有していたと考えられた。鎌倉幕府にとって、京と鎌倉を結ぶ東海道と並んで鎌倉街道を重要視していたことは当然であった。

鎌倉街道の呼び名は、近世に入って一般化されたものと考えられており、鎌倉古街道・鎌倉道、あるいは鎌倉海道とも称されていたようである。中世には「上路（武蔵路）」「中（の）道」「下（の）道」の3つの幹道がみえているが、この幹道が、近世に入って鎌倉街道と呼ばれるようになったのであろう。

鎌倉に幕府が設置された鎌倉時代、政治の中心地と各地を結ぶ道路の整備は政治体制の維持にとって不可欠の要素であった。とくに、東国御家人を基盤とする幕府にとって、鎌倉街道に寄せる関心はきわめて高かったと考えられよう。

このような鎌倉街道の道筋については、古くから各地域の郷土史家によって研究され、実際の伝承地をめぐる問題について論議されてきた。その研究の視点は「鎌倉街道伝承地」の踏査による歴史地理学的なものが支配的であり、また、『吾妻鏡』『太平記』『梅松論』などによる文献史的な検討と分析が主であったといえるであろう。

伝承名のつけられた「道」の組織的調査は、「歴史の道」調査によって着手され、それを契機として各地で道跡に強い関心が寄せられるようになってきた。

考古学にとって「道」の調査は、古代の幹線道路比定地の発掘によって明瞭な道路遺構が検出され、さらに関連施設が発見されるにおよんで、いよいよ、重要な課題として浮上してきた。古代の東海道・東山道・西国道など実際の道路跡が検出されてきたのである。

それに対して中～近世の「道」の考古学的調査はほとんど行われていない。しかし、近頃、伝承地を発掘し如上の問題究明を意図する方向も漸く試みられるようになってきた。とくに、鎌倉街道伝承地をめぐる発掘調査は、千葉・埼玉そして東京などにおいて実施されるようになってきた。いづれも伝承地を対象とするものであるが、相応の成果を挙げつつあるといえるであろう。

この度、古代の東山道武蔵路に比定される道路跡の西方で試みられた発掘によって、推定鎌倉街道跡の一部が検出されたことは、漸く考古学界で着目されてきた「道」の発掘に一過例を加えることになったのである。

発掘の範囲は東西19.5m、南北129mの範囲であるが、そこより6面にわたる道路跡の存在が明らかにされ、それに伴うと考えられる溝7条も検出された。これらの面と溝の年代については端的に年代を示す資料を得ることはできなかったが、発掘調査の経過とその総括的な観察によって、ほぼ中世に比定することが可能な「道」の状態を把握することができたのは幸いであった。

“鎌倉街道”跡は、幅3m前後、と推定され、大部分は側溝をもたないことが知られたのである。

これは古代の東山道武蔵路の幅12m・9mと比較すると、3乃至4分の1の道路幅である。しかし、この道幅が鎌倉時代の鎌倉街道の実態を示すものであるかといえば、そうとも断定できないであろうが、発掘地域における状況がこのような状態であったことを示す資料として提示されることになった。

鎌倉街道は、鎌倉と東国各地を結ぶ動脈であり、軍勢と物資の移動の管であるならば、この度の結果は少し貧弱であるかの感を禁じえない。今後における類例の発掘事例が期待されるゆえんである。ここでは、とりあえず幅3mの中世の「道」を報告するに止どめたい。（坂詰 秀一）

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡 発掘調査報告書

— 推定鎌倉街道 —

発行日 1996年3月25日
編著者 西国分寺地区遺跡調査団
(団長 坂詰秀一)
発行者 西国分寺地区遺跡調査会
Ⓞ185 東京都国分寺市泉町2-1
Tel 0423-25-1767
印刷所 南栄光社

令和4年(2022)2月2日 デジタル版作成